

中環状道路整備事業『都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線』に伴う埋蔵文化財発掘調査（5）

筑後國府跡

—第298次発掘調査報告—

令和4(2022)年10月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、福岡県第三位の人口を誇る県南の中核市です。久留米市は、市民が主役のまちづくりを進め、市民の夢や希望が実現する生活空間を作ることにより、市民がこの地に誇りと愛着をもって住み続けたいと思えるまちを創ることを目指しています。その一方で、古くから水路と陸路の要衝だった久留米市には、先人たちの残した文化遺産が数多く残っています。久留米市ではその文化遺産の究明を図りつつ、活用を進めているところです。

今回、本書で報告する筑後国府跡は、飛鳥時代から平安時代にかけて設置された筑後国府の故地です。古代の筑後国の政治経済の中核となった遺跡であり、今日の久留米市のルーツとなった国指定史跡です。筑後国府跡の西部を南北に走る「都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線」建設に先立って、久留米市は平成19年度から発掘調査を実施してきました。

本書は、令和2年度の調査成果を収めた通算5冊目の報告書です。今回の調査では、弥生時代の竪穴建物をはじめ、地業痕跡が良好に残る古代の道路跡、貿易陶磁器が出土した中世の道路跡、近世の墓域、ガラス瓶が出土した昭和初期の廃棄土坑、さらに地震の痕跡など、多種多様な時代の遺構と遺物を発見しました。これらの成果が地域史の究明や普及、史跡を生かした地域振興、久留米の歴史や文化財保護に対する市民の理解などに、幅広く活用されることに貢献できれば幸いです。

なお今回の発掘調査に際して、地域住民と関係者の方々に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和4年10月31日

久留米市教育委員会

教育長 井上 謙介

例 言

1. 本書は都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線建設に先立ち、令和2年度に実施した、筑後国府跡第298次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は久留米市都市建設部道路整備課の依頼を受けて、久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 本書に掲載した発掘調査の略記号はTKH-298、調査番号は202002である。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、西と発掘作業員の中村麻衣、藤木幸子、山田治代、山口誠也が行い、一部を発掘作業員の國武三歳が補助した。遺構配置図は、株式会社CUBIC製「遺構くん cubic」で作成し、土層断面図や遺物出土状況は手測りで作成した。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位はすべて座標北を示す。座標は、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正を行った。
6. 遺構実測図と土層図の浄書は、西と文化財資料整理員の今村理恵、宮崎彩香、出土品整理作業員の湯川琴美、吉武大輝が「遺構くん cubic」と米国アドビ製の製図ソフト「Adobe Illustrator」で行った。
7. 土層および出土遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、昭和45年）に準拠した。
8. 個別の遺構写真は、一部を江島伸彦が撮影したほかは、西がキャノンEOS 6D Mark IIデジタルカメラを用いて撮影した。空中写真の撮影は、有限会社空中写真企画に委託してドローンで撮影した。写真は掲載にあたり、米国アドビ製の画像編集ソフト「Adobe Photoshop」を用いて西が編集した。
9. 本書に使用した遺構の略記号は、SA-柵列、SD-溝、SF-道路遺構、SI-竪穴建物、SK-土坑、SP-ピット、ST-土墳墓、SX-その他の遺構を示す。
10. 波板状凹凸面の名称は、波板状圧痕や波板状痕跡、波板状遺構がある。本書では、『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』（文化庁文化財部記念物課、平成25年）で用いられている波板状凹凸面を用いた。
11. 遺物実測図と遺物観察表、写真図版の遺物番号は共通である。
12. 遺物実測図は、西と今村、宮崎、出土品整理作業員の江口里織、山元博子、吉武が作成し、「Adobe Illustrator」で浄書を行った。拓本は、出土品整理作業員の井上千恵美、田中千佐子、野口晴香、横井理恵が作成した。
13. 遺物実測図の凡例は、下記のとおりである。
 - ・断面の黒塗りは須恵器、灰色塗りは瓦器、斜線は鉄製品を示す。
 - ・調整の線は、調整の線は、直線「—————」が明瞭な稜線を、間隔の長い破線「—— ————」が不明瞭な稜線を、一点鎖線「— — — —」が回転ナデを示す。
14. 遺物観察表は、遺物実測図の記述を元に、西が作成した。その凡例は下記のとおりである。
 - ・黒色土器のうち、A類は内黒土器、B類は両黒土器を意味する。
 - ・法量の〔 〕は復元値を、（ ）は残存値を、— は欠損または該当する部位が無いことを示す。

・色調は、『新版 標準土色帖』に準拠した。ただし、ガラス製品など『新版 標準土色帖』に該当しない色調がある場合は、日本工業規格「物体色の色名」に準拠した。

・胎土の砂粒は、0.5mm 未満を微砂粒、1mm 未満を細砂粒、1mm 以上を砂粒とした。

・遺物番号は、久留米市市民文化財部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) $\frac{202002}{\text{調査番号}} \quad \frac{000001}{\text{登録番号}}$

15. 貿易陶磁器の分類は、『大宰府条坊跡 XV 一陶器分類編一』太宰府市の文化財第 49 集（太宰府市教育委員会、平成 12 年）に拠った。
16. 古瓦の叩きの分類は、『筑後国府跡 一平成 11 年度発掘調査概要一』久留米市文化財調査報告書第 162 集（久留米市教育委員会、平成 12 年）に基づいた。ただし、本書に掲載した古瓦の格子目叩きは、全て前掲書の格子文叩き 2 にあたるので、単に「斜格子文叩き」とした。
17. 遺物写真は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて西が PENTAX K-1 Mark II デジタルカメラで撮影し、「Adobe Photoshop」を用いて編集した。
18. 出土遺物および図面・写真などの記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵保管されている。
19. 調査にあたり、福岡県教育庁文化財保護課の杉原敏之氏と坂本真一氏、九州歴史資料館の小田和利氏（所属は、いずれも当時）には、現地で種々のご教示を賜った。
20. 表紙題字は、原口かすみ（元・久留米市発掘調査整理臨時職員）の揮毫による。
21. 本書の執筆と編集は西が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 令和2～4年度の調査の経過	1
2. 調査の体制	3
II. 位置と環境	5
1. 位置と地理的環境	5
2. 歴史的環境	6
III. 調査の記録	9
1. 調査の目的と経過	9
2. 基本層序	10
3. 検出遺構	10
(1) 弥生時代の遺構	10
(2) 古代の遺構	12
(3) 中世の遺構	25
(4) 近世の遺構	31
(5) その他の遺構	32
4. 出土遺物	33
IV. 総括	73
1. はじめに	73
2. 遺構の変遷について	73
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 都市計画道路3・4・18号合川町津福本町 線事業位置図(1/10,000)	2	第8図 S I 20実測図・土層図(1/40、1/20)	11
第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	5	第9図 S K 154実測図・土層図(1/40)	12
第3図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	7	第10図 S D 1・120土層図・S D 115断面図(1/20)	13
第4図 筑後国府跡第298次調査遺構配置図(1/200)	折込	第11図 S D 140・165土層図(1/20)	14
第5図 筑後国府跡第298次調査主要遺構配置図(1/200)	折込	第12図 S D 155・156土層図、S D 160断面図(1/20)	15
第6図 調査区割図(1/800)	9	第13図 S D 170断面図・土層図、S D 190・446・453 土層図(1/20)	17
第7図 調査区北東部壁面土層図(1/40)	10	第14図 S D 215土層図(1/20)	18

第15図	S D 365・405・446断面図、S D 190・446・475、 S X 372・373土層図 (1/20、1/30) ……………	19	第30図	出土遺物実測図③ (1/4) ……………	36
第16図	S D 475、S X 372土層図 (1/20) ……………	20	第31図	出土遺物実測図④ (1/4) ……………	38
第17図	S D 365・S F 445実測図・土層図 (1/40、1/20) ……………	折込	第32図	出土遺物実測図⑤ (1/4) ……………	39
第18図	S I 133実測図・土層図 (1/40、1/20) ……………	21	第33図	出土遺物実測図⑥ (1/4) ……………	41
第19図	S K 80・85・241・400実測図・土層図 (1/40) ……	22	第34図	出土遺物実測図⑦ (1/4) ……………	42
第20図	S P 210・375実測図 (1/20) ……………	24	第35図	出土遺物実測図⑧ (1/2、1/4) ……………	44
第21図	S X 125実測図、S X 150土層図 (1/20) ……………	24	第36図	出土遺物実測図⑨ (1/4) ……………	45
第22図	S D 2 実測図 (1/20) ……………	25	第37図	出土遺物実測図⑩ (1/2、1/4) ……………	46
第23図	S D 40・60土層図、S D 50土層図・断面図(1/20) ……………	26	第38図	出土遺物実測図⑪ (1/4) ……………	48
第24図	S D 127土層図・断面図 (1/20) ……………	28	第39図	出土遺物実測図⑫ (1/2、1/4) ……………	49
第25図	S K 14実測図、S K 235実測図・土層図 (1/40) ……………	29	第40図	出土遺物実測図⑬ (1/2、1/4) ……………	51
第26図	S P 35・173実測図、S X 372土層図 (1/20) ……	30	第41図	出土遺物実測図⑭ (1/4) ……………	53
第27図	S T 6 実測図 (1/40) ……………	31	第42図	出土遺物実測図⑮ (1/4) ……………	58
第28図	出土遺物実測図① (1/4) ……………	34	第43図	出土遺物実測図⑯ (1/4) ……………	56
第29図	出土遺物実測図② (1/4) ……………	35	第44図	出土遺物実測図⑰ (等倍、1/2) ……………	62
			第45図	第1～4期主要遺構配置図 (1/400) ……………	74
			第46図	第5・6期主要遺構配置図 (1/400) ……………	76
			第47図	第7～11期主要遺構配置図 (1/400) ……………	78

表 目 次

第1表	合川町津福本町線に伴う筑後国府跡発掘調査一覧表 ……	1	第7表	出土遺物観察表⑥ ……………	68
第2表	出土遺物観察表① ……………	63	第8表	出土遺物観察表⑦ ……………	69
第3表	出土遺物観察表② ……………	64	第9表	出土遺物観察表⑧ ……………	70
第4表	出土遺物観察表③ ……………	65	第10表	出土遺物観察表⑨ ……………	71
第5表	出土遺物観察表④ ……………	66	第11表	出土遺物観察表⑩ ……………	72
第6表	出土遺物観察表⑤ ……………	67	第12表	第298次調査主要遺構の変遷 ……………	73

図 版 目 次

図版 1	(1) 第298次調査前全景 (北から) (2) 第298次調査区北西部全景 (南上空から) (3) 第298次調査区北東部全景 (南上空から)	図版 2	(1) 第298次調査区南部全景 (西上空から) (2) 第298次調査区西部全景 (西上空から)
		図版 3	(1) 調査地点から北方を望む (南上空から)

- (2) 調査地点から南方を望む(北上空から)
- 図版4 (1) S I 20遺物出土状況(西から)
(2) S I 20貼床検出状況(南東から)
(3) S I 20完掘状況(南東から)
(4) S K 154完掘状況(東から)
(5) S A 252東部完掘状況(北西上空から)
(6) S D 1 東部完掘状況(北西から)
(7) S D 1 西部完掘状況(東から)
(8) S D 115完掘状況(南東から)
- 図版5 (1) S D 120完掘状況(北から)
(2) S D 140完掘状況(北西上空から)
(3) S D 140北端・S D 165土層(南西から)
(4) S D 165完掘状況(北西から)
(5) S D 155・156完掘状況(南東上空から)
(6) S D 160礫出土状況(西から)
(7) S D 170完掘状況(北西から)
(8) S D 190・453・446・475完掘状況(北東上空から)
- 図版6 (1) S D 190・446・475、S X 372土層(北から)
(2) S D 190北端遺物出土状況(東から)
(3) S D 215北西部完掘状況(南東から)
(4) S D 215中央部完掘状況(南東から)
(5) S D 215南東部完掘状況(北西から)
(6) S D 215土層(北西から)
(7) S D 405東部土層(東から)
(8) S F 445硬化面・波板状凹凸面検出状況(北西から)
- 図版7 (1) S F 445波板状凹凸面P 10土層(南東から)
(2) S F 445波板状凹凸面礫出土状況(南東から)
(3) S D 365・S F 445完掘状況(北西から)
(4) S I 133検出状況(東から)
(5) S I 133焼土土層(西から)
(6) S I 133完掘状況(西から)
(7) S K 80・85完掘状況(北西上空から)
(8) S K 241検出状況(南西から)
- 図版8 (1) S K 241完掘状況(西から)
- (2) S K 400完掘状況(北東から)
- (3) S P 210遺物出土状況(北から)
- (4) S P 375遺物出土状況(北西から)
- (5) S X 125検出状況(北から)
- (6) S X 125土層(東から)
- (7) S X 150検出状況(南西から)
- (8) S X 150土層(南東から)
- 図版9 (1) S D 2 完掘状況(北西から)
(2) S D 2 土層(北西から)
(3) S D 2 遺物・礫出土状況(南東から)
(4) S D 2・40・60完掘状況(北東上空から)
(5) S D 40・60南東部完掘状況(南東から)
(6) S D 40・60北西部完掘状況(南東から)
(7) S D 40南東部土層(南東から)
(8) S D 50完掘状況(南東から)
- 図版10 (1) S D 127北部～中央部完掘状況(北西から)
(2) S D 127南部完掘状況(北西から)
(3) S D 127中央部礫出土状況(東から)
(4) S D 127中央部土層(北西から)
(5) S K 235完掘状況(北東から)
(6) S K 235・S D 40北西部土層(南東から)
(7) S P 35遺物出土状況(北東から)
(8) S P 173遺物出土状況(南西から)
- 図版11 (1) S X 372・373検出状況1(西上空から)
(2) S X 372・373検出状況2(北西から)
(3) S X 372・373北端検出状況(南から)
(4) S X 372南端土層(北から)
(5) 近世墓群近景(東上空から)
(6) S T 5 掘削状況(南西から)
(7) S T 6 完掘状況(北から)
(8) S T 8 掘削状況(東から)
- 図版12 (1) S T 9 掘削状況(西から)
(2) S T 10 掘削状況(南から)
(3) S T 11 掘削状況(東から)

	(4) S T15掘削状況 (西から)	図版24	出土遺物12
	(5) 調査区隣接地の墓石転用石列 (南西から)	図版25	出土遺物13
	(6) S X175埋甕出土状況 (北東から)	図版26	出土遺物14
	(7) 断層跡検出状況 (西から)	図版27	出土遺物15
	(8) 地割痕断面 (南東から)	図版28	出土遺物16
図版13	出土遺物 1	図版29	出土遺物17
図版14	出土遺物 2	図版30	出土遺物18
図版15	出土遺物 3	図版31	出土遺物19
図版16	出土遺物 4	図版32	出土遺物20
図版17	出土遺物 5	図版33	出土遺物21
図版18	出土遺物 6	図版34	出土遺物22
図版19	出土遺物 7	図版35	出土遺物23
図版20	出土遺物 8	図版36	出土遺物24
図版21	出土遺物 9	図版37	出土遺物25
図版22	出土遺物10	図版38	出土遺物26
図版23	出土遺物11		

I. はじめに

1. 令和2～4年度の調査の経過

本書に掲載した発掘調査は、中環状道路整備事業「都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線」に伴う事前の発掘調査である。津福本町から国道210号を結ぶ通称「中環状線」の整備事業は、久留米市都市建設部道路課（現・道路整備課）を事業主体として実施されている。十三部交差点から国道210号までの約0.8kmの区間は、周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡を横切るため、久留米市文化観光部（平成23年度以降は市民文化部）文化財保護課は、第1表のとおり平成19年（2007）から発掘調査を実施してきた。発掘調査に至る経緯の詳細は『筑後国府跡』（久留米市文化財調査報告書第267集、平成20年）に、令和2年度までの調査の経過は第1表に示した報告書に掲載したので参照願いたい。本章では、本書に掲載した令和2・3年度の発掘調査と整理作業、および令和4年度の整理作業と報告書作成の経過について述べる。

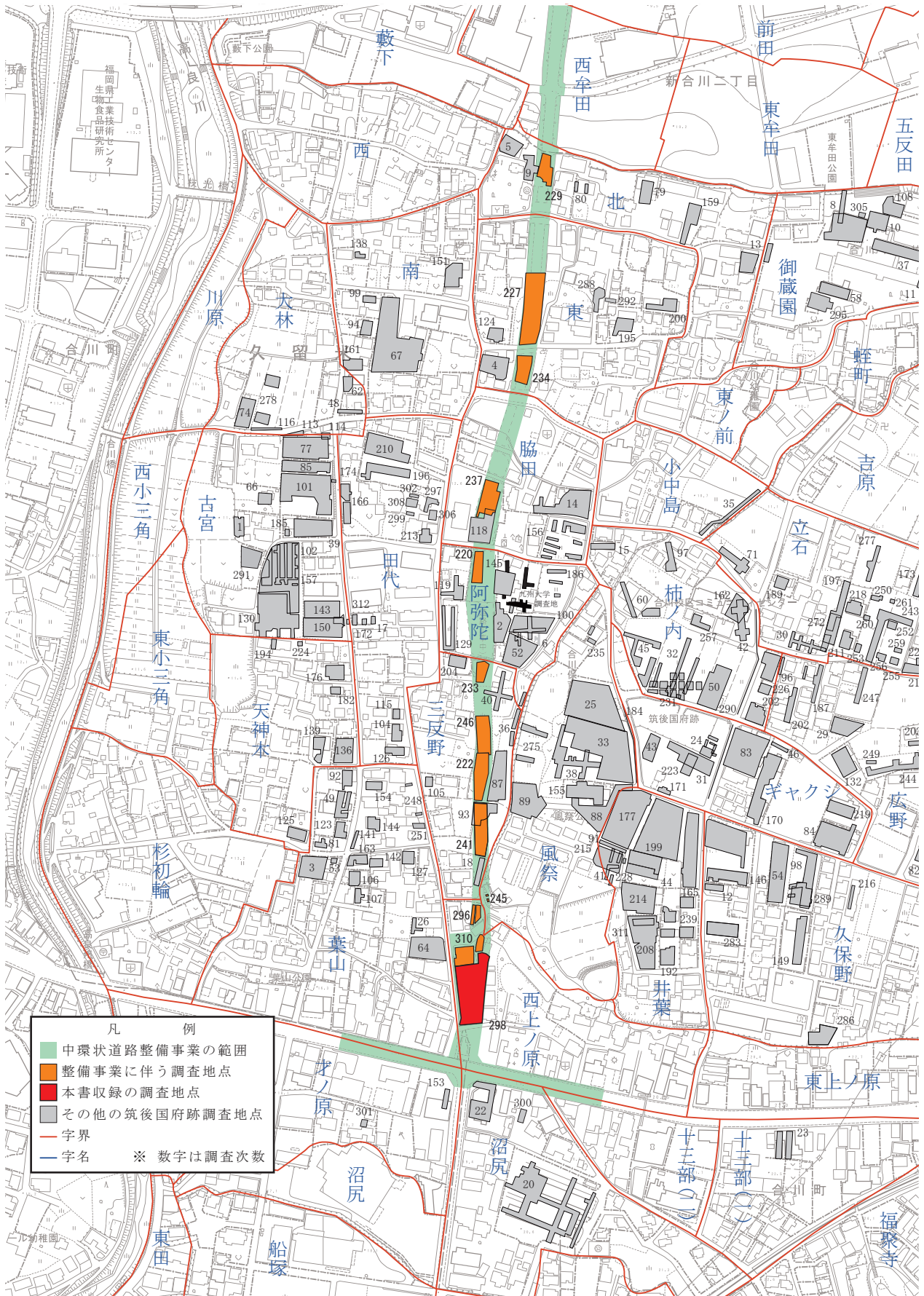
令和2年度は、整理作業と試掘確認調査、筑後国府跡第298次調査を実施した。整理作業は、令和2年（2020）4月1日から令和3年（2021）3月31日まで西町文化財整理事務所で行った。試掘確認調査は6月10日と7月20日に行い、合川町65-1・69-1・70で遺構を確認した。筑後国府跡第298次調査は、令和2年5月7日から12月10日まで実施した。

令和3年度は、整理作業と筑後国府跡第310次調査を実施した。整理作業は、令和3年4月1日から令和4年（2022）3月31日まで、久留米市埋蔵文化財センターと西町文化財整理事務所で行った。筑後国府跡第310次調査は、令和3年4月14日から7月7日まで実施した。

令和4年度は、整理作業と報告書作成を令和4年4月1日から令和4年10月31日まで久留米市埋蔵文化財センターと西町文化財整理事務所で行った。令和2年度の調査成果を収めた本書を刊行した。

第1表 合川町津福本町線に伴う筑後国府跡発掘調査一覧表

調査年度	調査回数	調査番号	調査期間	地区名	調査面積	担当者	久留米市文化財調査報告書
H19	第220次調査	200713	20070717～20070829	阿弥陀	360㎡	神保公久	第267集
H19	第222次調査	200719	20070910～20080228	北	853㎡	神保公久	第295集
H20	第227次調査	200814	20080717～20081204	東	1,100㎡	神保公久	第315集
H20	第229次調査	200822	20081114～20090213	東	322㎡	白木 守	第295集
H21	第233次調査	200905	20090526～20090602	三反野	163㎡	水原道範	第295集
H21	第234次調査	200910	20090730～20091013	東	340㎡	神保公久	第315集
H21	第237次調査	200915	20091022～20100118	脇田	380㎡	神保公久	第315集
H22	第241次調査	201010	20101004～20110318	三反野	377㎡	神保公久	未報告
H23	第245次調査	201106	20110822～20110914	風祭	113㎡	神保公久	第435集
H23	第246次調査	201109	20110907～20111128	三反野	400㎡	江頭俊介	第435集
R元	第296次調査	201909	20190911～20191011	西上ノ原	150㎡	江頭俊介	第435集
R2	第298次調査	202002	20200507～20201210	西上ノ原	1,073㎡	西 拓巳	本書
R3	第310次調査	202104	20210414～20210707	西上ノ原	369㎡	江頭俊介	未報告



第1図 都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線事業位置図 (1/10,000)

2. 調査の体制

本書に掲載した第298次調査に関する、令和2～4年度の体制は下記のとおりである。

【令和2年度：試掘確認調査、第298次調査】

調査委託：久留米市 都市建設部道路整備課

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：久留米市 市民文化部

文化財保護課

教育長：井上 謙介

部長：竹村 政高

次長：西村 信二

課長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主査：水原 道範

事務主査：小澤 太郎

事前確認担当：熊代 昌之

庶務担当：市村久美子

箔谷 綾（任期付職員）

発掘調査担当：西 拓巳

発掘作業員

青木佐智子、秋永 絹子、案納 哲夫、石橋 康子、大倉隆太郎、居石 寿智、鐘ヶ江 清、蒲池 稔、川原 初美、國武 三歳、久保田英嗣、合戸 喬一、進上 裕永、高尾 春代、高松 登、田中 樹子、田中とし子、中村 麻衣、野村 泰夫、原口 貞子、平田 広之、日比生 勝、藤木 幸子、堀江 俊文、本田 正好、松尾 朱美、丸山 幸、溝口 輝男、柳 鈴子、矢野 崇徳、山口 誠也、横山 満浩、渡辺しげ子

【令和3年度：整理作業】

調査委託：久留米市 都市建設部道路整備課

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：久留米市 市民文化部

文化財保護課

教育長：井上 謙介

部長：竹村 政高

次長：深堀 尚子

課長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主査：水原 道範

事務主査：小澤 太郎、江島 伸彦

庶務担当：市村久美子

箔谷 綾（任期付職員）

整理担当：西 拓巳
今村 理恵（文化財資料整理員）
宮崎 彩香（文化財資料整理員）

【令和4年度：整理作業、報告書作成】

調査委託：久留米市 都市建設部道路整備課

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：久留米市 市民文化部

教育長：井上 謙介
部長：竹村 政高
次長：深堀 尚子
文化財保護課 課長：水島 秀雄
課長補佐：田中 健二
課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦
主査：小澤 太郎
事務主査：江島 伸彦
埋蔵文化財センター担当：水原 道範（再任用職員）
庶務担当：市村久美子

本田 岳秋、辻 貴子
整理・報告書作成担当：西 拓巳
今村 理恵（文化財資料整理員）
宮崎 彩香（文化財資料整理員）

出土品整理作業員

令和2年度

石崎 玲子、井上千恵美、江口 里織、大津山恵津子、椛島かおり、古賀 貴子、
田中千佐子、野口 晴香、溝上 直子、湯川 琴美

令和3年度

湯川 琴美

II. 位置と環境

1. 位置と地理的環境

久留米市は九州の北部、福岡県のほぼ中央に位置する。その市域は、九州一の大河筑後川の中下流域に沿っており、南北 16 km、東西 32 km を測る。

筑後川は熊本県阿蘇郡瀬の本高原に端を発し、山岳部を北流し玖珠川と合流して、うきは市と大分県日田市の間にかかる夜明ダムを経て平野部に出る。夜明ダム以西は中流域で、平野部では佐田川、小石原川、大刀洗川、巨瀬川、宝満川、秋光川などが合流しながら西流し、久留米市北西部の宝満川との合流地点で流れを南西方向に変える。久留米市安武町の筑後大堰より以西は下流域となり、佐賀県と県境を成す。流域面積は 2,860 km² を測り、九州最大の平野である筑紫平野を形成している。筑紫平野の南側には、水縄断層によって形成された耳納山地が連なり、その西端には、標高 312 m の高良山が平野部に突出している。対岸には脊振山地から派生する朝日山などの丘陵が平野に突出し、筑紫平野の中央、久留米市市街地周辺で地峡を成している。

筑後国府跡は久留米市街地の東部、高良山の麓の中位段丘から低位段丘に、合川町、朝妻町、御井町一帯の東西 1 km に広がる。



第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

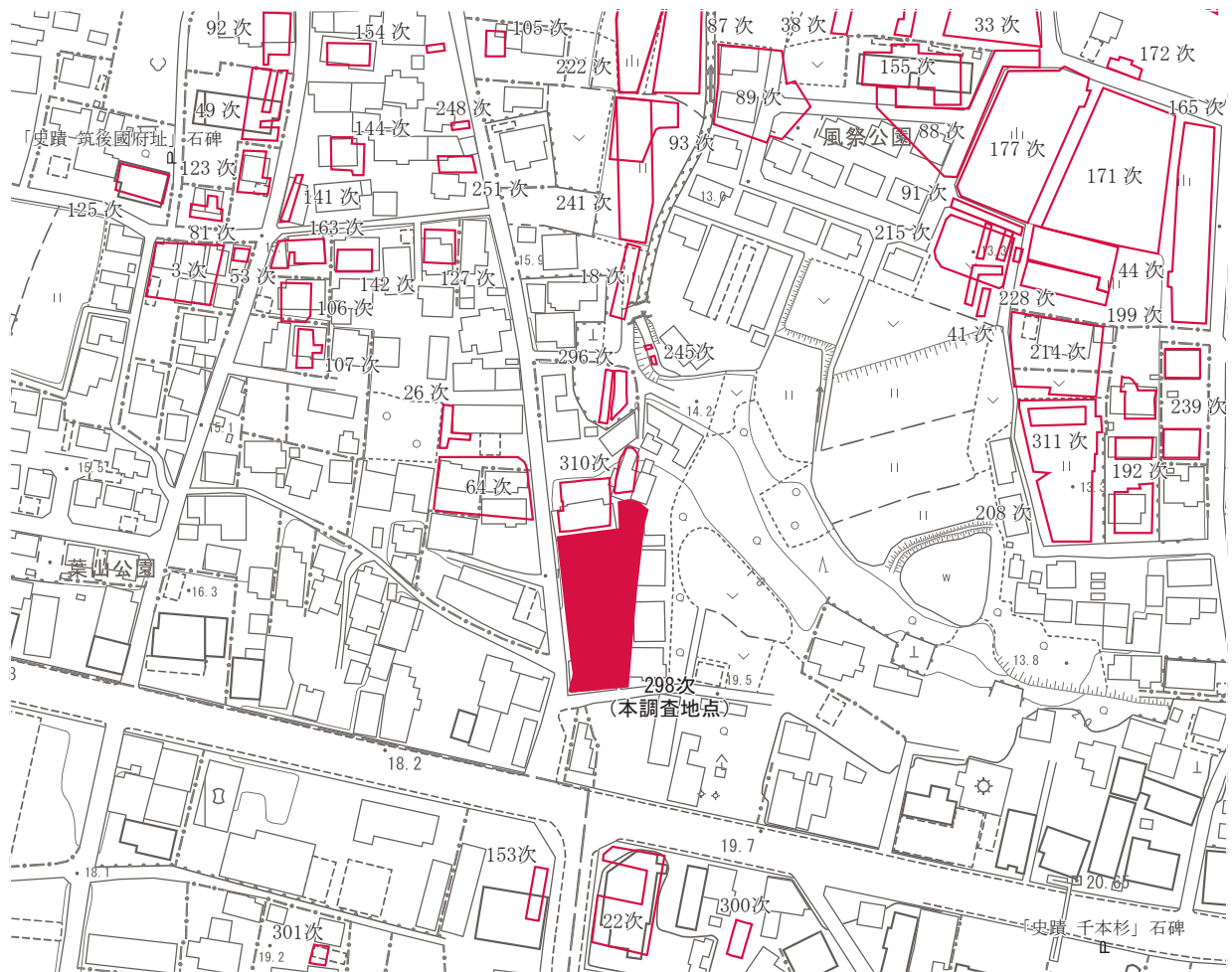
2. 歴史的環境

周辺での人類の足跡は、旧石器時代までさかのぼる。へボノ木遺跡でナイフ形石器、市ノ上北屋敷遺跡でナイフ形石器や搔器、野口遺跡でナイフ形石器や台形様石器、細石核などが出土したほか、縄文時代の包含層からの出土だが、横道遺跡で細石刃が出土した。縄文時代には、横道遺跡で草創期まで遡る土器が出土したほか、古宮遺跡や大林遺跡、上遺跡、へボノ木遺跡、山下遺跡、水洗遺跡、篠田遺跡、吹上遺跡、安国寺遺跡、松ヶ本遺跡、野口遺跡、大園遺跡で、早期から晩期の土器や石製品が出土した。また、横道遺跡では早期の土坑や集石遺構、朝妻遺跡と神道遺跡で埋甕、西小路遺跡とへボノ木遺跡で堅穴建物と土坑群、篠田遺跡と野口遺跡で土坑、市ノ上東屋敷遺跡で落とし穴状遺構が確認され、高良山の麓から筑後川にかけて集落があったことを示唆する。出土遺物では、野口遺跡で出土した前期の土器が野口式土器（野口・阿多式土器）として知られるほか、西小路遺跡で出土した石棒や石冠は、精神文化や東日本との交流を考える上で注目できる。

筑後国府跡一帯には、弥生時代の遺跡も広い範囲で分布している。早期には、へボノ木遺跡で夜臼式土器の埋設遺構が検出されている。中期後半には、堅穴住居や祭祀土坑からなる集落遺跡が大林遺跡や久保野遺跡、朝妻遺跡、へボノ木遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡に分布する。二本木遺跡では集落に加え、長さ 100 m 以上の大溝や甕棺墓が見つかっており、大規模な集落の存在が示唆される。高良川を挟んだ市ノ上北屋敷遺跡では、環状に柱穴が並ぶ中期前半の特殊な遺構や、箱式石棺墓、甕棺墓、弥生時代後期の土器などが見つかっており、隣接する集落の存在を示す。さらに、国史跡の安国寺甕棺墓群は 63 基の甕棺墓と 4 基の土坑墓、12 基の祭祀土坑からなる一大墓域で、同時期の大規模な集落の存在が想定できる。後期後半には、古宮遺跡と大林遺跡で長さ 110 m 以上の V 字溝を伴う堅穴住居群と甕棺墓が検出され、鏡片、鉄鏃などが出土した。同時期には、御蔵園遺跡や朝妻遺跡、へボノ木遺跡でも堅穴住居が見られ、朝妻遺跡では舶載鏡の破鏡、へボノ木遺跡では楽浪系土器や銅鏡片、素環頭刀子が出土した。台地西端の大規模な集落の東方に、中郷遺跡や朝妻遺跡、へボノ木遺跡といった比較的小規模な集落が点在する様子が窺える。

古墳時代初頭に築かれた祇園山古墳は、高良山の山裾に立地し、筑紫平野を見渡す位置にある。一辺約 23 m の方墳であり、墳丘中央に箱式石棺の主体部を持つ。副葬品や人骨等は発掘調査より前に失われていたが、高良大社に伝世する三角縁神獣鏡は、祇園山古墳の出土と考えられている。この古墳の墳丘裾には、数十基の甕棺墓や石棺墓を伴い、古墳の築造を契機として造られたと墳墓群と見られる。同時期には方墳群である福聚寺古墳群も築かれるなど、周辺の丘陵上に古墳が分布していた様相が窺える。また、市ノ上東屋敷遺跡では堅穴建物のほか、方形区画溝が検出されており、古墳時代前期の豪族居館の環濠という指摘がある。筑後国府跡では、三反野地区で古墳時代後期の堅穴建物群が見つかるほか、国府域の中央に流れる通称「東限大溝」と呼ばれる流路から、7 世紀前半の須恵器が一定量出土した。野口遺跡でも古式土師器が出土しており、古墳と同時期の集落の存在を窺わせる。

古代に入ると、高良山に神籠石式山城が築かれる。その築造年代は明らかではないが、白村江の



第3図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

戦いにより対外防衛の必要に迫られた7世紀頃に築かれたと考えられている。筑後国の成立も同時期と考えられており、『日本書紀』持統天皇4年条(690)では、大伴部博麻帰国の記事で「九月丁酉…軍丁筑紫国上陽咩郡大伴部博麻」と「十月乙丑。詔軍丁筑後国上陽咩郡大伴部博麻」という記述がある。天武天皇12～14年(683～685)の国境画定事業に伴い成立したと考えられている。高良山神籠石の麓にあたる高良川沿いの丘陵西端では、高良山神籠石と同時期に、大形建物や幅6m、深さ3mの断面V字状の大溝が検出されており、国府設置前の公的施設(いわゆる「前身官衙」)とされている。前身官衙は7世紀末までに成立した筑後国の国府に継承されたとみられ、古宮地区には築地塀を伴う建物群がみられる。

筑後国府跡や神道遺跡、山川前田遺跡では、7世紀代に比定される断層や噴砂痕が確認されている。『日本書紀』卷第二十九には、天武天皇7年(678)12月条に「筑紫國、大きに地動る」という記述がある。これらの地震痕跡は、この「筑紫地震」の影響によると考えられており、耳納山地北麓の水縄断層を震源とする地震があったことが明らかになっている。

筑後国府は、7世紀末から12世紀後半にかけて古宮地区から阿弥陀地区、朝妻地区、そして横道遺跡を三遷しており、310次を越える発掘調査から、古代の筑後国における政治経済の中心的な役割を担ったことが明らかになっている。国府域で出土した越州窯系青磁や緑釉陶器の香炉蓋、複数

の出土例があるイスラム陶器といった陶磁器に加え、「守館」と書かれた墨書土器の出土も、これを裏付ける。筑後国府跡周辺に目を向けると、山下遺跡では7～9世紀の溝や土坑から、緑釉陶器の香炉蓋や複数の越州窯系青磁碗が出土しており、『高良記』に登場する在国司居屋敷との関連が指摘されている。へボノ木遺跡では、8世紀中頃～9世紀前半に四面廂建物と八脚門、側溝を伴う回廊状遺構が造営される。これらの遺構は数回の建て替えが確認されており、その性格は御井郡衙とする説と、寺院とする説がある。同時期の集落遺跡は、へボノ木遺跡の北東部に7世紀後半～8世紀中頃の竪穴建物群が分布し、久保野遺跡や山下遺跡、神道遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡、大園遺跡でも8～9世紀の掘立柱建物や竪穴建物、吹上遺跡で10～11世紀の掘立柱建物が検出されるなど、広範囲に集落遺跡が分布する。また、西小路遺跡では方形区画溝を伴う10～11世紀の掘立柱建物群が検出されており、屋敷の存在が示唆される。

筑後国府跡からへボノ木遺跡、一丁野屋敷遺跡、野中上ノ原遺跡にかけては、道路遺構も検出されている。国府域の西部を南北に走る道路は、一丁野屋敷遺跡や野中上ノ原遺跡を経て、筑後国分寺・国分尼寺を結び、野中町や諏訪野町を経て肥後国に至る西海道の官道の一部と考えられている。この官道の他にも、国府域を東西に走り、へボノ木遺跡で北方と東方の二手に分かれる道路遺構が見つかった。前者は大宰府へ向かう推定駅路、後者は山本・竹野・生葉郡へ向かう伝馬道とされている。

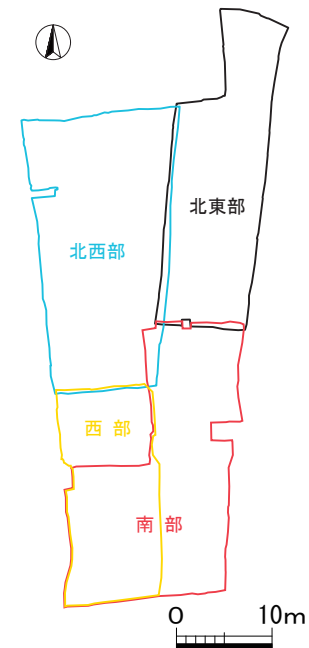
11世紀末に国府が朝妻遺跡から横道遺跡に移転したことに伴い、主要道も高良山麓の街道（後の薩摩坊律街道）へ移ったと考えられている。へボノ木遺跡の伝馬路は11世紀まで存続するが、12世紀には井戸や土坑、土壇墓が点在するのみとなる。隣接する西小路遺跡でも同様に土壇墓が点在するだけだが、山下遺跡では12世紀の溝や土坑が検出されており、貿易陶磁器が出土した。筑後国府跡でも、大林地区や葉山地区、立石地区、上地区などで12～15世紀の方形区画溝や土塁、井戸、土壇墓が分布しており、下見遺跡の13世紀の館跡、野口遺跡の13世紀の溝や井戸、大園遺跡の13～14世紀の大溝や井戸と共に、丘陵から低地にかけて居館や集落が点在したことを示唆する。「草野文書」にある弘安3年（1280）6月8日付『藤原永基讓状』には、高良御宮在国司職に「枝光村在家并田畑等 但田地者、当社理修分封田也」とある。『高良玉垂宮神秘書』にも、高良山の神事に関わる集落名及び代表者とみられる「エタミツ」の名がみえ、13世紀には枝光村が成立していたことが窺える。高良山の西麓では、二本木遺跡で10～11世紀に遺構が増加し、麓遺跡では12世紀後半の方形館の周溝が検出されており、街道の下限を示す。12～13世紀には、篠田遺跡や二本木遺跡、岩井川遺跡、安養寺境内遺跡、麓遺跡、日出原遺跡、日出原南遺跡、高良山大祝邸跡、高良山大宮司邸跡で溝や井戸、地下式坑などの土坑が多数検出された。街道沿いや高良大社の門前に、今日の御井町の前身にあたる集落があったことが窺える。中世末期の『高良玉垂宮神秘書』には、高良社の宮座である「十二の乙名」に枝光の名が見え、御神幸では日出笠役を分担していたことが記されている。また、国府域を東西に貫く道路を示すとみられる「タハタノヨコミチ」という記述があり、国府域が田園風景に変わっていたことが示唆される。

III. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

第298次調査は、試掘確認調査で検出した遺構の分布と性格の把握を確認するために実施した。排土置き場と駐車場の確保や、発掘調査途中で南隣地にも遺構が分布することが明らかとなったため、調査は第6図のとおり、調査区を北東・北西・西・南の四区に分けて実施した。対象面積1,310㎡に対し、調査面積は1,073㎡である。

令和2年5月7日に調査器材を搬入して、重機で調査区北東部の表土剥ぎを開始した。地表下約0.4～0.6mで遺構面に達し、9日まで表土剥ぎを行った。5月11日から壁面清掃と遺構検出を始め、翌12日から遺構掘り下げと測量、写真撮影などの記録作業に入った。新型コロナウイルス（COVID-19）に伴う分散出勤や発掘調査作業員の制度変更、さらに梅雨入りもあって進捗は緩やかで、全景の撮影は6月24日にドローンを用いて行った。撮影後、追加の掘削と記録作業に入ったが、7月に入る



第6図 調査区割図 (1/800)

と梅雨前線が長期にわたり九州に停滞したことで豪雨が相次いだ。特に7月7・8日の豪雨は、合川町を含む久留米市内各地で道路の冠水や住宅の浸水を招いたが、調査地点は比較的高台にあったことから冠水を免れた。追加の記録作業は7月17日に完了し、週休を挟んだ7月20日から22日まで、重機で調査区の北東部と北西部を反転した。

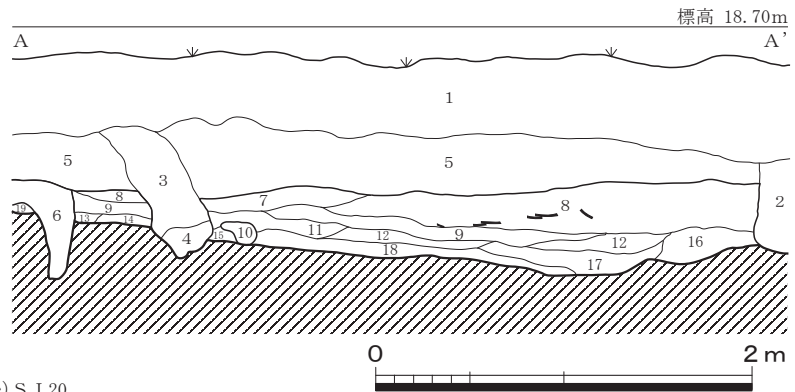
調査区北西部は7月30日から壁面清掃と遺構検出を始めたが、7月28日の梅雨明けと同時に猛暑日が続く、しかも発掘調査件数の多さで現場作業員の人数が限定されたことから、遺構検出に時間がかかった。8月11日から遺構掘削と記録作業を始めたが、8月後半に入ると最高気温が40℃に肉薄する酷暑が連日続き、熱中症対策から作業時間を短縮せざるを得なかった。9月に入っても、連日30℃以上の残暑や台風9・10号の接近、秋雨の合間に作業を行う日々が続く、全景写真は10月3日にドローンで撮影した。撮影後、10月6日に調査区北西部を埋め戻した。

調査区南部は10月6日にアスファルトを剥がし、10月8日と9日に表土剥ぎを行った。10月12日に現場作業員を投入して遺構検出を行い、14日から遺構掘り下げと記録作業に入った。一時減少した現場作業員が戻ってきたことや、10月に入りようやく残暑が収まったことから作業は順調に進み、全景写真は11月12日にドローンで撮影した。撮影後、追加の掘削と記録作業を行い、11月13日から15日まで、調査区南部と西部を反転した。

調査区西部は11月17日に重機で表土剥ぎを行い、同日午後現場作業員を投入して遺構検出を行った。翌11月18日から遺構掘り下げと記録作業に入り、全景の撮影は12月2日にドローンで行った。撮影後、追加の完掘と記録作業を経て、12月7日に調査区の埋め戻しを始めた。12月8日に埋め戻しを完了させた後、12月10日に器材の撤収を完了し、現地での作業を完了した。

III. 調査の記録

1. 灰黄色土（灰粒、礫を含み、樹草根多い）しまり固く、表面の一部にバラスが残る。表土
2. 黄灰色土（にぶい黄色土ブロックを含む）攪乱
3. 黒褐色土（にぶい黄色土を含む）樹根痕
4. 黄色土+黒褐色土。しまり弱い。樹根痕
5. 黒褐色土（灰黄色土ブロック、にぶい黄色土ブロックを含む）包含層
6. 黒色土（にぶい黄色土ブロック、黄橙色土ブロックを含む）しまり弱い。樹根痕
7. 黒色土（土器片、にぶい黄色土ブロックを含む）S I 20
8. 灰黄褐色土（にぶい黄色土を含み、土器片を多く含む）S I 20
9. にぶい黄褐色土（焼土粒、黄色土ブロックを含む）S I 20
10. 黄色土+黒褐色土。黄色土はしまり固い。樹根痕か
11. 暗灰黄色土（炭粒、褐色ブロックを含む）S I 20
12. 橙色土+にぶい黄褐色土+淡黄色土（焼土を多く含む、炭粒を含む）S I 20
13. 黒褐色土（黄橙色土ブロックを含む）S I 20
14. にぶい黄褐色土（黄色土ブロックを含む）S I 20
15. にぶい黄褐色土+黄褐色土。S I 20 床土



16. 暗灰黄色土（浅黄色土ブロック、炭粒を含む）しまりやや固い。S I 20 床土
17. にぶい黄色土+にぶい黄褐色土（褐灰色土、にぶい黄褐色土ブロックを含む）S I 20 床土
18. にぶい黄褐色土（にぶい褐色土、黄灰色土ブロック、にぶい黄褐色土ブロックを含む）S I 20 床土
19. にぶい黄褐色土（黒褐色土、にぶい黄色土ブロックを含む）

第7図 調査区北東部壁面土層図（1/40）

2. 基本層序

調査地点の現況は更地だが、以前は中央部が駐車場だったほかは住宅が並んでいた。調査区北東部（第7図）および北西部（第11・12図）では、地表を①炭粒や瓦礫、バラスを含み、しまりが固い灰黄色の表土が0.1～0.6 m覆い、北西部ではその直下に②砂利や浅黄色土ブロック、土器片を含む黄褐色の整地とみられる層が0.1～0.2 m見られる。調査区の北東端や中央部では、さらに③灰黄色土ブロックやにぶい黄色土ブロック、土器片を含む締まりの弱い黒色土の包含層を0.1～0.4 m確認した。近世墓や近代以降の攪乱は包含層に後出する。これらの黄褐色土や包含層の直下、地表下-0.3～-0.9 m、標高17.6～18.4 mで地山上面に達する。

遺構は地山上面で検出した。地山は、標高17.8～18.1 mから上層がにぶい黄褐色土、下層が明褐色土や黄色橙色土、黄色土で、黄色土は砂利を多く含む。場所によっては、上層と下層の間に浅黄色土や明黄褐色土の層が0.1～0.2 mみられた。

3. 検出遺構

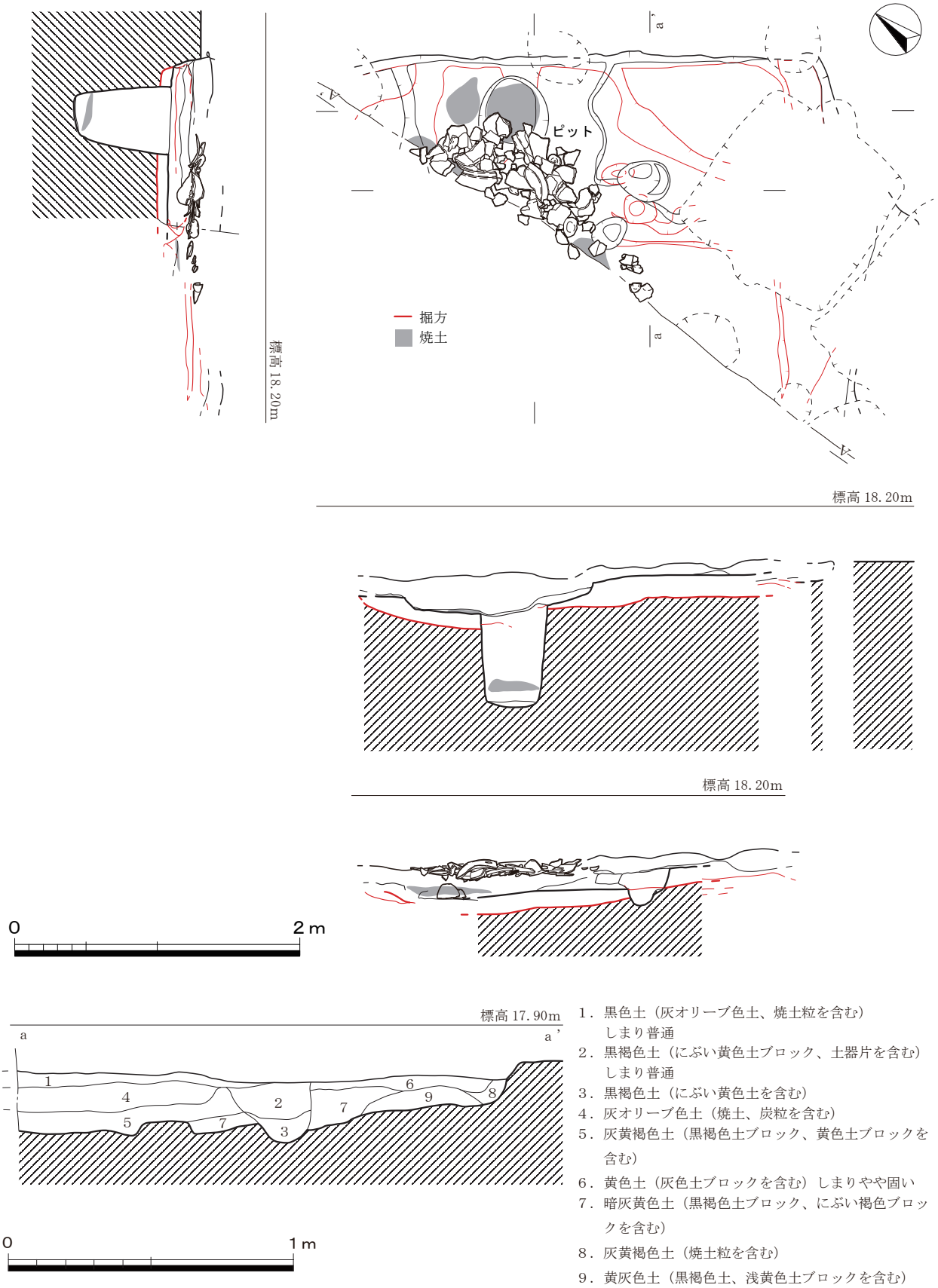
検出した主な遺構は、弥生時代の竪穴建物1基と土坑1基、古代の柵列1条と溝16条、道路遺構1条、竪穴建物1基、土坑4基、ピット3基、波板状凹凸面1基、硬化面2基、中世の溝5条と土坑2基、ピット2基、硬化面2基、近世の土壇墓8基、その他の埋甕1基、地震痕跡である。以下、年代順に述べる。

（1）弥生時代の遺構

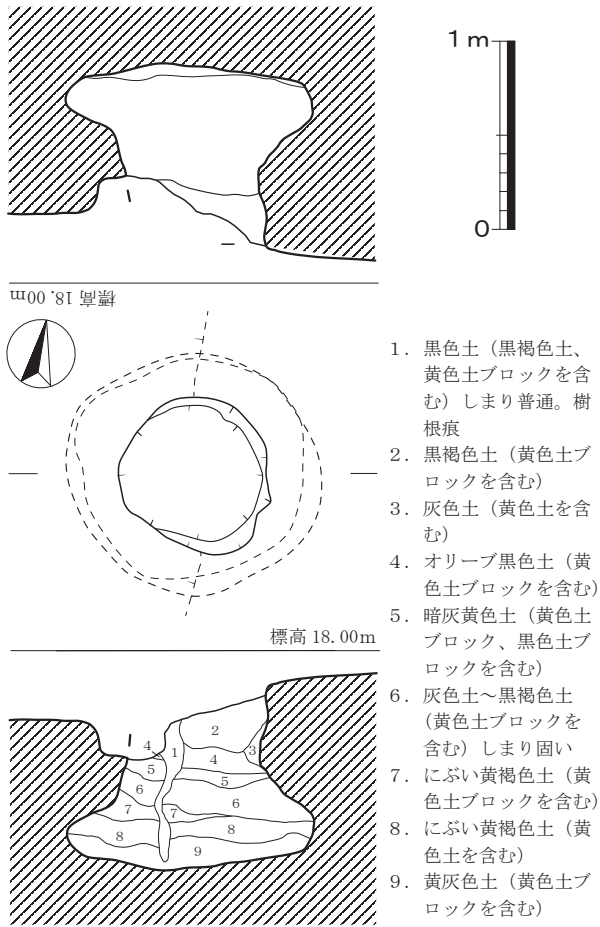
竪穴建物

S I 20（第7・8図、図版4）

調査区北東部壁際で検出した遺構である。検出したのは遺構の南東隅で、大半は調査区外に及び、土壇墓やピットが後出する。主軸はN-38°-Wで、長軸3.40 m、短軸2.55 mを測る。遺構の隅に深さ0.15 mの段を有し、上端から深さ0.31 mで硬化面に至り、さらに11 cm掘り込まれる。柱穴は



第8図 S I 20 実測図・土層図 (1/40、1/20)



第9図 SK154実測図・土層図 (1/40)

確認できなかったが、東辺際に直径 0.50 ～ 0.58 m、硬化面から深さ 0.72 m のピットがあり、焼土を検出した。埋土は土層図のとおりで、硬化面から上層は締まりの弱い黒色土が主体で、硬化面から下層は締まりが強い黄褐色土が主体である。遺物は、弥生土器の大甕や甕、短頸壺、高坏、鉢、器台、炭化材が出土した。

土坑

SK 154 (第9図、図版4)

調査区北西部、住宅の入口だった斜面で検出した遺構である。SD 155 が後出する。口径 0.69 ～ 0.81 m に対して、壁面は直径 1.28 ～ 1.36 m、底面は直径 1.12 ～ 1.34 m を測り、フラスコ状の断面を有する。深さは最大で 0.96 m を測る。土層は第9図のとおりで、上層は黄色土を含む黒色系の埋土、下層は黄色土を含む黄褐色系の埋土が占める。出土遺物は無い。

(2) 古代の遺構

柵列

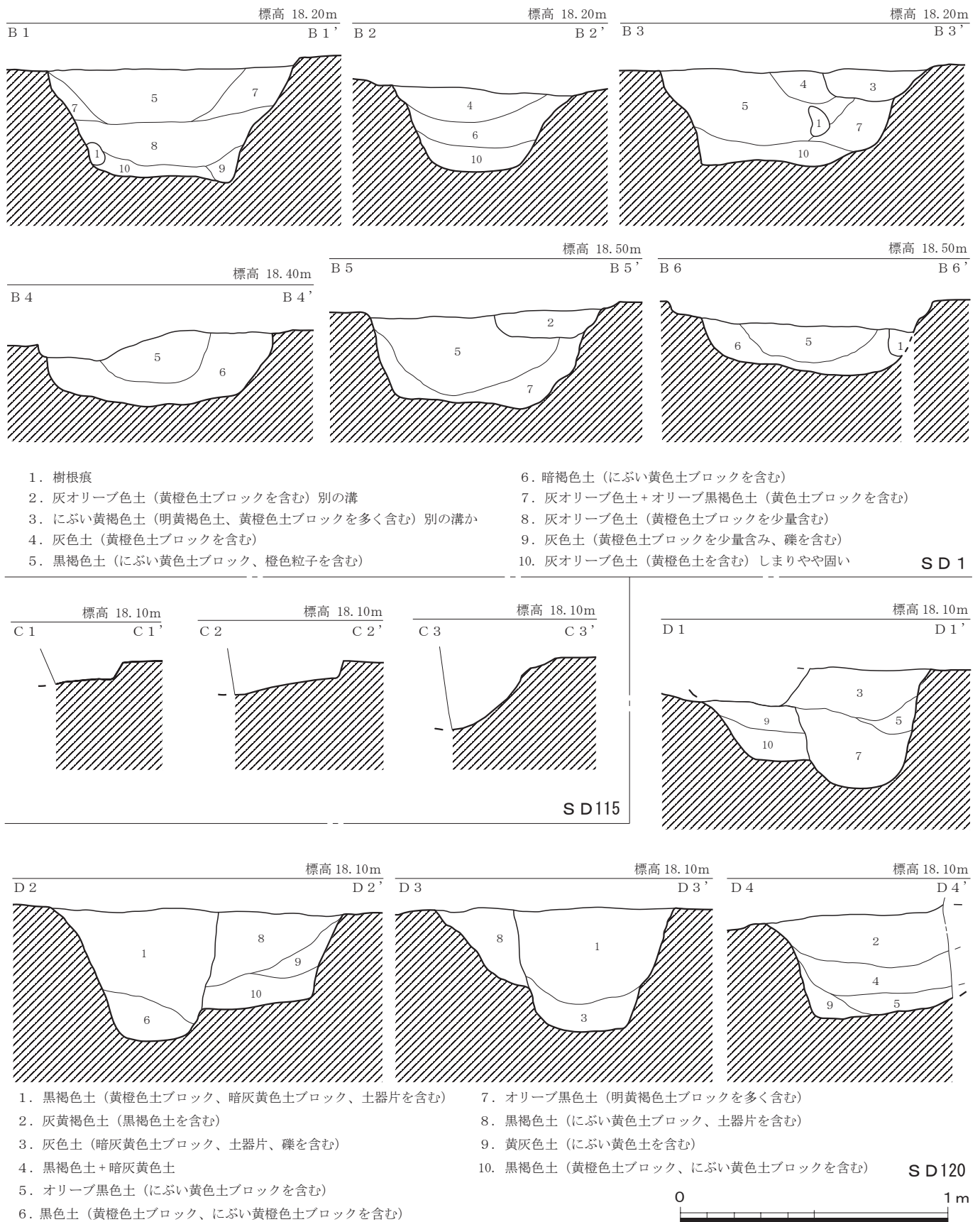
SA 252 (第5図、図版2・4)

調査区南東部から中央部南寄り検出した遺構である。多数のピットが南北 9.4 m × 東西 15 m、幅 0.8 ～ 1.5 m にわたり分布する。主軸は南北方向が N - 16° - W、東西方向が N - 77° - W で、東西方向は SD 365・405 や SF 445 に並走する。ピットの深さは 0.16 ～ 0.98 m で、攪乱や SD 170・190 に削平される。埋土はいずれも、黄色土ブロックを含むしまりの弱い黒褐色土や黒色土で占められる。遺物は、弥生土器の甕や土師器の坏と皿、埴、甕、黒色土器 A 類の埴、須恵器の甕や壺、縄目文叩きの平瓦や丸瓦、焼成粘土塊や壁土らしき破片が出土した。

溝 (第4図、図版1)

SD 1 (第5・10図、図版4)

調査区東部中央から西部を横切る溝である。検出したのは 25.4 m で、東端は調査区外に延び、西端は攪乱に削平される。SD 140 や SK 241 に後出し、攪乱や SD 120・127 に削平される。走行方位は N - 31° - W から N - 82° - E で、調査区中央部北西寄りで緩やかに屈曲する。溝の断面は角の丸い逆台形状や U 字状を呈し、上端幅 0.71 ～ 1.25 m、下端幅 0.39 ～ 0.71 m、深さは最大で 0.43 m を測る。埋土は、灰色系と褐色系の埋土が占める。出土遺物は、土師器の坏や皿、甕、黒色土器 A 類の埴、須恵器の坏や鉢、甕、弥生土器の甕の破片、炭化材である。



- | | |
|--|--|
| <p>1. 樹根痕</p> <p>2. 灰オリーブ色土 (黄橙色土ブロックを含む) 別の溝</p> <p>3. にぶい黄褐色土 (明黄褐色土、黄橙色土ブロックを多く含む) 別の溝か</p> <p>4. 灰色土 (黄橙色土ブロックを含む)</p> <p>5. 黒褐色土 (にぶい黄色土ブロック、橙色粒子を含む)</p> | <p>6. 暗褐色土 (にぶい黄色土ブロックを含む)</p> <p>7. 灰オリーブ色土+オリーブ黒褐色土 (黄色土ブロックを含む)</p> <p>8. 灰オリーブ色土 (黄橙色土ブロックを少量含む)</p> <p>9. 灰色土 (黄橙色土ブロックを少量含む、礫を含む)</p> <p>10. 灰オリーブ色土 (黄橙色土を含む) しまりやや固い</p> |
|--|--|

- | | |
|--|---|
| <p>1. 黒褐色土 (黄橙色土ブロック、暗灰黄色土ブロック、土器片を含む)</p> <p>2. 灰黄褐色土 (黒褐色土を含む)</p> <p>3. 灰色土 (暗灰黄色土ブロック、土器片、礫を含む)</p> <p>4. 黒褐色土+暗灰黄色土</p> <p>5. オリーブ黒色土 (にぶい黄色土ブロックを含む)</p> <p>6. 黒色土 (黄橙色土ブロック、にぶい黄褐色土ブロックを含む)</p> | <p>7. オリーブ黒色土 (明黄褐色土ブロックを多く含む)</p> <p>8. 黒褐色土 (にぶい黄色土ブロック、土器片を含む)</p> <p>9. 黄灰色土 (にぶい黄色土を含む)</p> <p>10. 黒褐色土 (黄橙色土ブロック、にぶい黄色土ブロックを含む)</p> |
|--|---|

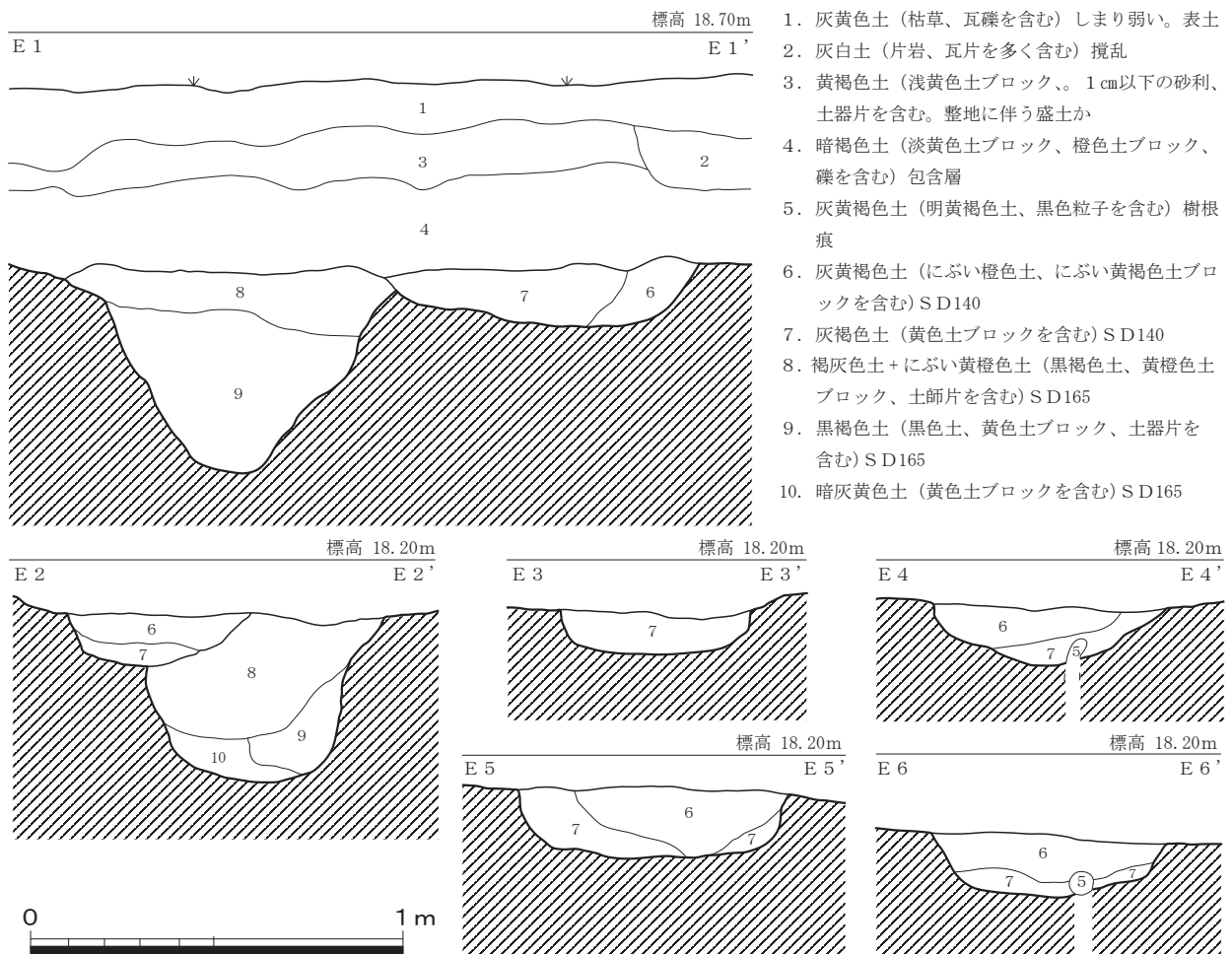
第10図 SD 1・120土層図、SD 115断面図 (1/20)

SD 115 (第5・10図、図版4)

調査区西端壁際で検出した溝である。走行方位はN-5~9°-Wで、遺構の西半が調査区外に及ぶ。検出長は9.9mで、北端は攪乱に、南端はSD 120に削平される。上端幅は最大で0.41m、下端幅は最大で0.38mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは北端で0.05mだが、南に向かって深くなり、最大で0.28mを測る。埋土は、にぶい褐色土や鉄分を含む褐灰色土である。遺物は、土師器の坏蓋や埴、甕の細片、須恵器坏の底部、粘土塊が出土した。

SD 120 (第5・10図、図版1)

調査区西部で検出した溝である。北端はSD 127、南端はSD 215が後出する。検出したのは18.8mで、走行方位はN-3~9.5°-Eを測る。上端幅は0.76~1.15mを測る。底部は深さ0.3~0.4mに段を有しており、深さは最大で0.50mを測る。埋土は土層図のとおりで、黒色系や黄色系の埋土が占める。また、堆積状況からも掘り返された状況が窺える。出土遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の壺や甕、斜格子文叩きや縄目文叩きスリ消しの丸瓦や平瓦、緑釉・灰釉陶器の碗などの細片、貿易陶磁器の青磁碗の細片、土錘や焼成粘土塊、弥生土器の細片、黒曜石の破片である。



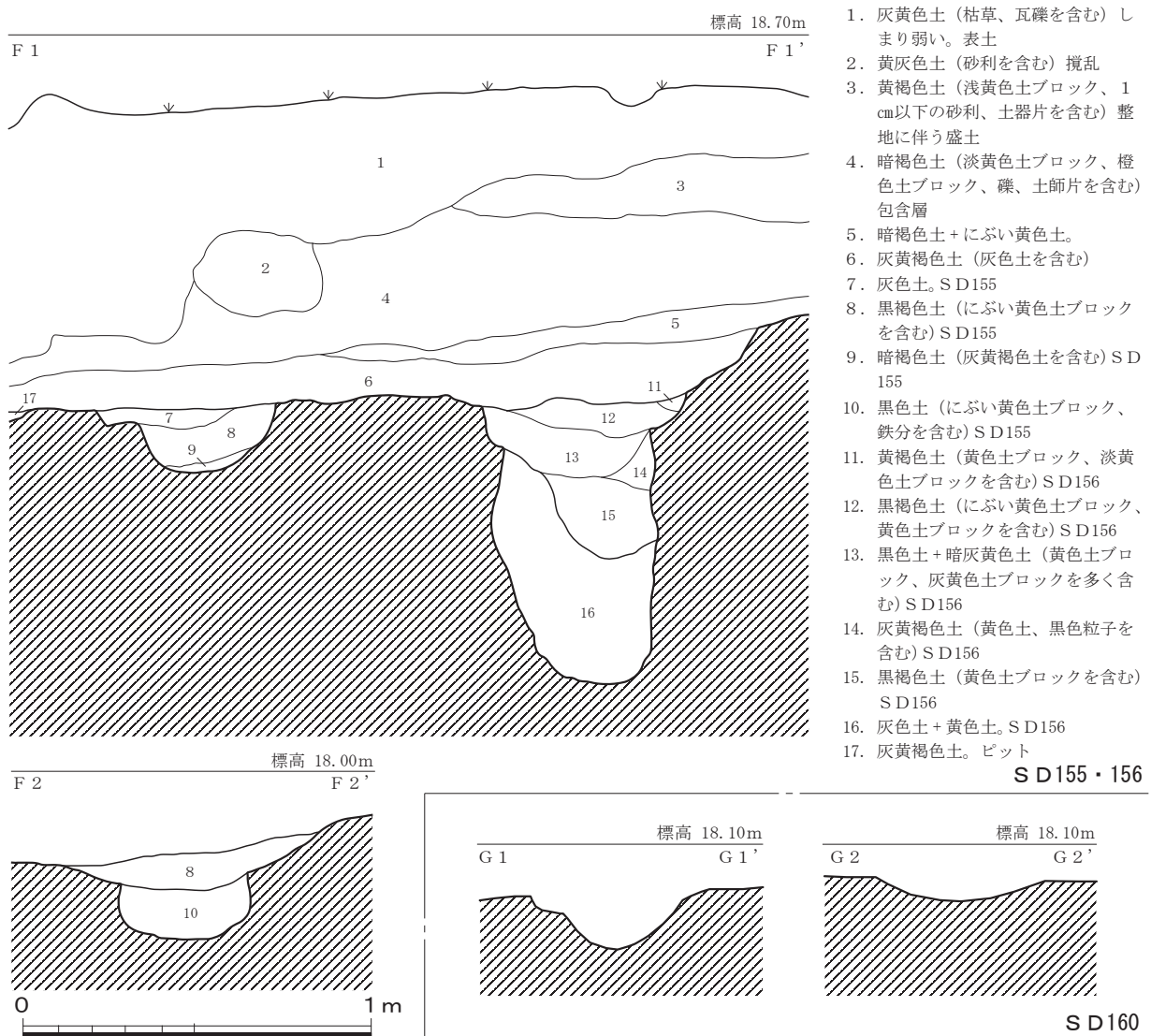
第11図 SD 140・165土層図 (1/20)

SD 140 (第5・11図、図版5)

調査区北西部を走る溝である。走行方位はN-5~8°-Eで、緩やかに蛇行する。検出長は25.6mで、北端は調査区外に及ぶ。SD 165やSI 133に後出し、SD 1・127・160に後出するほか、延長上に位置するSD 190とは一対の溝とみられる。断面は角の丸い逆台形状を呈し、上端幅0.52~0.96m、下端幅0.32~0.71m、深さは最大で0.39mを測る。底面の標高は、地形に沿い南に向かって減じる。埋土は土層図のとおりで、灰黄褐色土と灰褐色土で二分される。遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の壺や甕、緑釉・灰釉陶器の碗などの細片、貿易陶磁器の青磁碗の細片、斜格子文叩きや縄目文叩きスリ消しの丸瓦や平瓦、焼成粘土塊や弥生土器の細片が出土した。

SD 155 (第5・12図、図版5)

調査区北西隅で検出した溝である。走行方位はN-12~24°-Wで、緩やかな曲線を描く。検出したのは6.6mで、北端は調査区外に及び、南端はSD 1・120・127に削平される。上端幅0.33



第12図 SD155・156土層図、SD160断面図 (1/20)

～0.66 m、下端幅0.14～0.32 mを測り、溝の北部に向かって幅が細くなる。深さは最大で0.28 mを測る。埋土は灰色土や暗褐色土、黒褐色土で、上層の堆積状況から掘り返しが示唆される。出土遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の甕や壺、弥生土器の細片である。

SD 156 (第5・12図、図版5)

SD 155と同様に、調査区北西隅で検出した溝である。北端は調査区外に延び、南端はSD 155が後出する。検出長は2.7 mで、走行方位はN-8°-Wである。溝の断面はU字状を呈し、上端幅0.19～0.63 m、下端幅0.16～0.24 mを測る。深さは溝の南端で0.23 mだが、北に向かって段状に深くなり、調査区壁面で0.83 mを測る。埋土は、黒褐色土と黄褐色土や灰色系の埋土が占め、掘り返した痕跡がみられる。遺物は、土師器の坏や埴の底部、須恵器の甕の胴部が出土した。

SD 160 (第5・12図、図版5)

調査区北部中央で検出した溝である。SD 1・120に後出する。走行方位はN-17°-Wで、長さ3.82 mを測るが、溝南端の延長上にもピット群が列状に検出された箇所があり、南方になお延びる可能性がある。溝の断面は角の丸い逆台形を呈するが、溝の北端と中央にピット状のくぼみがある。上端幅は0.46～0.58 m、下端幅は0.33～0.51 mで、深さは溝の部分が最大で0.12 m、くぼみまで含むと最大で0.23 mを測る。出土遺物は、土師器の埴や甕、黒色土器A類の埴の底部片、縄目文叩きと縄目文叩きスリ消しの平瓦各1点のみである。

SD 165 (第5・11図、図版5)

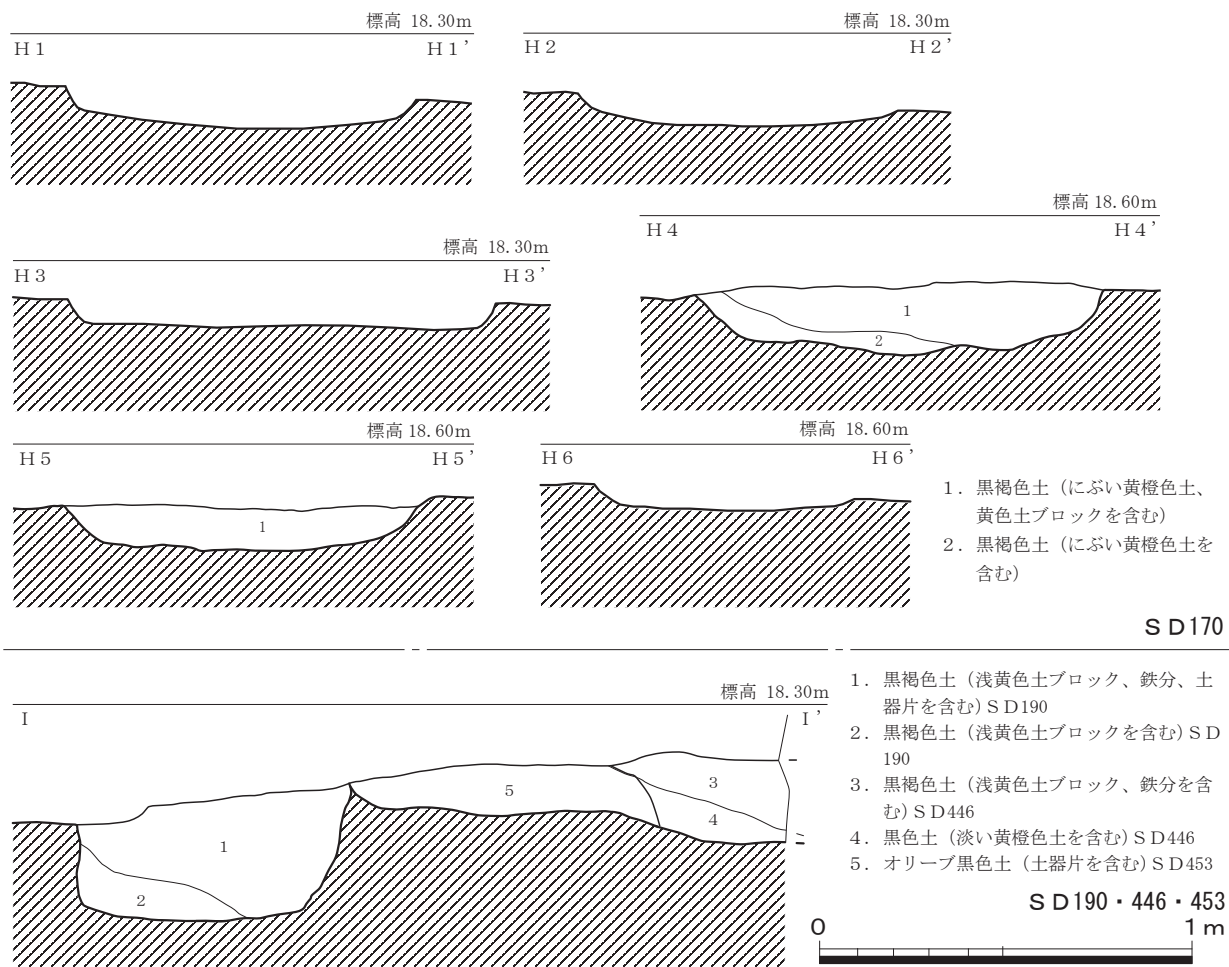
調査区北西部壁際で検出した遺構である。遺構の大半は調査区外におよび、SD 140が後出する。検出したのは2.28 mのみで、走行方位はN-18°-Wである。断面は、逆台形状からU字状を呈し、上端幅は最大で1.08 m、下端幅は最大で0.50 mを測る。底面は複数の段を有し、最大で0.54 mを測る。埋土は土層図のとおりで、褐灰色土とにぶい黄橙色土からなる上層と、主に黒褐色土からなる下層で二分される。遺物は、土師器の坏や小皿、埴、甕、須恵器の甕、斜格子文叩きなどの平瓦、滑石製石鍋の破片が出土した。

SD 170 (第5・13図、図版5)

調査区中央部から南東隅を走る溝である。検出長は33.8 mで、走行方位はN-6～12°-Wを測り、緩やかに蛇行する。攪乱に削平されるほか、調査区南東部の2ヶ所で途切れる。断面は、逆台形状からU字状を呈し、上端幅は0.67～1.34 m、下端幅は0.55～1.23 mを測る。底面は複数の段を有し、深さは最大で0.19 mを測る。埋土は、にぶい黄橙色土ブロックを含む黒褐色土で占められ、黄色土ブロックの有無で二分できる場所がある。出土遺物は、土師器の坏蓋や坏、皿、埴、甕、黒色土器A類の坏と埴、須恵器の甕や壺、縄目文叩きと縄目文叩きスリ消しの平瓦、弥生土器の甕である。

SD 190 (第5・13・15図、図版5・6)

調査区南西部で検出した遺構である。SD 140の延長上に位置し、同一遺構の可能性はあるが、埋土や深さが大きく異なるため、別個の溝として報告する。南端は攪乱に削平され、検出したのは25.1 m、走行方位はN-12°-EからN-13°-Wと蛇行する。北部でSD 215、南部でSD 446

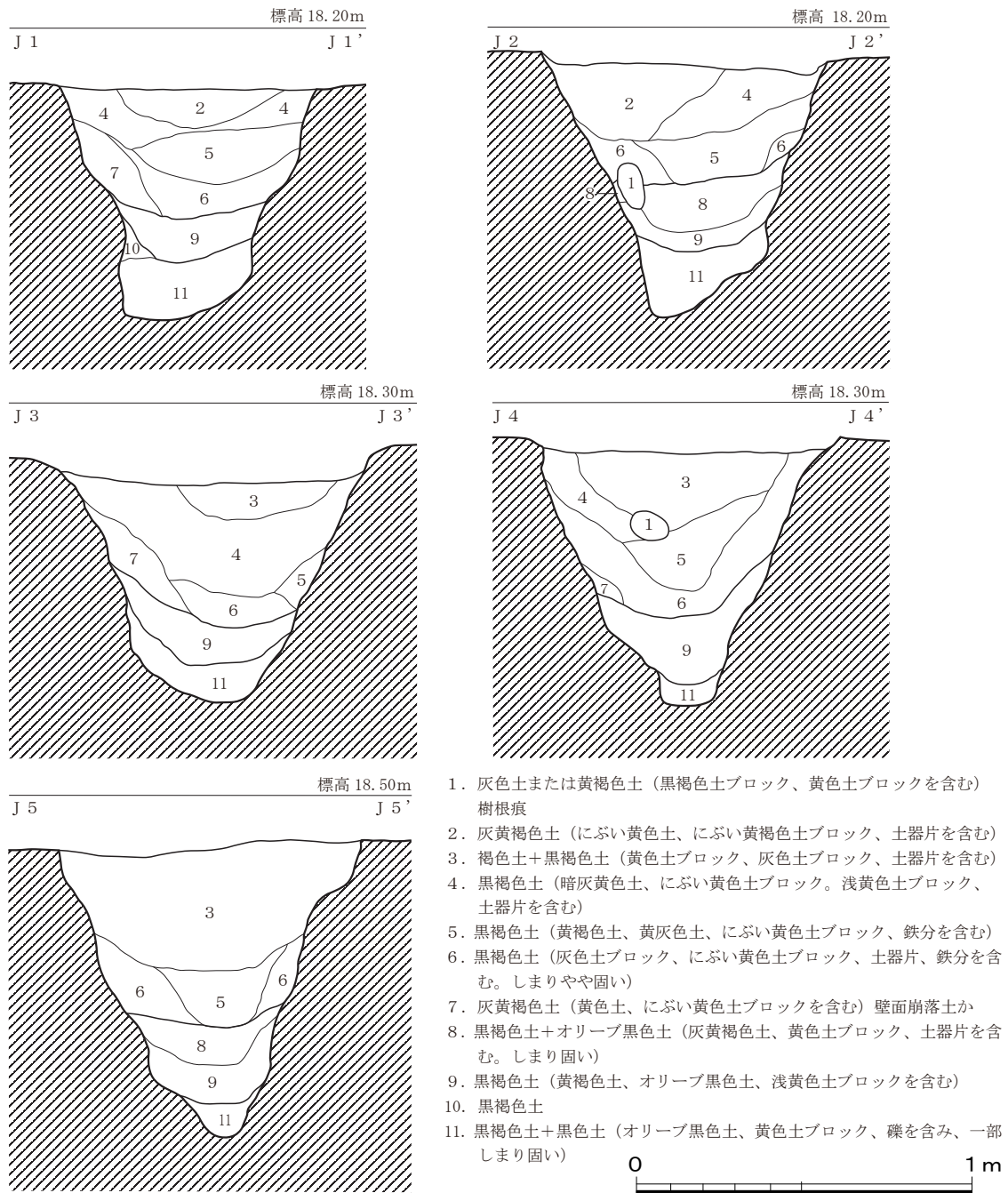


第13図 SD170断面図・土層図、SD190・446・453土層図 (1/20)

が後出するほか、SD 361・405 やSF 445 などに後出する。断面はやや歪な逆台形状を呈し、上端幅は0.31～1.00 m、下端幅は0.22～0.65 mを測る。両端は削平に伴い浅くなるが、北部の深さは最大で0.75 mを測る。埋土は、浅黄色土ブロックを含む黒褐色土で、複数の層に分かれる。遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、黒色土器A類の埴、須恵器の皿と甕、縄目文叩きスリ消しの丸瓦と摩耗した平瓦、弥生土器の甕、焼成粘土塊、片岩の破片が出土した。

SD 215 (第5・14 図、図版6)

調査区西壁中央から南東壁に至る溝である。両端は調査区外に及び、検出したのは長さ23.2 mのみである。複数の攪乱とピット、SD 127 が後出するほかは、重複する遺構の大半に後出する。走行方位はN-51～57°-Wで、若干蛇行する。上端幅0.63～1.08 m、下端幅0.12～0.55 m、深さは最大で1.01 mを測り、溝の南東部に向かって深くなる傾向にある。埋土は土層図のとおりで、黄褐色系の埋土と黒褐色系の埋土が占める。断面は歪なV字状を呈し、埋土の堆積状況や断面の形状から、少なくとも2回の掘り返しが示唆される。遺物の種類は豊富で、ほとんどヘラ切り底の土師器の坏や皿、台付皿、鉢、壺、甕、把手、移動式カマド、黒色土器A類の坏や皿、埴、甕、黒色土器B類の埴、須恵器の坏や皿、壺、甕、瓦器埴、緑釉陶器の碗、青磁碗や白磁碗などの貿易

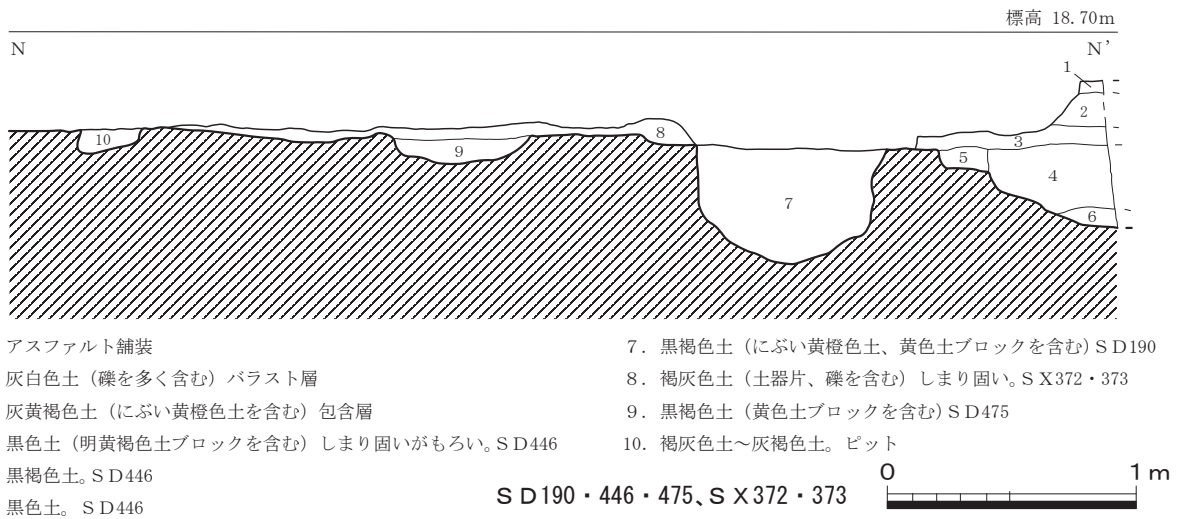
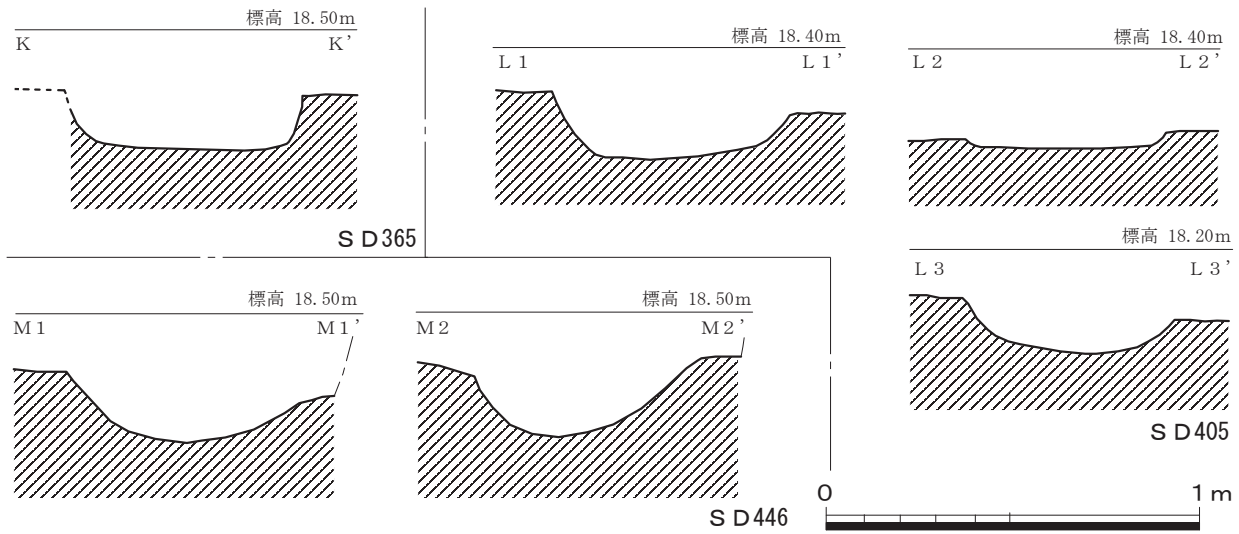


第14図 SD215土層図 (1/20)

陶磁器、斜格子文叩きや縄目文叩きスリ消しの平瓦や丸瓦、弥生土器の細片、砥石や磨石などの石製品、黒曜石や片岩、安山岩、石英の破片、焼成粘土塊が出土した。

SD 365 (第5・15・17図、図版7)

調査区南部を東西に横切る溝である。検出長は18mで、東端は調査区外に及ぶ。西端はSD 446が後出し、SD 127・190・215やSF 445の波板状凹凸面、攪乱などが後出する。走行方位はN-76~80°-Wを測る。断面は逆台形状からU字状を呈し、上端幅は0.29~0.83m、下端幅は0.14~0.54m、深さは最大で0.22mを測る。埋土は第17図のとおりで、黄色土や土器片を含む黒色土から



- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| 1. アスファルト舗装 | 7. 黒褐色土（にぶい黄橙色土、黄色土ブロックを含む）SD190 |
| 2. 灰白色土（礫を多く含む）パラスト層 | 8. 褐灰色土（土器片、礫を含む）しまり固い。SX372・373 |
| 3. 灰黄褐色土（にぶい黄橙色土を含む）包含層 | 9. 黒褐色土（黄色土ブロックを含む）SD475 |
| 4. 黒色土（明黄褐色土ブロックを含む）しまり固いがもろい。SD446 | 10. 褐灰色土～灰褐色土。ピット |
| 5. 黒褐色土。SD446 | |
| 6. 黒色土。SD446 | |
- SD190・446・475、SX372・373

第15図 SD365・405・446断面図、SD190・446・475、SX372・373土層図（1/20、1/30）

なる上層と、黒褐色土とにぶい黄色土が混じりあう下層で二分される。出土遺物は、土師器の坏や皿、碗、壺、甕、把手、黒色土器A類の碗、須恵器の坏蓋や坏、壺、甕、縄目文叩きスリ消しの丸瓦、平坦な面を有する軽石製品や円盤状の片岩礫、丸礫といった石製品、焼成粘土塊、鉄滓である。

SD 405（第5・15図、図版6）

調査区中央部を断続的に横切る溝である。検出したのは17.8mで、西端は調査区外に及び、攪乱やSD190、SK400が後出する。走行方位はN-80°-Wで、SD365やSF445と並走する。断面は、底部が歪な逆台形状を呈し、上端幅は0.39～0.62m、下端幅は0.18～0.49mを測る。深さは東部で0.17mを測るが、溝の中央部は削平が著しく、その深さは5cmにも満たない。遺物は、土師器の坏や甕、須恵器の坏、黒色土器A類の碗が出土した。いずれも溝の東部から出土しており、中央部と西部からの出土遺物は無い。

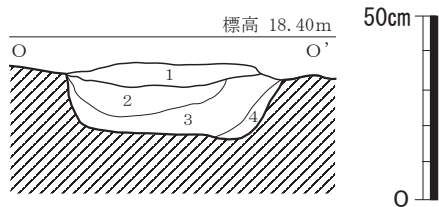
SD 446（第5・12・14図、図版5・6）

調査区西壁中央部から南部で検出した溝である。検出長は17.9mで、南端は攪乱に削平されるほ

か、北部の西半は調査区外に及ぶ。走行方位はN-4~8°-Wで、南端は若干蛇行する。断面は丸底状で、上端幅は0.50~0.71 m、下端幅は0.17~0.37 mを測る。深さは最大で0.37 mを測る。埋土は黄色土系のブロックを含む黒褐色土と黒色土で二分される。出土遺物は、土師器の坏や皿、埴、壺、甕、須恵器の甕、黒色土器A類の埴、陶器の瓶の細片、縄目文叩きスリ消しや摩耗で調整不明の丸瓦や平瓦、片岩の破片や丸礫、焼成粘土塊である。

SD 453 (第5・13図、図版5)

調査区中央部西端で検出した溝である。SD 365やSF 445に後出するが、両端はピット、東端はSD 190、西半分はSD 446が後出される。残存するのは長さ3.7 m、幅0.95 mで、深さは最大で0.18 mを測る。埋土は第13図のとおりで、土器片を含むオリブ黒色土である。遺物は、土師器の坏や皿、埴、壺、甕、須恵器の甕、黒色土器A類の埴、斜格子文叩きや調整不明の平瓦片、焼成粘土塊、炭化材が出土した。



1. 褐灰色土 (にぶい黄橙色土ブロックを含む) しまり固い。SX372
2. 黒褐色土 (灰黄色土ブロックを含む) SD475
3. 黒褐色土+灰オリブ色土 (黄色土ブロックを含む) SD475
4. 灰黄褐色土 (黄色土ブロックを含む) SD475

SD 475 (第5・15・16図、図版5・6)

調査区南東部で検出した溝である。北端は攪乱に削平され、土坑やSX 372が後出する。検出長は8.3 mで、走行方位はN-5°-WからN-9°-Eを測る。断面はやや丸底の逆台形状を呈し、上端幅は0.39~0.79 m、下端幅は0.24~0.47 m、深さは最大で0.28 mを測る。埋土は、黄色土ブロックを含む黒褐色土が大半を占める。出土遺物は、土師器の坏や甕、須恵器の甕、黒色土器A類の埴、調整をナゲ消した丸瓦、片岩の破片である。

第16図 SD475、SX372土層図 (1/20)

道路遺構

SF 445 (第17図、図版6・7)

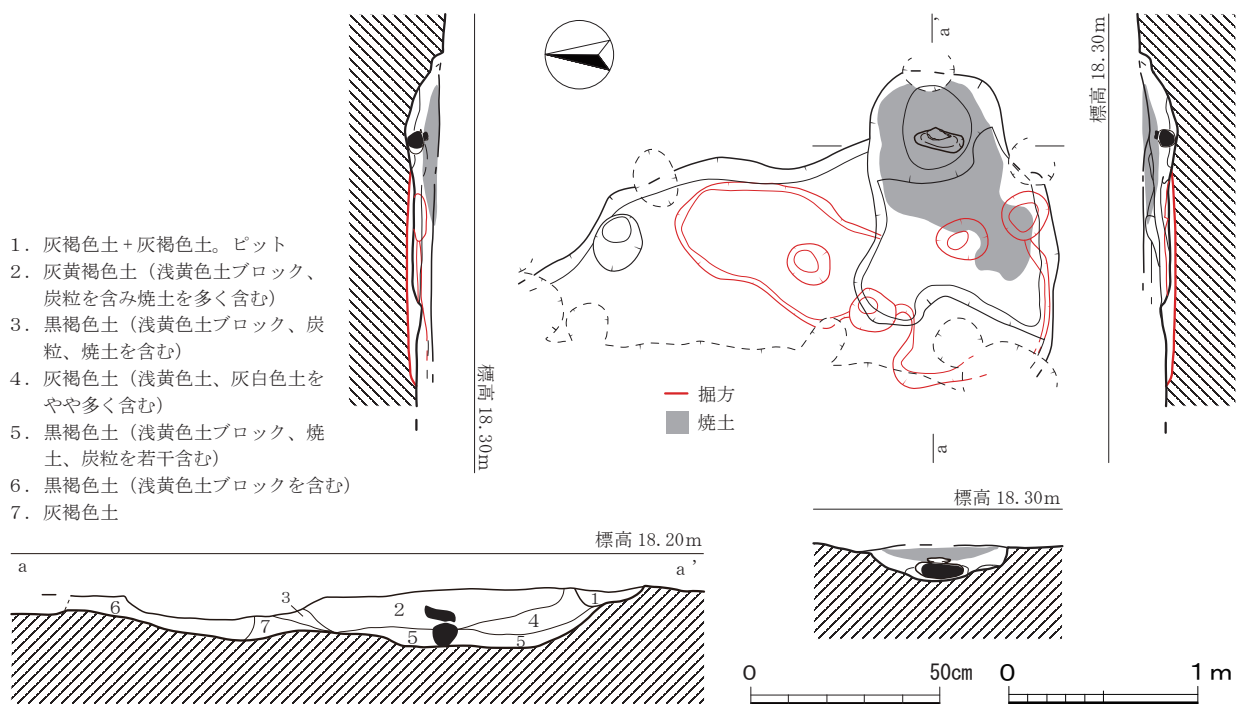
調査区中央部西寄りから北西部で検出した遺構である。硬化面上に堆積した黒褐色土と、SD 365に後出する波板状凹凸面、SD 365や波板状凹凸面が後出する硬化面、硬化面を剥がして検出した掘方から構成される。削平が著しく、SD 365の他にも遺構検出の時点でSD 127・190・215・446が後出し、西端はSD 446に、東部は攪乱に削平される。東端に残る掘方と残存長は11.4 mにおよぶ。ただし、後述するように硬化面SX 440が掘方の残余の可能性はある。走行方位はN-73°-Wで、SD 365・405と平行である。波板状凹凸面(P 1~P 13)は、芯心距離0.65 m間隔で並ぶ13基のピットからなる。ピットは長さ0.68~2.04 m、幅0.27~0.46 m、深さ0.10~0.21 mを測る。埋土は黒褐色土や橙色土で、約5~20cmの礫を大量に含む。掘方は最大幅2.87 mを測り、波板状凹凸面と同様に、11基のピットを有する。ピットの位置は波板状凹凸面とほぼ同じだが、間隔は0.6~0.8 mと一定ではなく、平面形が大きく異なるものもある。SD 361に削平されているピットもあるが、長さ0.68~1.96 m以上、幅0.33~0.41 m、深さ0.07~0.31 mを測る。埋土は橙色土で、しまりが固く、土器片を含む。

出土遺物は、黒褐色土と波板状凹凸面のピット埋土、硬化面直上、硬化面より下層のピット、掘方で分けて取り上げた。まず硬化面上の黒褐色土からは、土師器の坏蓋や坏、皿、埴、甕、把手、黒色土器A類の埴や鉢、壺、甕、黒色土器B類の埴、須恵器の坏や甕、壺、緑釉陶器の埴、瓶とみられる陶器の細片、斜格子文叩きや縄目文叩きスリ消し、摩耗で調整不明の丸瓦や平瓦、焼成粘土塊、片岩や石英の礫、鉄滓が出土した。土師器の皿には、糸切り底の底部が含まれ、礫の中には被熱したものである。波板状凹凸面のピットからも、上層と同様の遺物が出土した。遺物の点数は比較的多く、須恵器は坏蓋や坏、壺、甕と器種に富み、古瓦の調整は縄目文叩きや縄目文叩きスリ消しに限られる。さらに、土師器の移動式カマドや緑釉陶器の皿、貿易陶磁器の青磁碗、砥石の破片が出土した。これらの遺物の一部は、ピット間や硬化面直上の出土遺物と破片が接合した。また、片岩や石英などの礫の出土が目立ち、ピット1基あたり20点以上出土した。丸礫には、被熱したのものや煤が付着するもの、鉄分が付着したものもみられる。掘方のピットからの出土遺物も、波板状凹凸面と同様の傾向が見られたが、瓦片や礫の出土が目立ち、土製の丸玉や縄文土器、弥生土器、鉄滓が含まれる。ピット以外の掘方からの出土遺物は比較的少なく、細片で占められる。器種も限られ、土師器の坏や埴、甕、須恵器の甕の胴部片、黒色土器A類や弥生土器、被熱した礫のみである。

竪穴建物

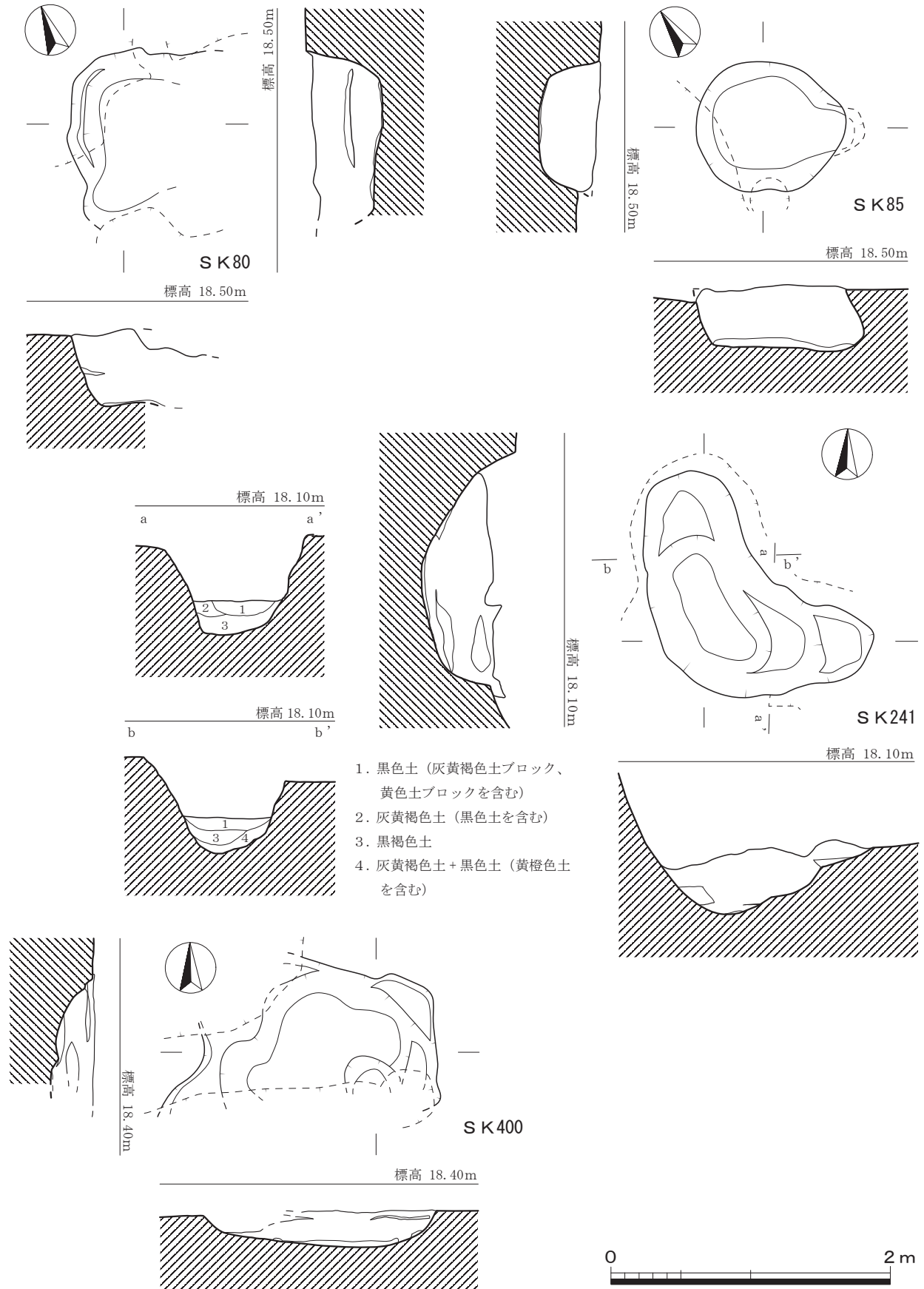
S I 133 (第18図、図版7)

調査区中央部北西寄りで検出した遺構である。検出したのは遺構の南東部で、大半はSD 140やピットが後出する。残存したのは長軸長2.77m、短軸幅1.76mのみである。深さ0.13mで段を有し、南東隅は深さ0.19mを測る。また、段の下には深さ10~20cmの掘方を有する。明確な柱穴は確認できなかったが、北東隅に直径0.25~0.31m、深さ0.42mのピットがある。南東隅の突出部には焼土



第18図 S I 133実測図・土層図 (1/40、1/20)

III. 調査の記録



第19図 S K 80・85・241・400実測図・土層図 (1/40)

が分布し礫が2点出土したが、カマドや煙道などの明瞭な設備や硬化面、粘土などは無かった。埋土は土層図のとおりで、黒褐色土と灰褐色土で占められる。遺物は、土師器の坏蓋や坏、皿、埴、鉢、甕、把手、黒色土器A類の細片、須恵器の甕、弥生土器の甕、磨石とみられる安山岩の石製品、粘土塊が出土した。

土坑

SK 80 (第19図、図版7)

調査区東部中央で検出した遺構である。遺構の東半が近代の土坑に削平されるが、隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは長さ1.17 m、幅0.95 mである。上端から深さ0.32 mに段を有し、深さは最大で0.50 mを測る。出土遺物は、土師器の坏と埴、黒色土器A類の埴、弥生土器の甕の胴部片である。土師器の埴の破片は、SK 85 出土遺物と接合した。

SK 85 (第19図、図版7)

調査区東部中央で検出した遺構である。近代の土坑やピットが後出するが、上端は円形の平面を有し、下端は南東方向に0.32 m突き出る。上端の直径は0.98 ~ 1.08 mで、深さは最大で0.47 mを測る。遺物は、土師器の坏蓋やヘラ切底の坏や小皿、埴、甕、須恵器の坏蓋や甕、弥生土器の甕や高坏の細片、被熱した粘土塊が出土した。

SK 241 (第19図、図版7・8)

調査区北西部、SD 1 西端の底面で検出した遺構である。角の丸いL字形の平面を有し、長軸1.78 m、短軸1.49 mを測る。北端と東端には、深さ0.19 mと0.30 m、0.45 mに段を有し、深さ0.57 mで底面に至る。埋土は土層図のとおりで、黒色土と黒褐色土、灰黄褐色土からなる。出土遺物は、土師器の皿や埴、甕に加えて、須恵器の甕、黒色土器A類の甕があるが、いずれも細片である。

SK 400 (第19図、図版8)

調査区中央部南寄りで検出した遺構である。遺構の南半分をピットや近代の土坑に削平され、残存するのは長軸1.98 m、幅1.12 mである。底面は複数の段に分かれ、深さは最大で0.32 mを測る。埋土は、にぶい橙色土や黄色土ブロックを含む暗褐色土だった。遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕と黒色土器A類の埴や甕、黒色土器B類の埴の細片、須恵器の坏や甕、被熱した粘土塊や壁土などの土製品、玄武岩製の台石とみられる石製品が出土した。

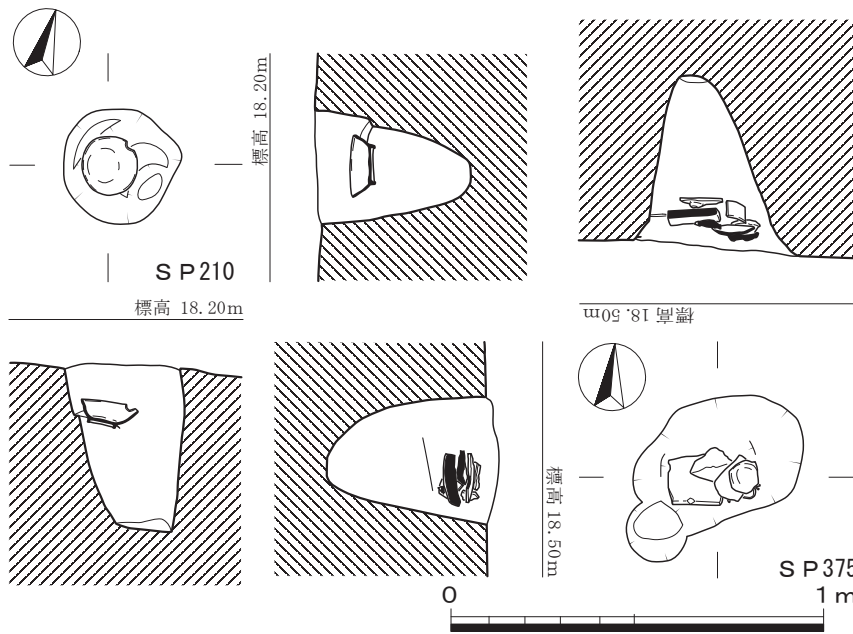
ピット

SP 210 (第20図、図版8)

調査区北西部で検出した遺構である。攪乱やピットに削平されるが、歪な円形の平面を有し、直径0.30 ~ 0.32 mを測る。底部は複数の段を有し、深さは最大で0.45 mを測る。埋土は、黒褐色土である。遺物は、土師器埴が深さ20cmから1点出土したのみである。

SP 375 (第20図、図版8)

調査区中央部で検出した遺構である。SA 252 を構成するピットのひとつと考えられるが、遺物出土状況を記録したことから、別個のピットとして報告する。楕円形の平面を有するピットに、直径0.17



第20図 SP210・375実測図 (1/20)

～0.19 mのピットが突き出る。楕円形のピットは長さ0.46 m、幅0.32 mで、深さは最大で0.48 mを測る。深さ0.18～0.22 mに段を有するほか、深さ5～18cmに、土師器や須恵器、古瓦、片岩片が積み重なった状態で埋没していた。埋土は暗褐色土である。

その他の遺構
波板状凹凸面

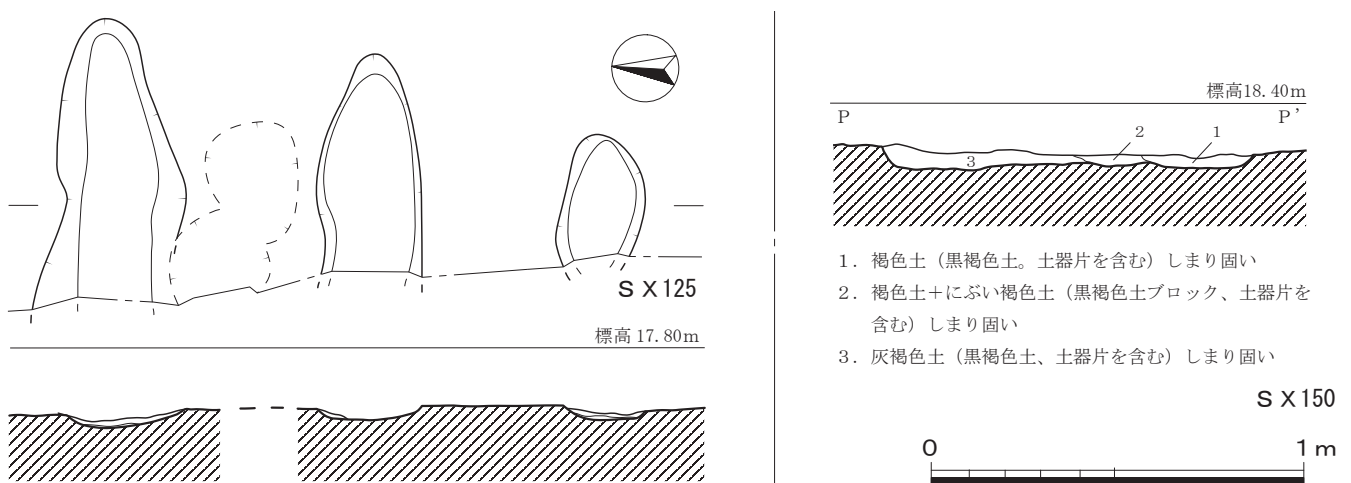
S X 125 (第21図、図版8)

調査区北西部壁際で検出した遺構である。西半は調査区外に及び、住宅の入口部分だった場所で地下げに伴い削平される。芯心距離0.6～0.65 m間隔で並ぶ3基の細長いピットで構成される。総延長は1.67 mで、方位はN-2°-Eである。ピットは、長軸0.34～0.78 m、短軸0.24～0.43 mを測り、深さは0.04 mで地形に沿って下がる傾向がある。埋土は、黄色土ブロックと礫を含む灰褐色土で占められる。遺物は細片ばかりで、土師器の壺や甕、須恵器の壺や甕、緑釉陶器が出土した。

硬化面

S X 150 (第5・21図、図版8)

調査区北端中央で検出した遺構である。長さ4.7 m、幅は最大で1.05 mの細長い不定形状で、北端はSD 140、中央部は複数のピットに削平される。遺構の南北で5 cmの段を有し、深さは最大で0.12 mを測る。埋土は土層図の通りで、黒褐色土や土器片を含む褐色系のしまりが固い土で占められる。出土遺物は、土師器の細片と須恵器の壺の破片各1点のみである。



第21図 SX125実測図、SX150土層図 (1/20)

S X 440 (第5図、図版2)

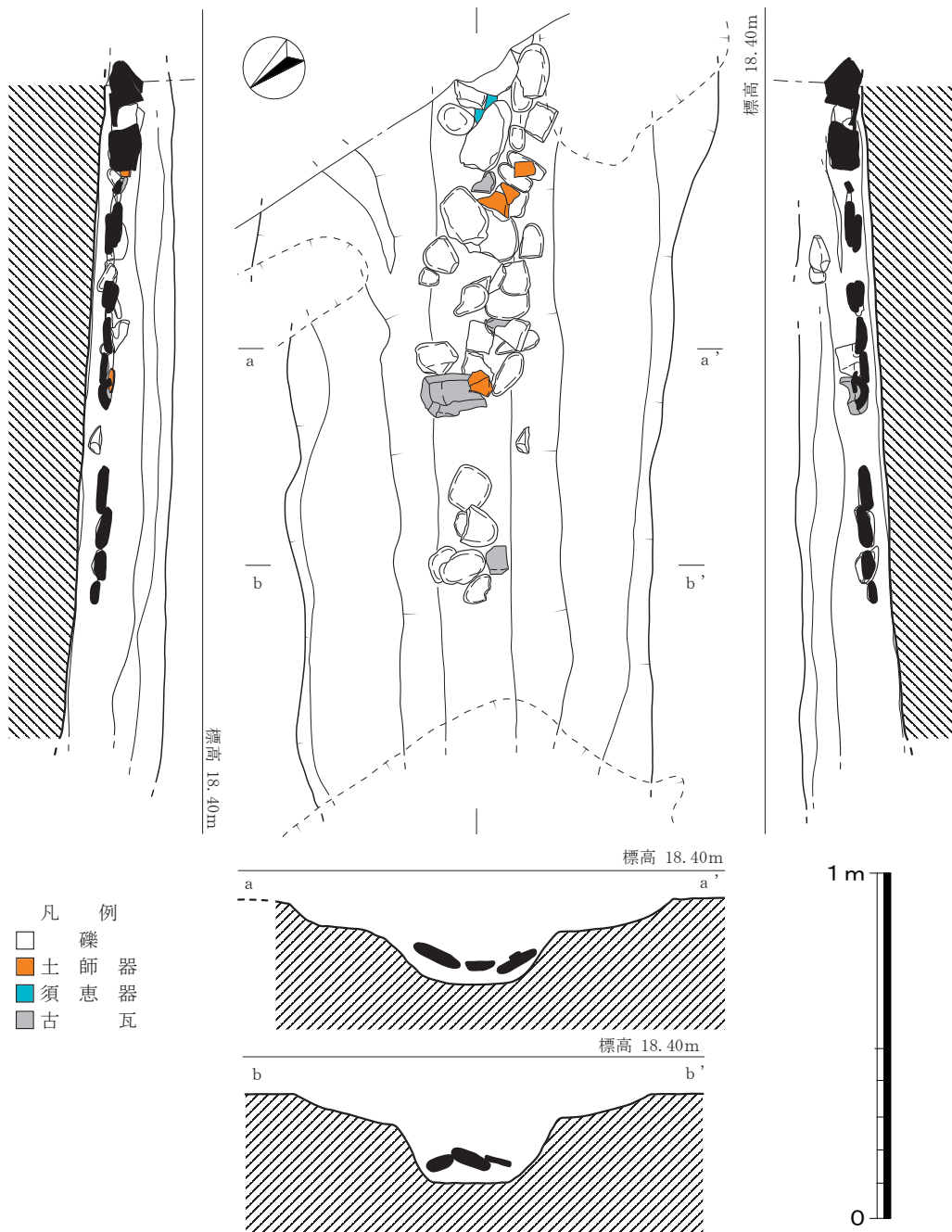
調査区南東部で検出した遺構である。SD 215やピットが後出する。平面は不定形で、長さ2.18 m、幅1.18 m、深さは最大で0.12 mを測る。埋土はしまりの固いぶい褐色土で占められる。遺物は、土師器の坏とみられる細片が1点のみ出土した。

(3) 中世の遺構

溝

SD 2 (第22図、図版9)

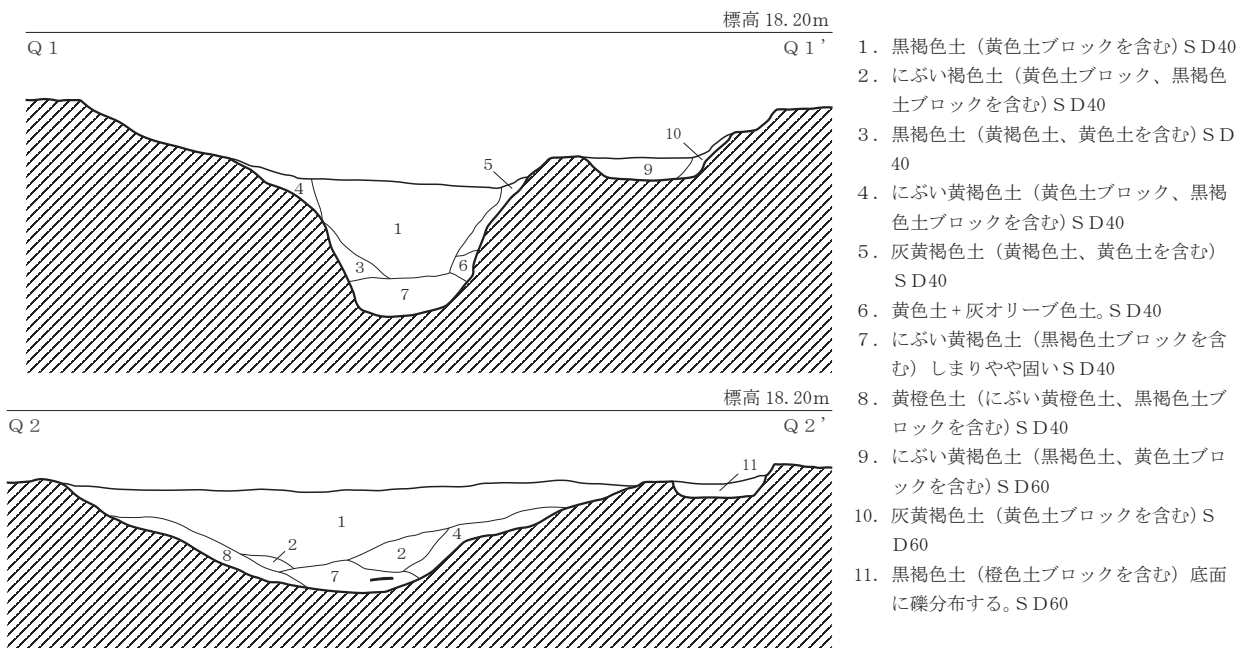
調査区北東部壁際で検出した溝で、走行方位はN-50°-Wである。検出したのは2.24 mで、



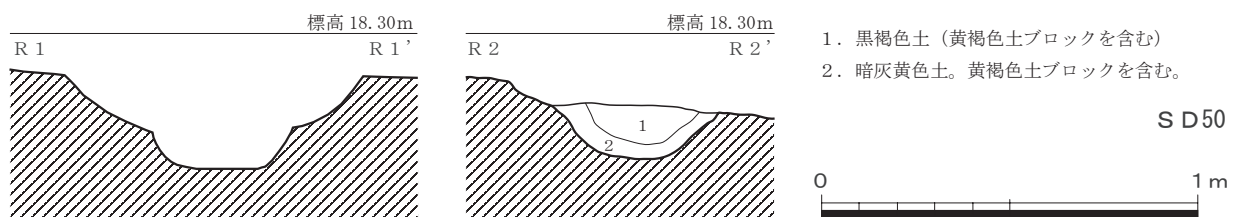
東端は調査区外に延び、西端は近代の廃棄土坑Cに削平される。溝の断面は、上端が極端に外反する逆台形状を呈し、上端幅は0.96～1.31 mを測る。上端から深さ0.05～0.15 mに段があり、中端幅0.44～0.53 m 下端幅0.20～0.23 mの細い溝にいたる。細い溝は南東端で深さ0.18 m、北西端で深さ0.31 mを測り、北西方向に深くなる様子が窺える。また、底面から約5～15cm 浮いた状態で、約5～20cm 四方の片岩礫や土師器、須恵器、古瓦が敷設されていた。埋土は、黒褐色土と締まりの固い灰褐色土で占められ、底面に砂利が集中する。出土遺物は、糸切り底の土師器の坏や小皿、甕、須恵器の甕胴部や平瓶、縄目文叩きスリ消しの古瓦、弥生土器の甕、焼成粘土塊、片岩製の磨製石斧の破片である。

S D 40 (第5・23 図、図版9)

調査区中央部北寄りで検出した溝である。走行方位はN-46～48° -Wで、S D 2の北西延長上に位置するが、礫が数点しか出土せず、幅も異なるため、別個の溝として報告する。東端は近代の廃棄土坑が削平し、西端は調査区外に及ぶため、検出したのは長さ12.3 mである。断面は、溝の西部がS D 2と同様に、上端が極端に外反する逆台形状を呈するのに対し、溝の東部は段が丸い皿状を呈す。上端幅は1.73～2.89 mを測り、上端から深さ0.08～0.41 mに複数の段がある。この段から、中端幅0.37～1.07 m、下端幅0.18～0.41 mの細い溝にいたる。細い溝も中央部に段を有し、



S D 40・60



第23図 S D 40・60土層図、S D 50土層図・断面図 (1/20)

南東端で深さ 0.11 m、北西端で深さ 0.51 mを測り、北西方向に向かって深くなる様相が窺える。埋土は土層図のとおりで、黒褐色土と黄色系の埋土で占められる。遺物は、弥生土器の甕の口縁部や底部、土師器の坏、小皿、甕、壺、土鍋、黒色土器B類とみられる細片、須恵器の坏蓋や甕、瓦器の埴、緑釉陶器の碗の細片、斜格子文叩きや縄目文叩きの平瓦や丸瓦が出土した。土師器の坏は、糸切り底の底部を含み、土鍋の破片はいずれも被熱している。

SD 50 (第5・23 図、図版9)

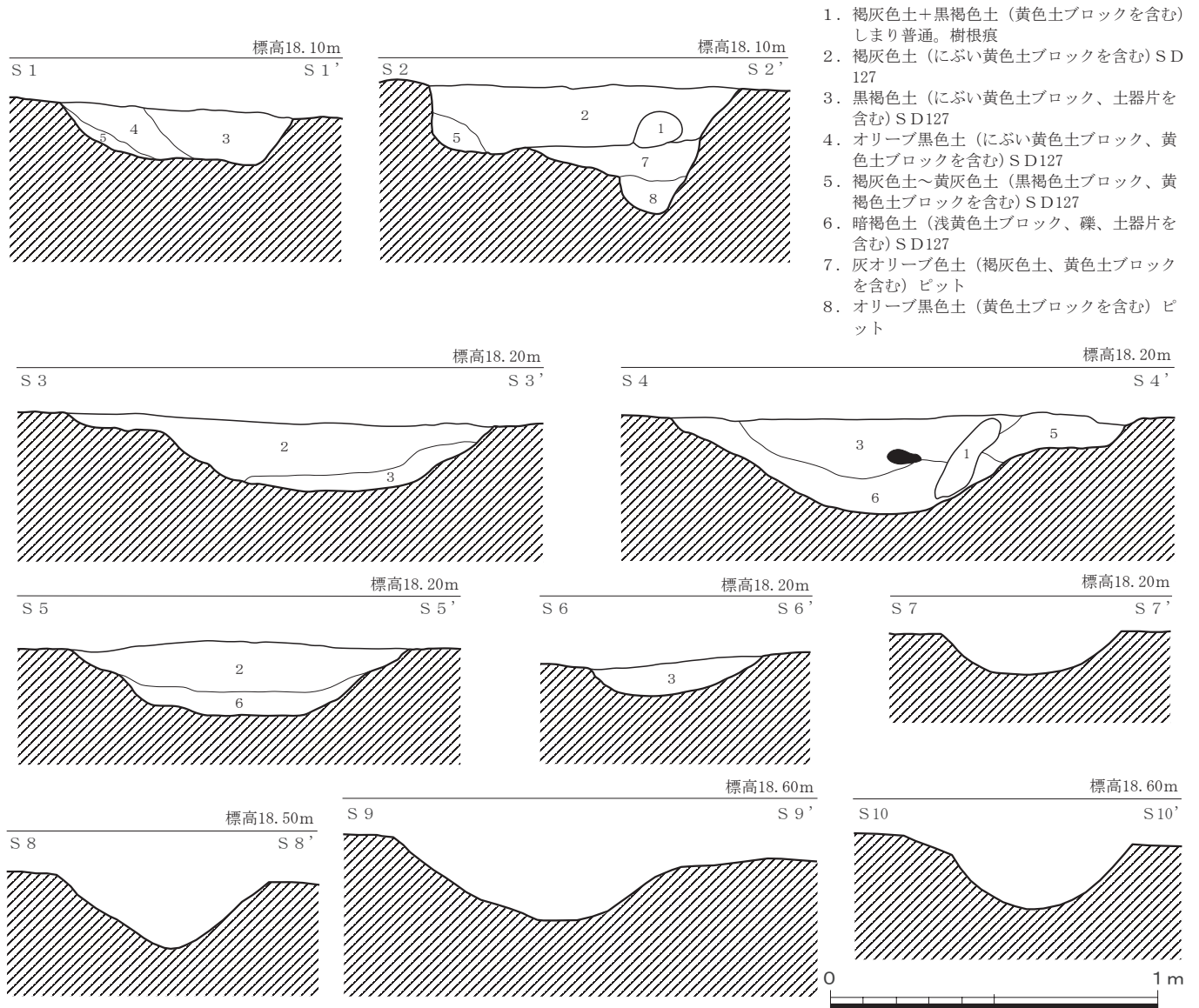
調査区北東部で検出した溝である。検出したのは 4.2 mのみで、西端は調査区外に及び、東端は近代の廃棄土坑が削平する。走行方位はN-45°-Wである。上端幅 0.50～0.82 m、下端幅 0.17～0.35 mを測る。溝の深さは最大で 0.29 mを測るが、底部には直径 0.34～0.51 m、深さ 0.06～0.18 mのピットが並ぶ。埋土は土層図のとおりで、黒褐色土と暗灰黄色土で二分される。また、ピットの底面には厚さ数cmの砂利の層がみられた。出土遺物は、土師器の甕や把手、須恵器の甕胴部片、白磁碗の破片、弥生土器の甕が出土したが、いずれも細片である。出土遺物からの年代決定に窮するが、SD 2・40・215 といった中世の溝と方位がほぼ同一であることから、中世の溝と判断した。

SD 60 (第5・23 図、図版9)

調査区北部、SD 40 の底面で検出した溝である。北端はSK 235、南端は攪乱、中央部はSD 40 が後出し、検出したのは長さ 5.7 mである。走行方位はN-38～46°-Wである。上端幅 0.22～0.59 m、下端幅 0.15～0.30 m、深さは最大で 0.31 mを測り、北に向かって深くなる傾向が見られた。埋土は土層図のとおりで、南端は底面に礫が集中する。遺構検出時に弥生土器の甕の底部片が出土したが、埋土から遺物は出土していない。走行方位がSD 2・40 と同一であることから、中世の遺構と判断した。

SD 127 (第5・24 図、図版10)

調査区の西部を南北方向に横切る溝である。走行方位はN-6～10.5°-Wで、緩やかな弧を描く。検出したのは 41.5 mで、南端で複数の攪乱に、北端で住宅入口のスロープに削平されるほかは、重複する遺構の大半に後出する。溝の断面は丸みを帯びる逆台形状からV字状で、上端幅は 0.43～1.41 m、下端幅は 0.09～0.85 mを測る。溝の深さは 0.14～0.40 mを測り、溝の北部に向かって深くなる傾向がある。また、溝の中央部と南部の底面には段があり、その深さは 0.35～0.43 mを測る。埋土は土層図のとおりで、にぶい黄色土ブロックを含む灰褐色から黒褐色の上層と、浅黄色土ブロックや礫、土器片を含む暗褐色土の下層で大別できる。堆積状況から、掘り返された様子が窺える。なお、溝南部の埋土は、黄色土ブロックを含む黒褐色土で占められる。出土遺物は多岐にわたり、土師器の坏や皿、埴、甕、把手、壺、土鍋、黒色土器A類の埴、須恵器の坏蓋や壺や甕、瓦器の埴や捏鉢、斜格子文叩きや縄目文叩きの平瓦や丸瓦、緑釉・灰釉陶器の碗などの細片、貿易陶磁器の白磁碗や白磁合子蓋、青磁碗、褐釉陶器の壺、弥生土器の甕、埴とみられる土製品、滑石製石鍋の再加工品や砥石などの石製品、被熱した礫や片岩の破片、石英、赤チャートの剥片、鉄片や鉄滓といった鉄製品である。土師器の坏は、糸切り底が占める。



第24図 SD127土層図・断面図 (1/20)

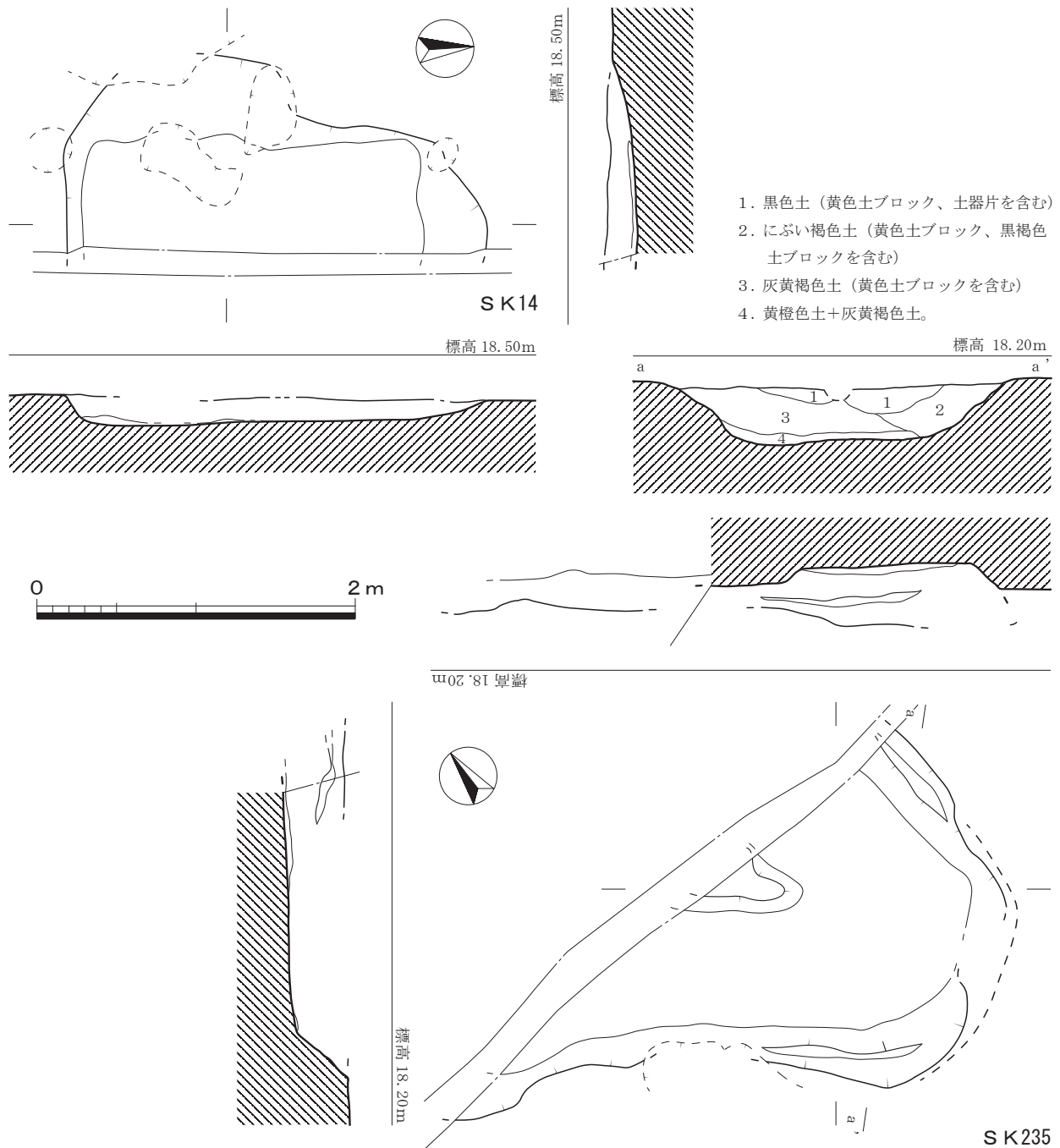
土坑

SK 14 (第 25 図、図版 1)

調査区東部壁際で検出した遺構である。近代の廃棄土坑やピットが後出し、かつ遺構の東半が調査区外に及ぶが、南西隅が突き出る平面形を有する。検出したのは長さ 2.61 m、幅 1.23 m で、深さは 0.21 m を測る。出土遺物は、糸切り底の坏や小皿、埴、土鍋、黒色土器 A 類の埴、須恵器の甕の胴部片、瓦器の埴、貿易陶磁器の青磁碗の破片、弥生土器の細片、焼成粘土塊がある。

SK 235 (第 25 図、図版 10)

調査区北端中央部壁際で検出した遺構である。当初、SD 40 の延長部として掘削したが、平面形が定まらず、埋土の様相が異なることから、掘削中に精査した結果、別個の土坑と判断した。北半は調査区外に及び、SD 40・240 に後出する。検出したのは長軸 3.44 m、短軸 2.26 m のみである。深さは最大で 0.42 m を測るが、土坑の中央部に約 10cm 盛り上がる箇所がある。埋土は土層図のと



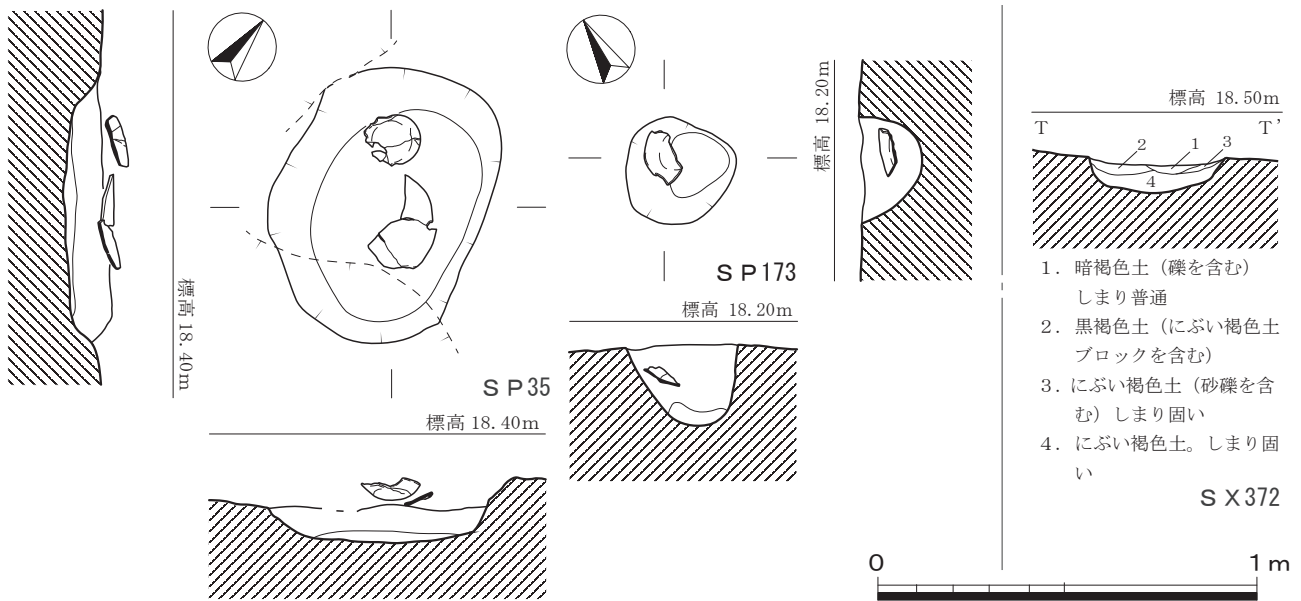
第25図 S K14実測図、S K235実測図・土層図 (1/40)

おりで、黄色土ブロックを含む褐色系の埋土で占められるが、底面は黄橙色土と灰黄褐色土が堆積していた。遺物は、糸切り底の坏や小皿、土鍋、黒色土器A類の埴、須恵器の甕や壺、瓦器埴、貿易陶磁器の白磁碗と青磁碗の破片、縄目文叩きの平瓦、弥生土器の細片が出土した。

ピット

SP 35 (第26図、図版10)

調査区東部中央で検出した遺構である。近代の土坑やピットに削平されるが、楕円形の平面を有する。長さ0.74m、幅0.54m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色土だった。出土遺物は、糸切り



第26図 SP35・173実測図、SX372土層図(1/20)

底の土師器坏と須恵器の捏鉢の口縁部、黒色土器A類の細片のほか、隣接するSP36と共に検出した際に、土師器の坏や皿、黒色土器B類の埴、焼成粘土塊が出土した。

SP173 (第26図、図版10)

調査区北西部で検出したピットである。SX175に接しており、遺構検出時はSP173が後出するとしていたが、出土遺物の年代からSX175が後出すると判断した。三角形に近い円形の平面を有し、直径0.27～0.29m、深さ0.22mを測る。埋土は、灰褐色土ブロックを含む黒褐色土である。出土遺物は、深さ10cm付近に斜めに埋まっていた土師器の皿1点のみである。

その他の遺構

硬化面

SX372 (第5・15・16・26図、図版11)

調査区南西部で検出した遺構である。SD475などの溝に後出し、北端はSX373と同一の硬化面で、攪乱に削平される。走行方位はN-6～10°-Wで、細長い平面形を有する。残存長14.8m、幅0.30～0.69m、深さ0.04～0.16mを測る。埋土は、遺構の北部はにぶい黄橙色土ブロックや土器片、礫を含む褐灰色土で占められ、南端は砂礫を含む褐色系の埋土である。暗褐色土や黒褐色土以外は、いずれもしまりが固い。遺物は細片ばかりで、土師器の甕、須恵器の坏や甕、須恵器の坏または坏蓋の破片、被熱した片岩礫が出土した。

SX373 (第5・15図、図版11)

調査区南西部で検出した遺構である。すでに述べたように、北端はSX372と同一の硬化面であり、埋土の様相や後出する遺構に乏しいことから、SX372と対になるとみられる。北端はピットや攪乱が後出するほか、遺構の中央部も栗石が後出する。走行方位はN-4.5～12°-Wで、SX372と心芯距離で1.3～1.5m間隔を保ち並走する。残存長8.52m、幅0.28～0.56m、深さ0.08～0.12mを測り、細長い平面形を有する。埋土は土器片、礫を含む褐灰色土で、SX372と同様に

しまりが固い。S X 373 単独の出土遺物は無く、S X 372 と同一の硬化面北端から、土師器の坏や皿、埴、甕、須恵器の甕、黒色土器A類の埴、瓦器埴が出土した。

(4) 近世の遺構

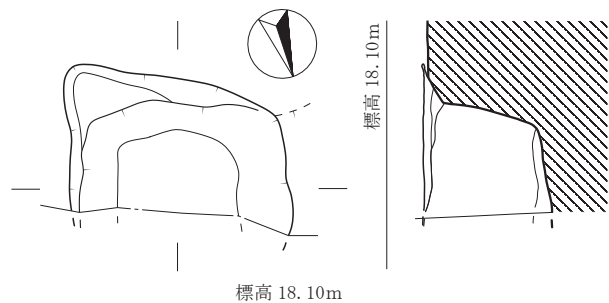
土墳墓

ST5 (第5図、図版11)

調査区北東隅壁際で検出した土墳墓で、一連の土墳墓群の北東部に位置する。北辺は調査区外に及ぶが、隅丸方形の平面を有し、長軸1.89m、短軸1.09m以上を測る。掘削中に空洞を確認したため、安全上から深さ0.39mまで掘削した。墓壇の中央に、棺桶の痕跡とみられる直径0.67～0.73m、深さ0.54mの空洞を確認した。埋土は灰褐色土で、黒褐色土ブロックや明黄褐色土ブロックを含む。出土遺物は、土師器の甕や古瓦の摩耗した細片、近世の所産とみられる土師器の皿の破片に加えて、染付の碗が出土した。

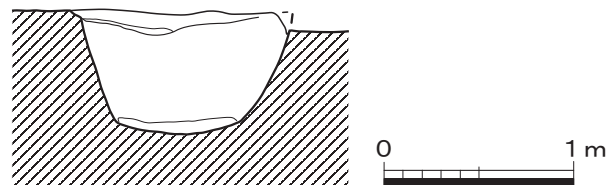
ST6 (第27図、図版11)

ST5と同様に、調査区北東隅壁際で検出した土墳墓で、土墳墓群の北端に位置する。土墳墓で唯一完掘した。北辺は調査区外に及ぶが、隅丸方形の平面を有するとみられ、長軸1.17m、短軸0.84m以上、深さは最大で0.67mを測る。遺物は、土師器の坏や甕、黒色土器A類、弥生土器の細片が出土した。



ST7 (第5図、図版11)

近世墓群の中央で検出した。歪な隅丸方形の平面を有し、長軸1.38m、短軸1.19mを測り、周囲の遺構の断面が墓壇壁面で確認できる深さ



0.72mまで掘削した。埋土は黒褐色土で、暗褐色土ブロックや橙色土ブロックを含む。出土遺物は、土師器の坏や甕、埴の破片、弥生土器の細片である。

ST8 (第5図、図版11)

調査区北東隅で検出した墓壇である。隅丸方形の平面を有し、長軸1.58m、短軸1.44mを測り、周囲の遺構の断面が墓壇壁面で確認できる深さ0.72mまで掘削した。埋土は黒褐色土で、黒色土ブロックや黄色土ブロック、砂利を含む。遺物はいずれも細片で、土師器の坏や甕、埴、黒色土器A類の埴、弥生土器の細片、近世の染付小皿や陶器鉢の破片が出土した。

ST9 (第5図、図版11・12)

調査区北東隅で検出した墓壇で、近世墓群の南西隅に位置する。隅丸方形の平面を有し、長軸1.34m、短軸1.20mを測り、周囲の遺構の断面が確認できる深さ0.55mまで掘削した。埋土は灰褐色土で、黄色土ブロックを含む。出土遺物は、土師器の坏や甕、近世の陶器碗や小皿の細片である。

ST 10 (第5図、図版11・12)

土壙墓群の南部で検出した。隅丸方形の平面を有し、長軸1.22 m、短軸1.18 mを測る。掘削中に空洞を確認したため、安全上から深さ0.55 mまで掘削した。墓壙の中央に、棺桶の痕跡とみられる直径0.65～0.69 m、深さ0.52 mの空洞を確認した。埋土は黒褐色土で、橙色土ブロックや砂利を含む。遺物は、土師器の坏や甕、黒色土器A類の壺に加えて、近世の陶器播鉢、染付の碗や小皿が出土した。いずれも細片だが、染付の小皿には19世紀以降の蛇ノ目釉剥ぎが観察できる。

ST 11 (第5図、図版11・12)

土壙墓群の南東隅に位置する。南辺は攪乱に削平されている。隅丸方形の平面を有し、一辺1.27～1.29 mを測る。深さ0.78 mまで掘削した。埋土は黒褐色土で、暗褐色土や黄色土ブロックを含む。遺物は、土師器の坏や甕、土鍋、須恵器の坏、弥生土器の甕、近世の染付碗の細片が出土した。

ST 15 (第5図、図版11・12)

土壙墓群の西部で検出した、隅丸方形の平面を有する土壙墓である。一辺1.27～1.29 mを測り、掘削中に空洞を確認したため、安全上深さ0.78 mまで掘削した。墓壙の中央に、棺桶の痕跡とみられる直径0.58 m、深さ0.54 mの空洞を確認した。埋土は黒褐色土で、黄色土ブロックを大量に含む。出土遺物は、土師器の坏や甕に加えて、近世陶器の甕、白色不透明のガラス容器の細片がある。

(5) その他の遺構

埋甕

SX 175 (第5図、図版12)

調査区中央部北東寄りで検出した埋甕である。削平が著しく、検出したのは底部の約10cmのみである。掘方は長さ1.27 m、幅0.66 m、深さ0.17 mである。埋甕は陶器製で、近世末期以降の製品である。埋甕以外の出土遺物は、掘方からの土師器坏と陶器の細片各1点のみである。

地震痕跡

断層跡 (第5図、図版12)

調査区北東部で検出した。遺構検出時に橙色土と灰褐色土の境界を確認し、整地などの遺構と想定して掘削した。しかし、ST 7・8など重複する遺構の壁面で灰褐色土がほぼ垂直に立ち上がり、橙色土との境界が直線的であることを確認した。この地山の変位は、調査区北東隅でN-51～74°-Wの方向に3.86 m続く。北隣に断層崖がある点や、第310次調査地点でも同様の地山の変位を検出した点から、断層に伴う地山の変位と判断した。

地割跡 (第5図、図版12)

調査区南部中央で検出した地割跡である。遺構面で長さ2.6 mを検出し、調査区を反転する際に重機で断ち割り、断面を確認した。遺構面から深さ0.8 mの砂礫層まで至り、埋土は暗褐色土で占められる。攪乱が後出するのみで詳細な年代は明らかにできないが、筑後国府跡の複数地点で検出されている地震痕跡と同様に、『日本書紀』卷第二十九に登場する、天武天皇7年(678)12月に筑紫国で起きた「筑紫地震」に伴う地割痕の可能性が高い。

4. 出土遺物

遺物の総量は、パンコンテナー 14 箱である。このうち S I 20 出土の弥生土器が 2 箱、近代の廃棄土坑から出土したガラス製品が 1 箱を占める。そのほかの遺物として、古代の土師器や須恵器、黒色土器 A 類・B 類、緑釉陶器や越州窯系青磁といった陶磁器、丸玉や権、埴埴などの土製品、台石などの石製品、中世の土師器や須恵器、瓦器、龍泉窯系青磁碗を中心とした貿易陶磁器、土錘などの土製品、滑石製石鍋や磨石などの石製品、近世の土師器や陶磁器、近代の陶磁器、鉄鎌や鉄片、鉄滓、銭貨などの金属製品が挙げられる。個別の法量や色調、調整などの詳細については、遺物観察表を参照願いたい。以下、各遺物の特徴について簡単に補足する。

S I 20 出土遺物 (第 28 ~ 29 図、第 2・3 表、図版 13・14)

1 ~ 8 は甕である。5 と 6 は外面をナデ消しているが、1 と 3 は縦方向の工具痕が観察できる。7 と 8 は、外面に縦方向のハケ目を施す。2 ~ 4 は底部の破片で、2 は黒斑が残り、4 は焼成後に穿孔を施す。9 ~ 11 は大甕で、9 と 10 は口縁部から胴部、11 は胴部から底部である。いずれも口縁は頸部に突帯を有し、胴部は縦方向のハケ目を施す。11 の底部には、叩きの痕跡が見られる。12 は壺、13 ~ 15 は鉢で、13 は手づくねで作られている。16 は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、内外面共にハケ目を施し、胎土は赤色を呈す。17 は器台で、内外面共に摩耗が著しい。18 は高坏の脚部で、胎土は橙色を呈し、外面に縦方向、内面に斜め~横方向のハケ目を施す。19 と 20 は、床面で伏せられて出土した鉢と小鉢である。19 は厚手で外面は黒色を呈す。焼成時にヒビが生じているほか、口縁部の一部が欠けており、欠けた部分に 20 の小鉢が差し込まれていた状態で伏せられていた。21 の甕と 22 の短頸壺は、ピットから出土した。共に外面はハケ目を施すが、21 は内面のハケ目をナデ消す。

S A 252 出土遺物 (第 30 図、第 3 表、図版 14)

23 はへら切り底の土師器の坏、24 と 25 は埴で、25 は内面にへらミガキを施す。26 は土師器甕の口縁部、27 は黒色土器 A 類の埴で、内面にへらミガキを施す。28 は弥生土器の甕の口縁部で、内面に靱圧痕がみられる。

S D 1 出土遺物 (第 30 図、第 3 表、図版 14)

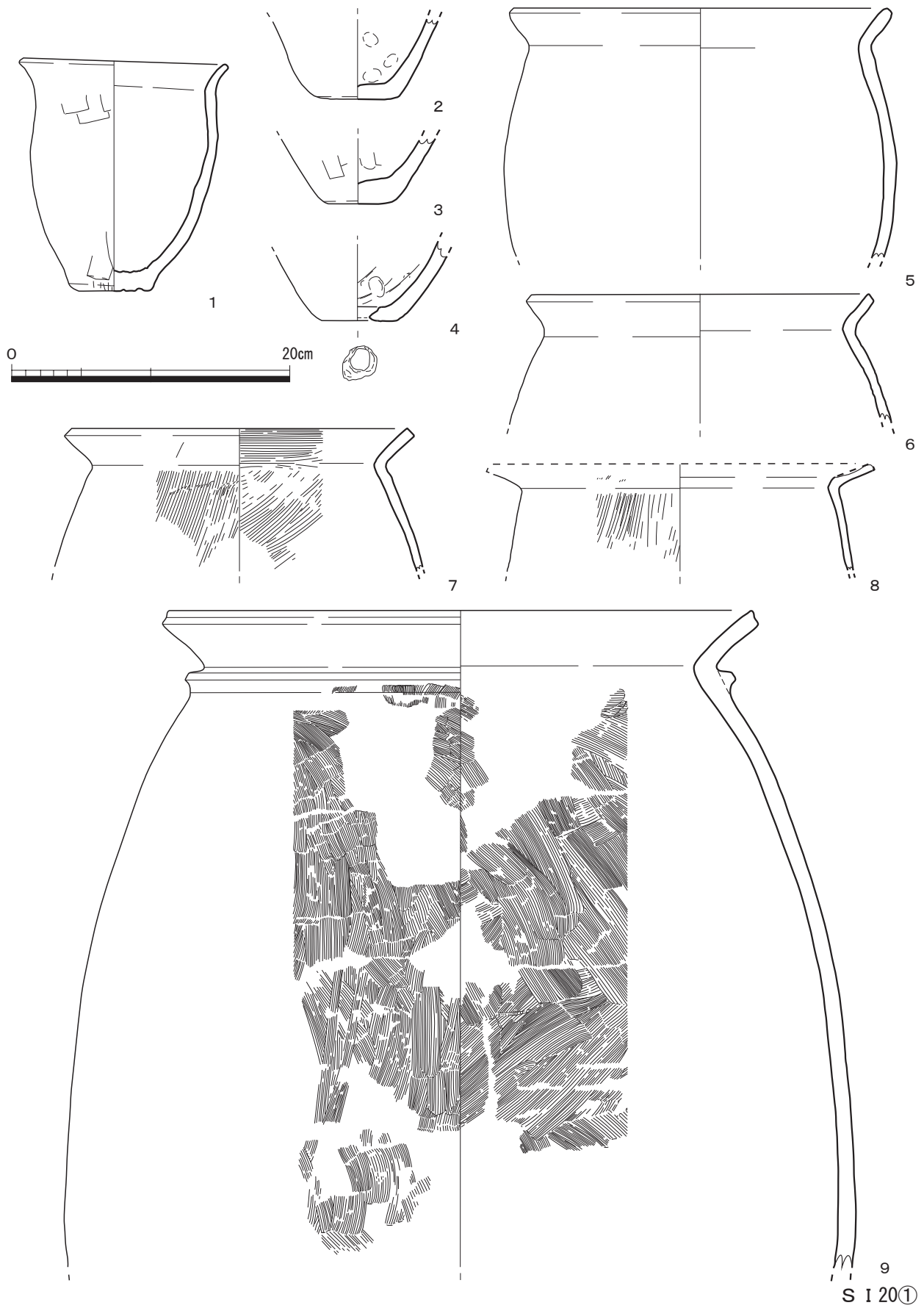
29 は東部で出土したへら切り底の小皿である。30 は土師器壺の底部で、円形文叩きで調整されている。31 と 32 は須恵器で、31 は坏、32 は波状文を施す甕の口縁部である。

S D 115 出土遺物 (第 30 図、第 3 表、図版 14)

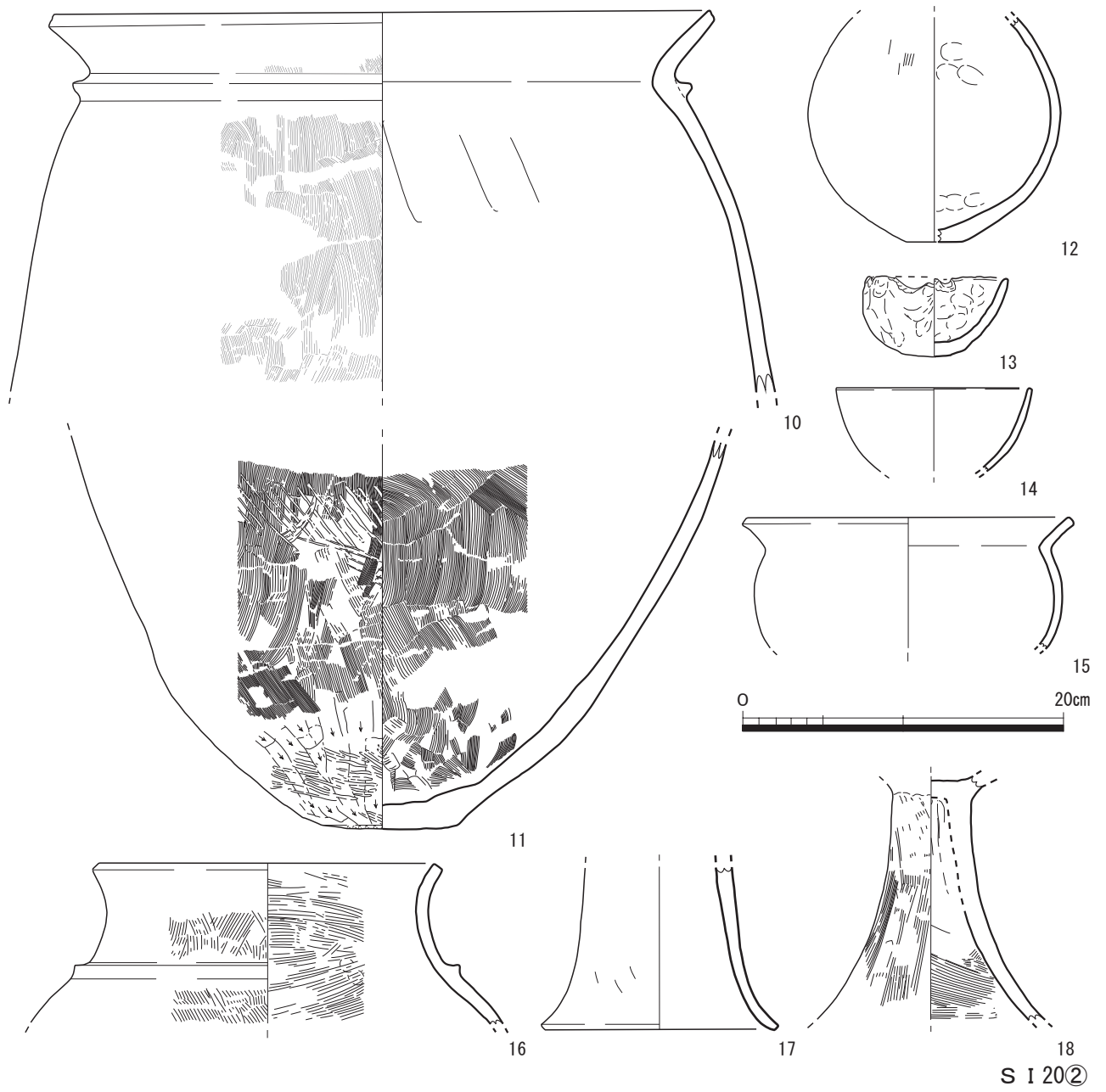
図示できたのは 33 の須恵器の坏のみである。へら切り底の底部片である。

S D 120 出土遺物 (第 30 図、第 3 表、図版 15)

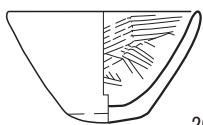
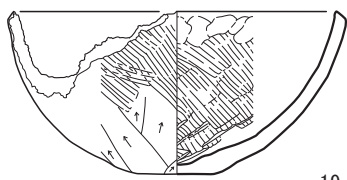
34 は混入した弥生土器の高坏の脚部である。35 は土師器の坏、36 は皿で、いずれもへら切り底である。37 は黒色土器 A 類の埴の底部である。38 ~ 43 は須恵器である。38 ~ 40 は坏、41 は甕の胴部、42 は口縁部で自然釉が被る。43 は壺の底部である。44 ~ 46 は緑釉陶器で、44 は高台に重ね焼き痕跡が残るほか、見込みに文様とみられる線刻がある。45 と 46 は細片で、46 は内面が黒変する。47



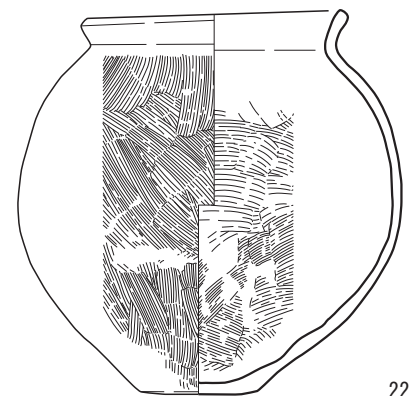
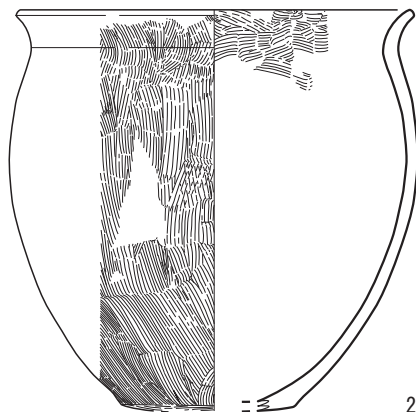
第28図 出土遺物実測図① (1/4)



S I 20②

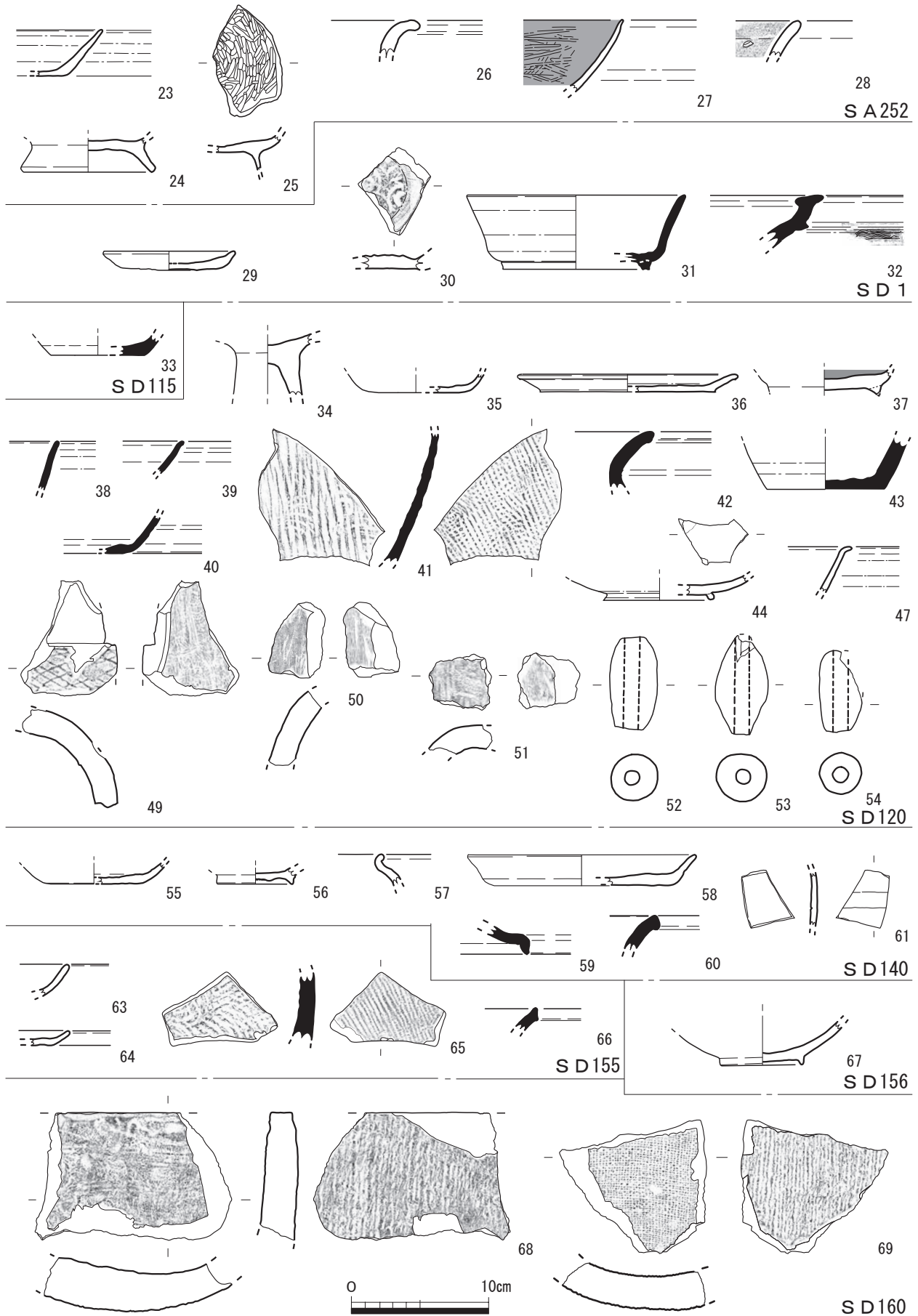


S I 20床面



S I 20ピット

第29図 出土遺物実測図② (1/4)



第30図 出土遺物実測図③ (1/4)

は灰釉陶器の碗で、外面は露胎である。48は貿易陶磁器で、龍泉窯系の青磁碗の細片である。12世紀後半に収まり、SD 127からの混入品の可能性がある。49～51は丸瓦の破片で、49は玉縁と斜格子文叩きを有する。50と51は細片で摩耗しているが、50は縄目文叩きスリ消しを施す。52～54は土錘で、口径や胎土、調整が共通する。

SD 140 出土遺物 (第30図、第3・4表、図版16)

55～58は土師器である。55はへら切り底の坏、56は碗で、いずれも底部の破片である。57は小壺の口縁部、58は皿で、底部には線刻が見られる。59は須恵器の坏蓋、60は甕で、いずれも口縁部の細片である。61と62は緑釉陶器である。61は壺とみられる胴部の破片で、外面は煤ける。62は碗の口縁部の細片である。

SD 155 出土遺物 (第30図、第4表、図版16)

63と64は土師器で、63は坏の口縁部、64はへら切り底の皿である。65と66は須恵器の甕で、65は胴部、66は口縁部の破片である。

SD 156 出土遺物 (第30図、第4表、図版16)

図示できたのは、67の土師器の碗のみである。底部の破片で、内外面の摩耗が著しい。

SD 160 出土遺物 (第30図、第4表、図版15)

68と69は、共に縄目文叩きスリ消しの平瓦である。68は凹面に指紋が残り、凸面や折損面にススが付着する。

SD 165 出土遺物 (第31図、第4表、図版16・17)

70と71は土師器で、70はへら切り底の小皿、71は外面にススが付着する甕の口縁部片である。72と73は平瓦で、72は斜格子文叩きを施し、焼成後の穿孔が見られる。74は滑石製石鍋の口縁部片で、折損面の一部は研磨されている。

SD 170 出土遺物 (第31図、第4表、図版17)

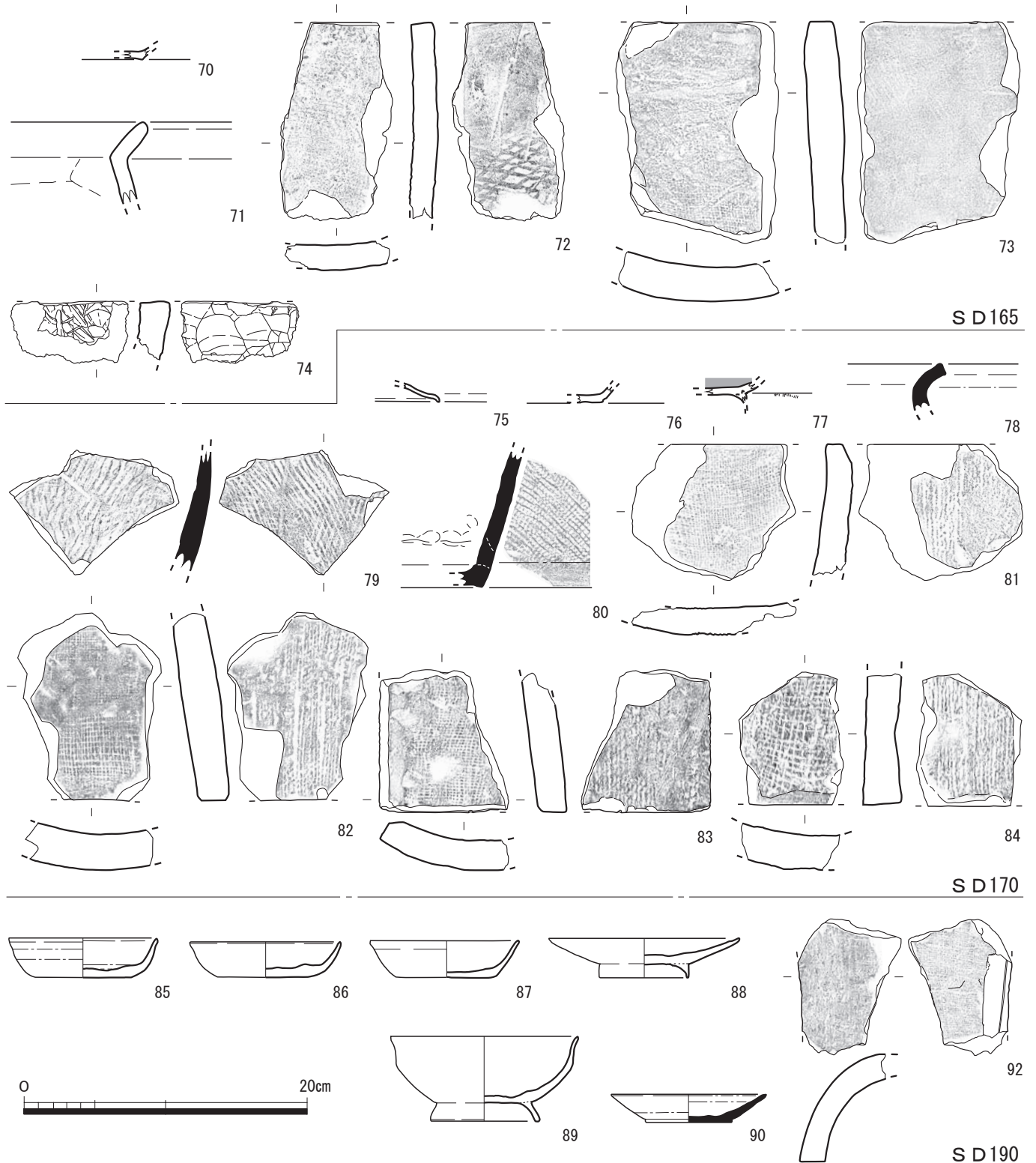
75と76は土師器である。75は坏蓋の口縁部、76はへら切り底の坏で、外面にススが付着する。77は黒色土器A類の碗で、外面に門歯痕が見られる。78～80は須恵器で、78は甕の口縁部、79は外面に灰が被る甕の胴部、80は壺の底部の破片である。81～84は古瓦である。いずれも平瓦で、縄目文叩きをスリ消す。84は凹面の布目が比較的粗く、ススが付着する。

SD 190 出土遺物 (第31図、第4表、図版17・18)

85～89は土師器である。85～87は坏で、いずれもへら切り底に板状圧痕が残る。88は台付皿で、へら切り底に高台を接合する。89は碗で、外面の一部が剥離する。90は須恵器の皿で、口縁部は焼け歪む。底部はへら切り底である。91は緑釉陶器の細片。92は丸瓦で、縄目文叩きを施す。

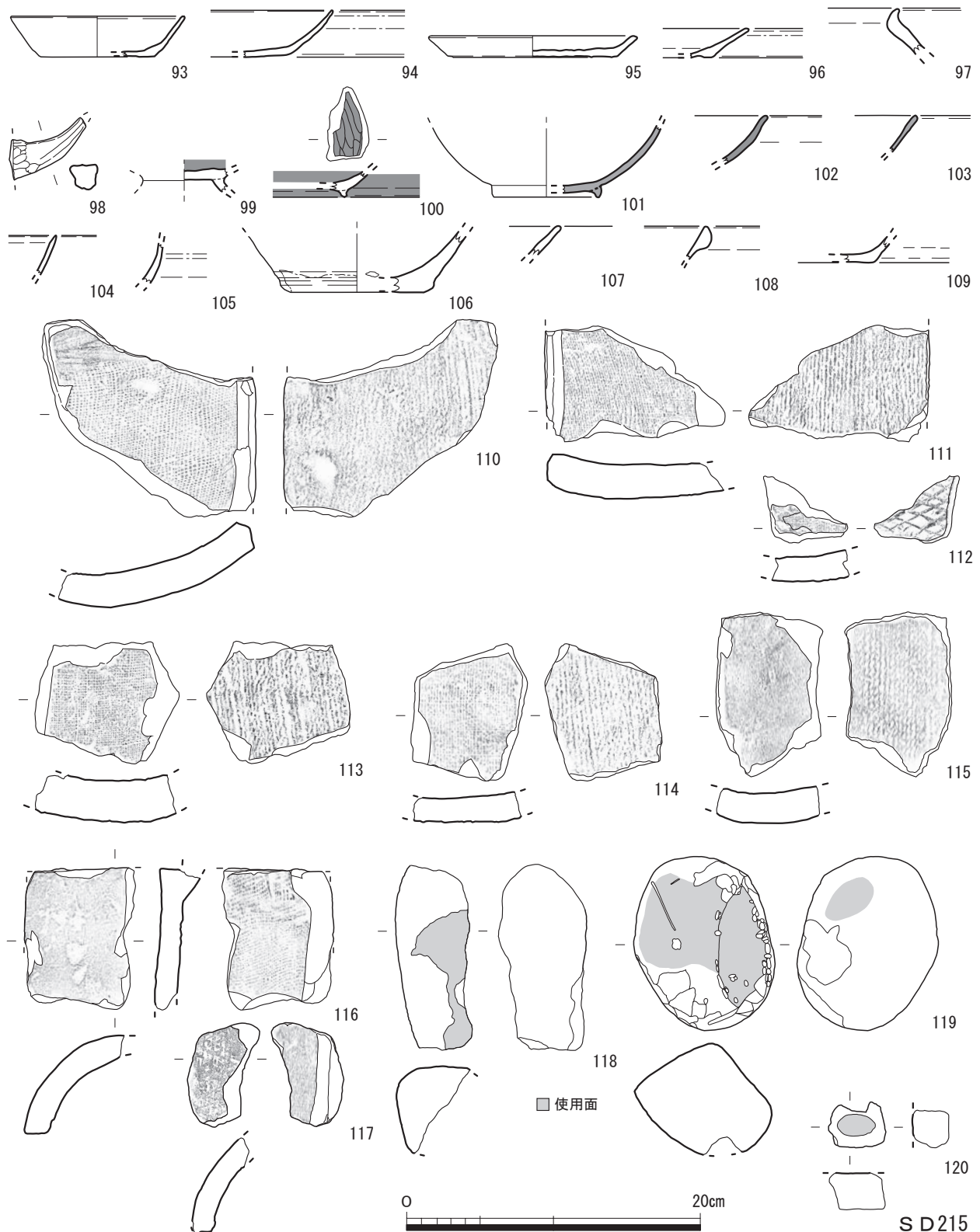
SD 215 出土遺物 (第32図、第4・5表、図版18・19)

93と94は土師器の坏、95と96は皿である。いずれもへら切り底で、94の底部には板状圧痕もみられる。また、93の外面と96の内面には門歯痕が残る。97は土師器壺の口縁部の破片で、頸部は短い。98は把手の破片で、ススが付着する。99は黒色土器A類、100は黒色土器B類の碗の底部



第31図 出土遺物実測図④ (1/4)

で、100 は内面にヘラミガキを施す。101 ~ 103 は瓦器塚である。101 は底部から側面の破片、102 と 103 は口縁部の破片で、いずれも器壁は摩耗する。104 と 105 は緑釉陶器の碗の細片で、104 は釉薬の大半が剥離し、105 は外面がススで黒変する。106 ~ 108 は貿易陶磁器の破片である。106 は、下層から出土した越州系青磁碗の底部である。内面には目跡が2ヶ所残り、外面はヘラ切り底で一部は



第32図 出土遺物実測図⑤ (1/4)

露胎である。107は口縁部の細片だが、色調や胎土から越州窯系青磁碗の口縁部と判断した。108は、溝の底部から出土した白磁碗の口縁部片である。玉縁で、若干黄色味を帯びる。109は施釉されていないが、硬質であることや色調から、陶器の壺の底部片と判断した。110～115は平瓦である。110と

115は縄目文叩きをスリ消し、112は斜格子文叩き、111と113、114は縄目文叩きを施す。116と117は丸瓦である。凸面の調整は、116は完全にナデ消されており、117は斜格子文叩きをナデ消す。118～120は石製品である。118と119は玄武岩製の磨石で、118は破片だが使用面が確認できる。119は、使用面が2面あるほか、反対側にも使用面がみられる。120は、砂岩製の砥石の破片である。細片だが、使用面の一部が残存する。

S D 365 出土遺物 (第33図、第5表、図版19・20)

121～125は土師器である。121は埴の底部片で、摩耗著しいが、外面に門歯痕が見られる。122は壺の底部で、内面にススが付着する。123は甕、124と125は把手である。126と127は須恵器で、126は坏蓋の頂部片、127は甕の胴部片である。128は古瓦の丸瓦で、縄目文叩きをスリ消す。布目には綴じ痕が見られ、側面部は未調整である。129は軽石を用いた石製品で、平坦面を有する。

S D 405 出土遺物 (第33図、第5表、図版20)

130はへら切り底の土師器の坏の底部片である。131は黒色土器A類の埴の口縁部片で、内面にへらミガキを施す。132は須恵器の坏で、高台部の細片である。

S D 446 出土遺物 (第33図、第5表、図版20)

133は土師器の坏で、底部がナデ消されている。134は須恵器の甕の胴部片。135～137は古瓦である。135は丸瓦で、凸面は横ナデを施し、凹面は模骨痕がみられる。136と137は平瓦片で、136は小口側の破片、137は側面部の破片で、へら切りの痕跡がみられる。凸面には、136は縄目文叩きを施し、137は縄目文叩きをスリ消す。

S D 453 出土遺物 (第33図、第5表、図版20)

図示できたのは138の土師器の坏のみである。へら切り底の底部片で、外面は摩耗する。

S D 475 出土遺物 (第33図、第5表、図版20)

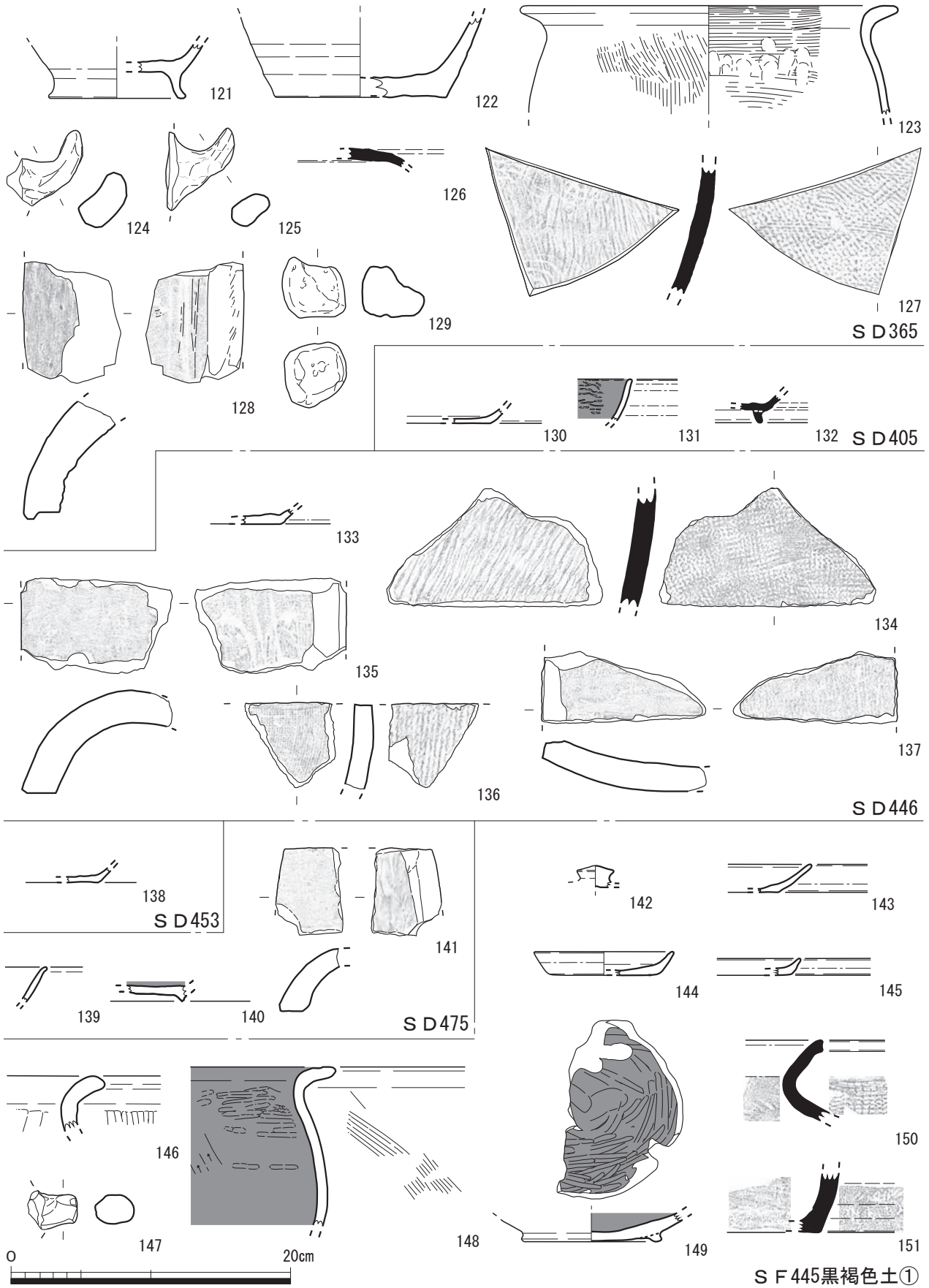
139は土師器の坏で、摩耗著しい口縁部の破片である。140は黒色土器A類の埴で、高台をナデ接合した底部片である。141は丸瓦である。基部の破片とみられ、凸面はナデ消しを施す。

S F 445 黒褐色土出土遺物 (第33・34図、第5・6表、図版20)

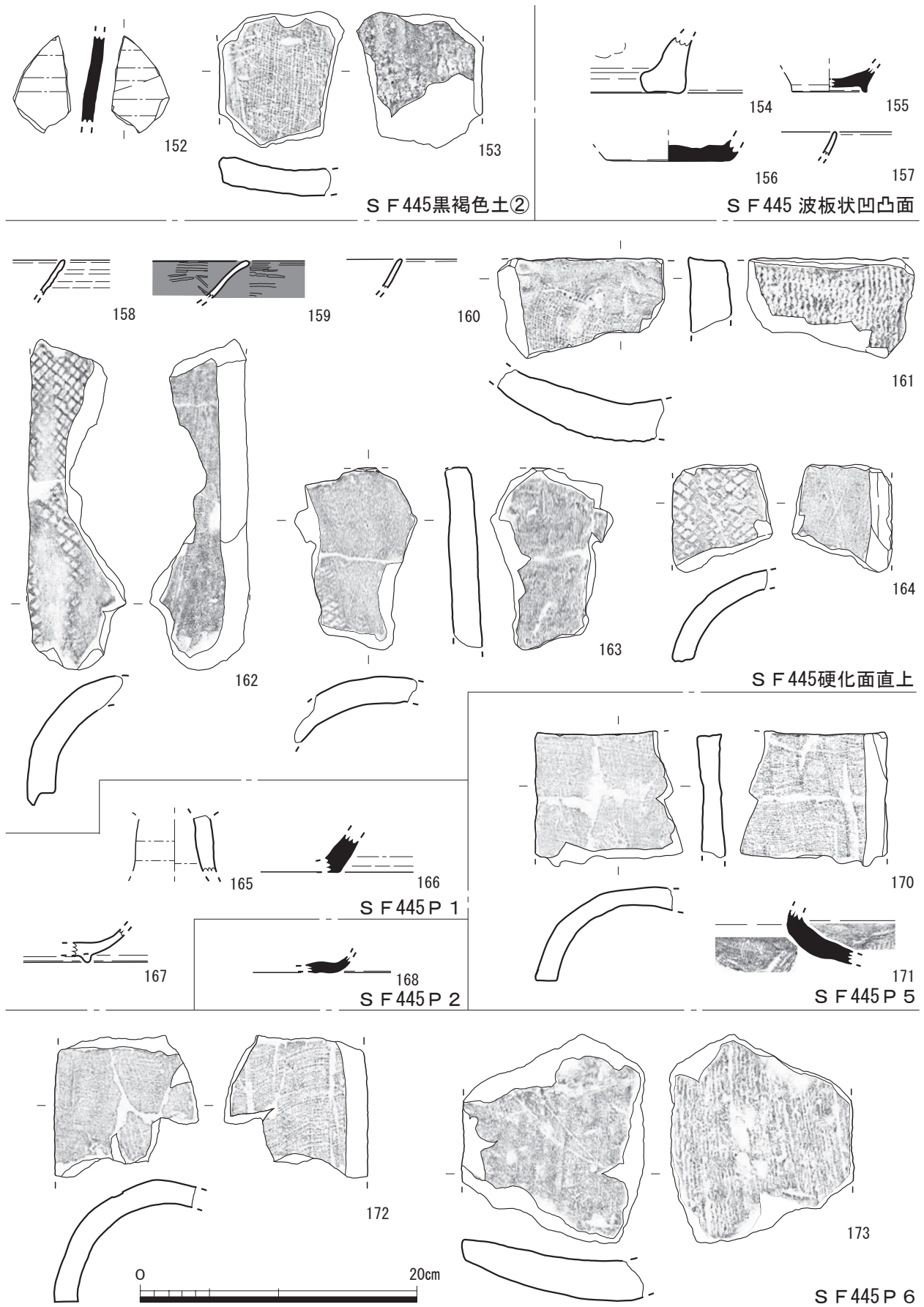
142～147は土師器で、142は坏蓋の摘み、143はへら切り底の皿で、外面に黒斑を有する。144と145は小皿で、前者はへら切り底、後者は糸切り底である。144は内面に門歯痕が見られる。146は甕の口縁部、147は把手の破片である。148と149は黒色土器A類で、148は甕、149は埴である。いずれも、内面にへらミガキを施す。150～152は須恵器で、150は甕の口縁部、151は壺の底部の破片である。150は、硬化面直上やP6出土の破片と接合した。152は壺の胴部の破片だが、胎土が硬質で、色調から陶器の露胎部の可能性がある。153は縄目文叩きの平瓦の側面部片である。

S F 445 波板状凹凸面出土遺物 (第34図、第6表、図版20・21)

154は土師器の甗で、底部片の外面に黒斑が見られる。155と156は須恵器で、それぞれ坏と壺の底部である。156は外面に自然釉が付着する。157は青磁碗の口縁部の破片である。灰黄色の比較的硬い胎土で、貿易陶磁器とみられる。



第33図 出土遺物実測図⑥ (1/4)



第34図 出土遺物実測図⑦ (1/4)

S F 445 硬化面直上出土遺物 (第 34 図、第 6 表、図版 22)

158 は土師器坏の口縁部片。159 は黒色土器 B 類の皿の口縁部片で、内外面にヘラミガキを施す。160 は緑釉陶器の口縁部片で、角度から碗と考えられる。161 ~ 164 は古瓦である。161 のみ平瓦で、縄目文叩きを施す。162 ~ 164 は丸瓦で、いずれも斜格子文叩きを施す。ただし、162 は摩耗が著しく、163 は叩きをナゲ消す。

S F 445 ピット出土遺物 (第 34・35 図、第 6 表、図版 22・23)

165 ~ 167 は P 1 からの出土遺物である。いずれも細片で、165 は土師器高坏の脚部、166 は須恵器の壺の底部、167 は緑釉陶器の碗の底部である。167 は P 6 出土破片と接合した。168 と 169 は P 2 から出土した遺物で、168 は坏の底部、169 は緑釉陶器の底部とみられる細片である。168 は P 1 出土の細片が接合した。170 と 171 は P 5 からの出土遺物で、170 は縄目文叩きをスリ消す丸瓦、171 は須恵器の甕の頸部片である。172 と 173 は P 6 から出土した古瓦である。172 は丸瓦、173 は平瓦で、いずれも縄目文叩きをスリ消す側面部片である。172 は 170 と色調や胎土が類似し、同一個体の可能性がある。173 は凹凸面ともに摩耗する。174 ~ 176 は P 8 からの出土遺物である。174 は土師器の坏蓋の摘み、175 は P 10 出土破片と接合した須恵器の坏の口縁部である。176 は平瓦の側面部片で、縄目文叩きをスリ消し、側面部をヘラで調整する。177 と 178 は P 9 から出土した遺物で、177 は土師器の把手の破片、178 は緑釉陶器の碗の口縁部である。179 は P 10 出土の須恵器鉢の底部片である。180 と 181 は P 12 から出土した遺物である。180 は須恵器の甕の胴部片で、P 11 出土の破片と接合する。181 は縄目文叩きを施す平瓦の側面部片である。182 と 183 は、P 13 からの出土遺物である。182 は縄目文叩きをスリ消す平瓦の破片。183 は土製の丸玉で、外面はススで黒変する。

S F 445 掘方出土遺物 (第 35 図、第 6 表、図版 23)

細片が多く、図示できたのは 184 と 185 のみである。184 は、ヘラ切り底の土師器の坏の底部片。185 は須恵器の甕の胴部片である。

S I 133 出土遺物 (第 35 図、第 6 表、図版 23・24)

図示できたのはいずれも土師器である。186 は坏蓋の口縁部片で、ハケ目の痕跡がある。187 はヘラ切り底とみられる皿の底部片。188 は甕の底部で、底部外面には縄蓆の痕跡が見られる。

S K 80 出土遺物 (第 35 図、第 6 表、図版 24)

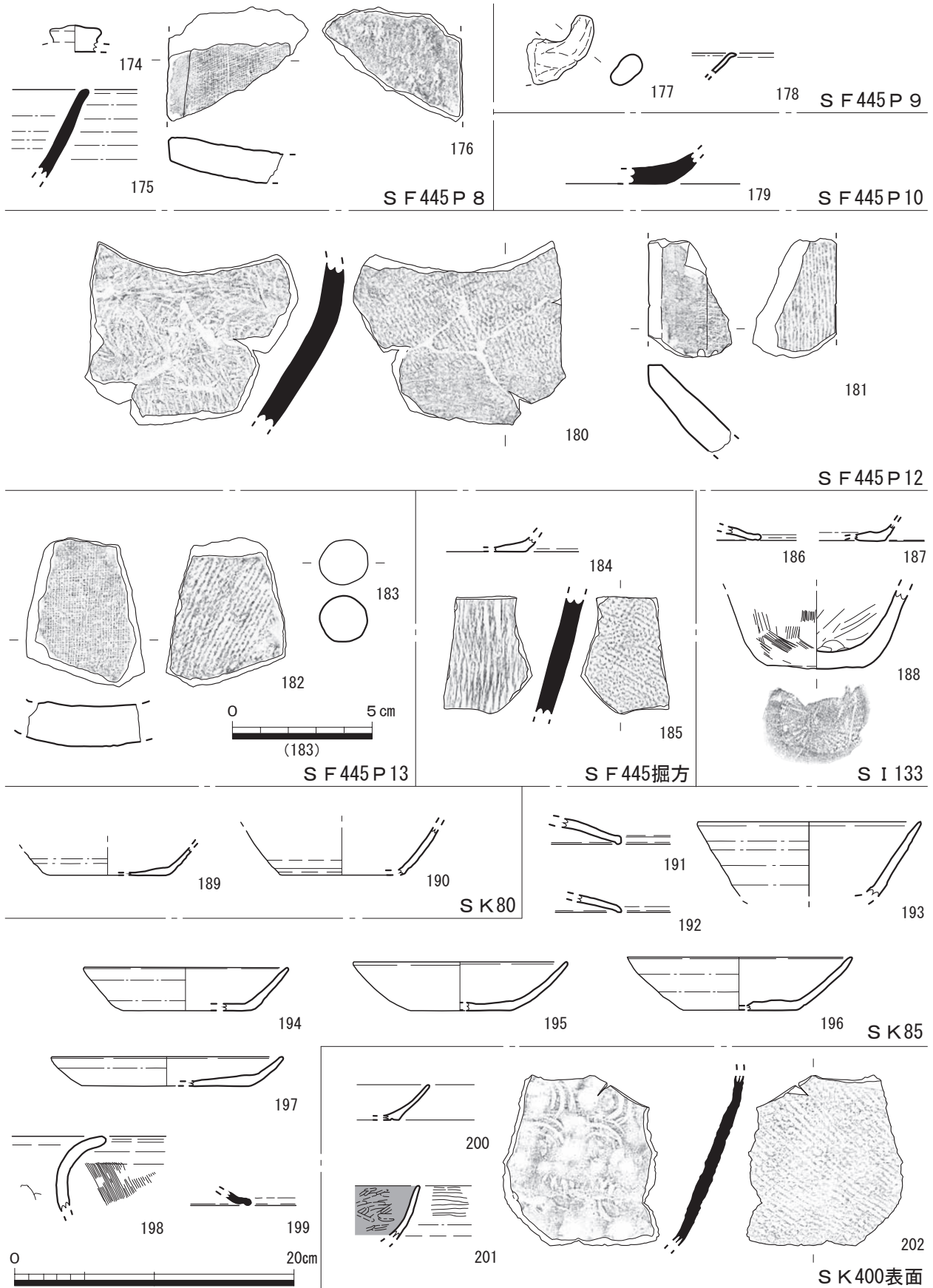
図示できたのは土師器の坏と碗の底部各 1 点のみである。189 は坏の底部で、ヘラ切り底とみられる。190 は碗の底部片で、わずかに残存する底部の端から、削り出し高台の筑後型碗と考えられる。

S K 85 出土遺物 (第 35 図、第 6・7 表、図版 24)

191 と 192 は、土師器の坏蓋の口縁部である。193 は土師器の碗、194 ~ 196 は土師器の坏、197 は土師器の皿で、いずれも図上で反転復元した。196 は摩耗して不明だが、底部が残存する 194 と 195、197 はヘラ切り底である。198 は土師器の甕、199 は須恵器の坏蓋で、いずれも口縁部の破片である。

S K 400 表面出土遺物 (第 35 図、第 7 表、図版 24)

200 は土師器の坏でヘラ切り底。201 は黒色土器 A 類の碗の口縁部片で、内外面ともにヘラミガキ



第35図 出土遺物実測図⑧ (1/2、1/4)

を施す。202は須恵器の甕の胴部片で、器壁の凹凸が著しい。

S K 400 出土遺物 (第36図、第7表、図版24・25)

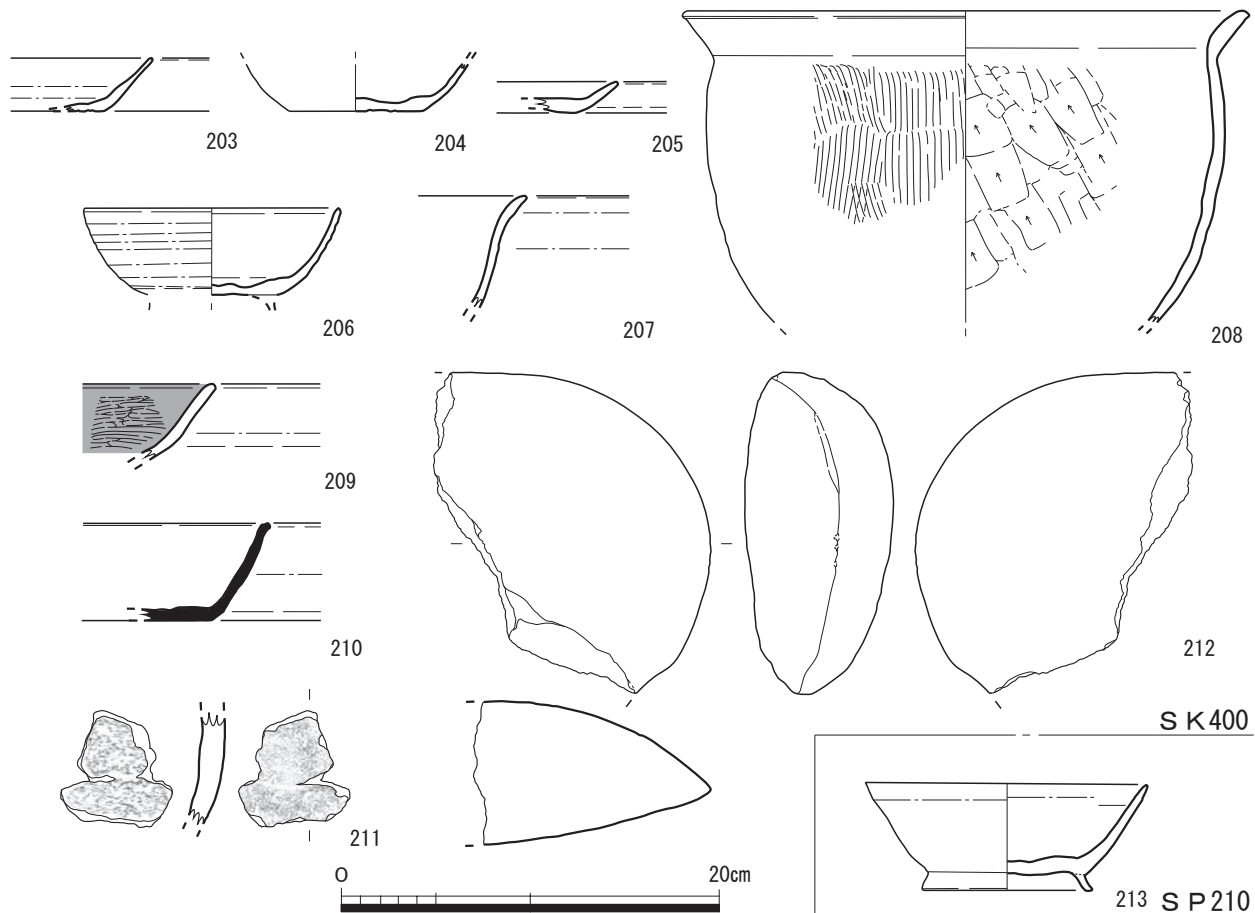
203と204は土師器の坏である。いずれもへら切り底で、203は口縁部に油煙、204は内面に門歯痕がみられる。205は土師器の皿。206は土師器の碗で、高台は剥離し内面に門歯痕が残る。207は土師器の鉢の口縁部、208は土師器の甕で、外面はススが残る。209は黒色土器A類の碗で、内面にへらミガキを施す。210は須恵器の坏で、二次被熱を受けるほか、底部外面はナデ調整を施す。211の土製品は、内面に藁痕跡残り、外面の一部が被熱で変色している。甕の破片の可能性もあるが、藁痕跡があることから、器種不明の土製品とした。212は玄武岩製の磨製石器で、明瞭な稜線を有する。外面にススが付着しており、台石の可能性もある。

S P 210 出土遺物 (第36図、第7表、図版25)

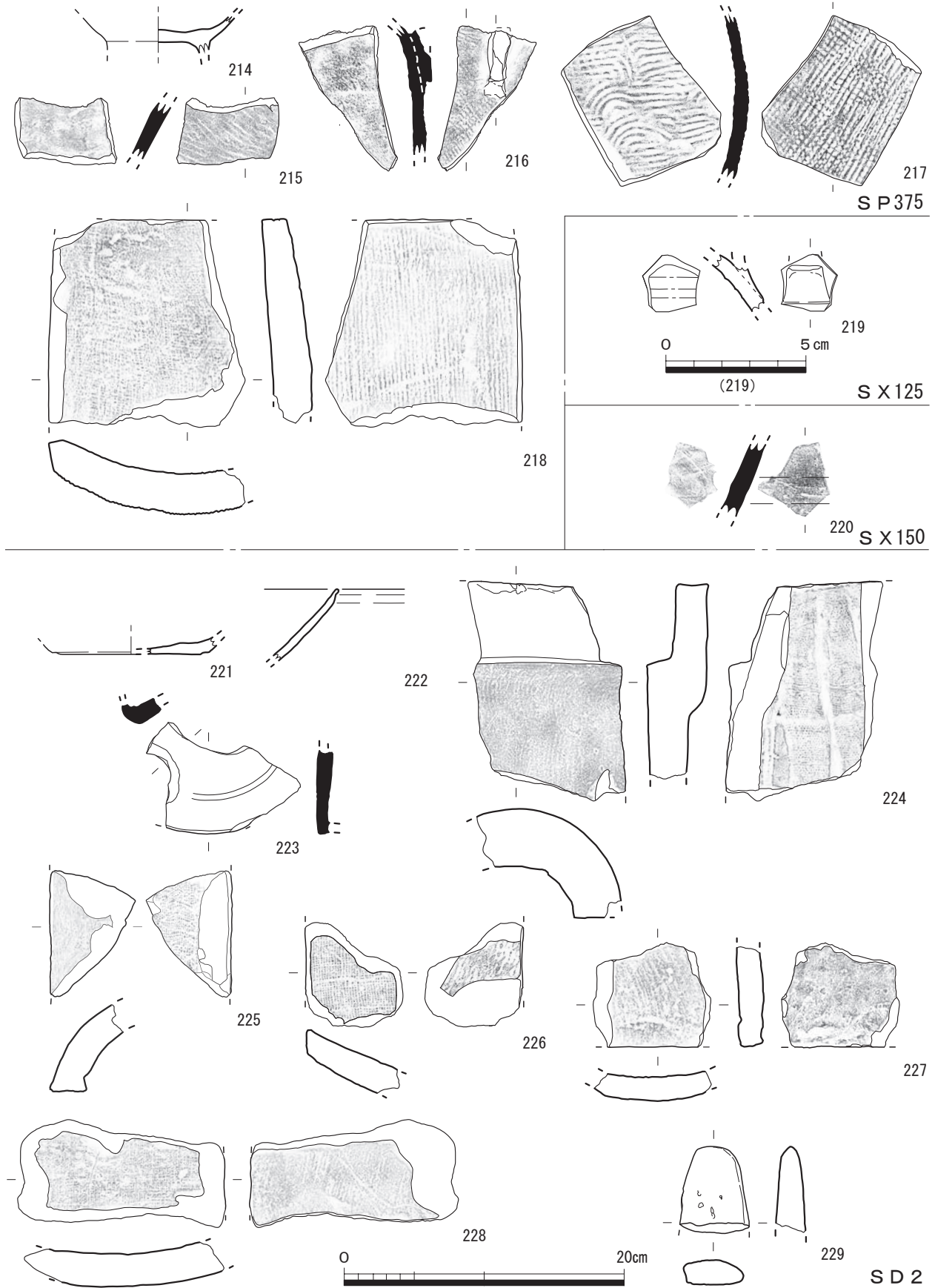
出土したのは、土師器の碗213のみである。へら切りで板状圧痕が残る底部に、回転ナデで高台を接合する。明瞭な使用面は無いが、底部はやや歪み、内面に門歯痕が残る。

S P 375 出土遺物 (第37図、第7表、図版25)

214は土師器の碗の底部片。215と216は須恵器の壺である。215は胴部片で、216は肩部の耳が接合する箇所の破片である。217は須恵器の甕の胴部片で、被熱により風化する。218は平瓦の角部で、凸面に縄目文叩き、側面と小口面にへら調整を施す。



第36図 出土遺物実測図⑨ (1/4)



第37図 出土遺物実測図⑩ (1/2、1/4)

S X 125 出土遺物 (第 37 図、第 7 表、図版 25)

出土遺物は細片ばかりで、わずかに 219 の緑釉陶器のみ図示できた。貼付取手の基部がわずかに残存することから、水注の肩部片と考えられる。

S X 150 出土遺物 (第 37 図、第 7 表、図版 25)

図示できたのは、220 の須恵器壺のみである。胴部片で、外面はヘラケズリ、内面は縦方向の工具によるナデを施す。壺の胴部でも、比較的底部に近い箇所破片と考えられる。

S D 2 出土遺物 (第 37 図、第 7 表、図版 26)

221 は土師器の坏の底部で、回転ヘラ切りの痕が明瞭に残る。222 は土師器の壺の口縁部で、口縁端を細く調整している。223 は須恵器の平瓶の天井部で、接合痕が観察できる。224 ~ 228 は古瓦の破片である。224 と 225 が丸瓦、226 ~ 228 が平瓦で、上層から出土した 228 以外の 4 点は、溝底面の礫群から出土した。大半が凸面に縄目文叩きスリ消しで調整するが、227 のみナデ調整を施す。凹面には、コビキ痕が残る 227 以外は、布目痕が残る。229 は磨製石斧の基部とみられる破片で、片岩を縦目方向に成形する。

S D 40 出土遺物 (第 38 図、第 7 表、図版 26・27)

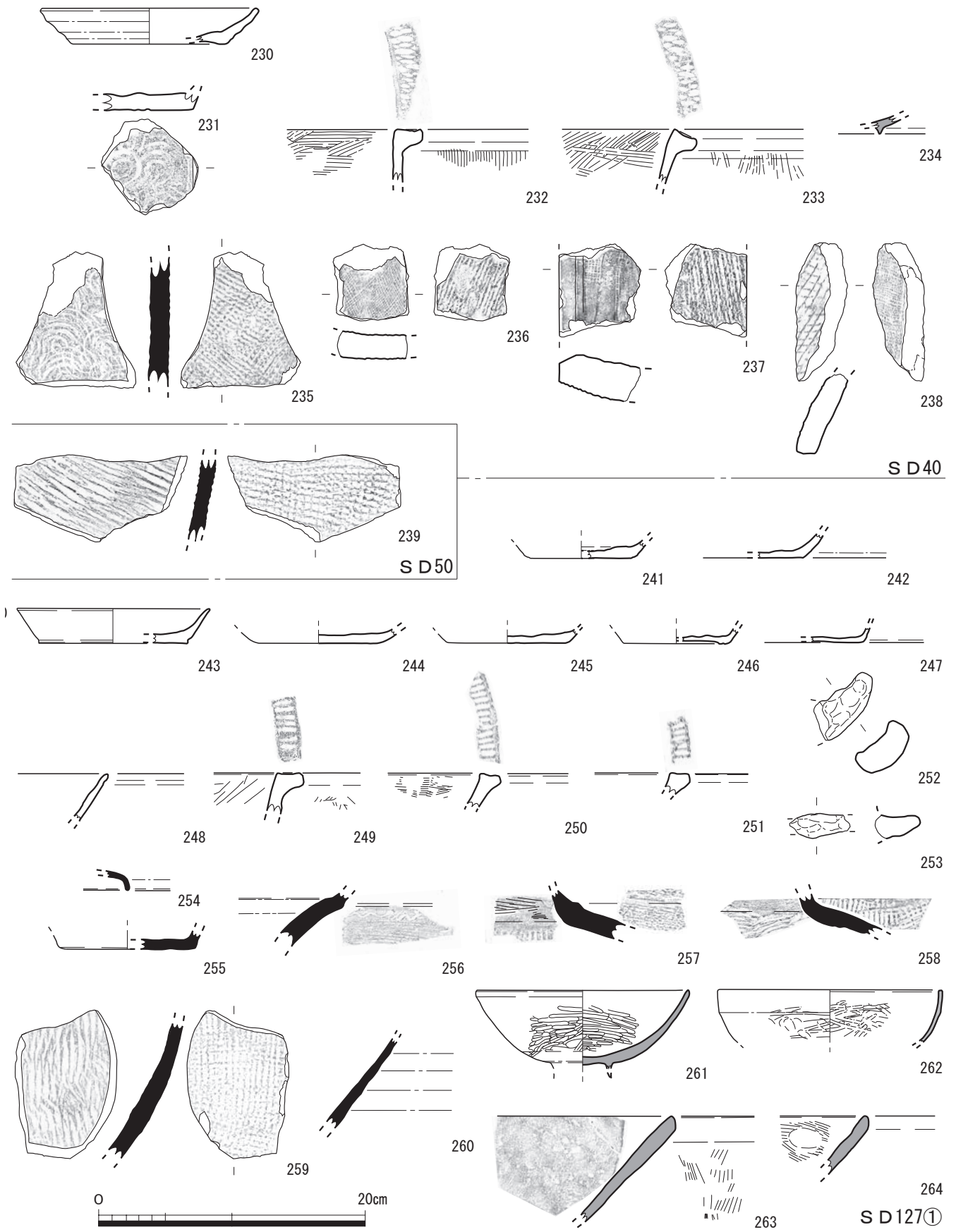
230 は土師器の皿である。底部は糸切り底で板状圧痕が見られるほか、内面に粘土粒が付着する。231 は土師器壺の底部片で、内面に同心円文叩きが残る。232 と 233 は土鍋の口縁部片である。外面は被熱して風化しており、黒変する。なお、これらの口縁部片に接合しないが、胎土や二次被熱の状態が類似する破片が約 20 点出土している。234 は瓦器壺の高台の細片で、摩耗が著しい。235 は須恵器甕の胴部片。236 と 237 は平瓦で、236 は凸面に縄目文叩きを施す。237 は縄目文叩きをスリ消し、側面に破断面が残る側面部片である。238 は、斜格子文叩きを施す丸瓦の側面部片である。

S D 50 出土遺物 (第 38 図、第 7 表、図版 27)

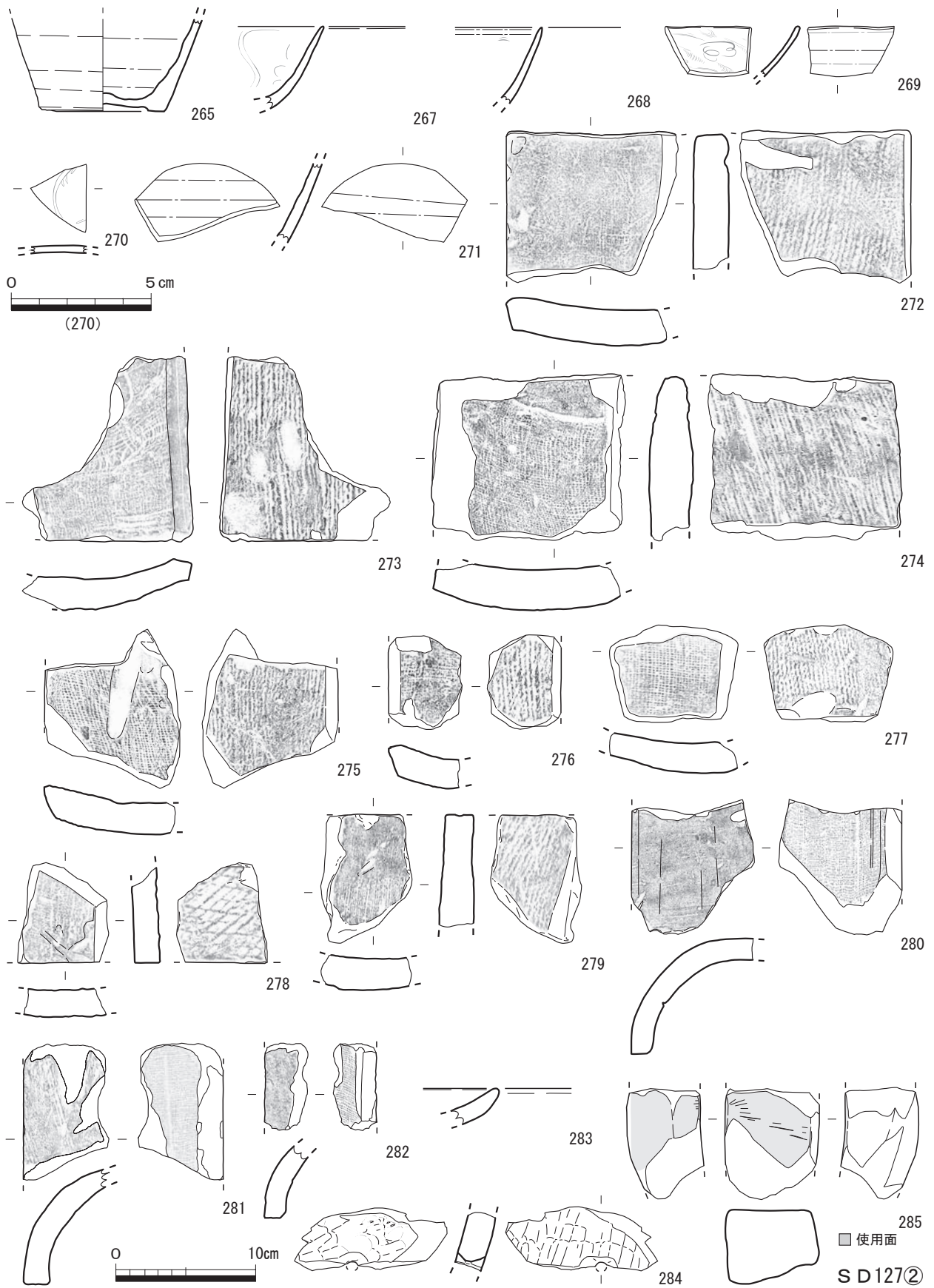
239 は須恵器甕の胴部片で、内面の一部にススが残る。240 は陶磁器の碗の細片である。外面は被熱しており判然としないが、文様らしきものが観察できる。

S D 127 出土遺物 (第 38・39 図、第 8 表、図版 27 ~ 29)

241 と 242 は土師器坏の底部片である。いずれもヘラ切り底で、242 は板状圧痕がみられる。243 ~ 247 は、土師器の皿や小皿である。いずれも図上で反転復元しており、摩耗して不明の 247 の他は糸切り底である。244 は板状圧痕が残るほか、外面にススが付着する。246 は焼け歪み、外面は摩耗する。248 は壺の口縁部片で、口縁端を細く整形する。249 ~ 251 は土鍋の口縁部片である。いずれも外面は被熱しており、口縁部に圧痕が残る。また、249 と 251 は外面にススが付着する。252 と 253 は把手の破片で、253 は扁平である。254 は須恵器蓋の口縁部片。255 は須恵器壺の底部片で、底面には工具によるナデ調整を施す。256 ~ 259 は須恵器甕の破片である。256 は口縁部で、波状文が施されており、内外面ともに灰を被る。257 と 258 は肩部の破片で、257 は叩きの上から突帯を貼り付ける。259 は胴部片である。260 は捏鉢の破片で、回転ナデにより比較的薄手に仕上げられている。261 と 262 は瓦器壺である。いずれも内外面にヘラミガキを施し、特に 262 は丁寧な調整と焼成で、



第38図 出土遺物実測図① (1/4)



第39図 出土遺物実測図⑫ (1/2、1/4)

内外面ともに光沢を帯びる。また、261は外面に黒斑がみられる。263と264は瓦器の捏鉢である。いずれも口縁部の破片で、外面を中心に摩耗が著しい。265は緑釉陶器の壺の底部で、削り出して上げ底状になっている。内外面共に施釉されるが、外面底部は露胎である。266は灰釉陶器の細片で、比較的硬質な須恵質の胎土である。267～270は貿易陶磁器で、267～269は碗の口縁部である。267は青白磁と呼べる薄い色の釉薬を施す龍泉窯系青磁碗で、内面に割花文がみられる。268も龍泉窯系青磁碗で、内面に櫛描文を施すが、被熱により器壁が荒れている。269は白磁碗で、口縁部は輪花状に整形され、内面に櫛描文を施す。270は白磁合子蓋の天井部である。細片だが、外面には陽刻による文様が残る。271は陶器の壺とみられる胴部片である。内外面共に褐釉を施す。褐釉壺と考えられるが、破片のため直径などの詳細は不明瞭である。272～279は平瓦である。272～274は基部の角部、275と276は側面部、277は中央部、278と279は小口部の破片である。凸面は276が縄目文叩き、278が斜格子文叩きを施すほかは、いずれも縄目文叩きをスリ消す。凹面には布目を有するが、273は綴じ痕、275は縄の痕跡があり、274と278、279は布目の一部をナデ消す。280～282は丸瓦である。凸面は280が調整をナデ消し、281と282は縄目文叩きをスリ消す。凹面には布目を有し、280は面取りする。283はナデ調整のミニチュア土器で、外面にススが付着する。被熱や金属滓の付着は認められないが、調整や法量、形状から、埴塙の可能性はある。284は滑石製石鍋の破片である。外面は縦方向に削った痕跡が残るが、内面は横方向に粗く削った痕跡が調整されずに残る。また、内外両方から穿孔されており、穴には鉄分が付着する。285は砂岩製の砥石で、2面に砥面があり、擦痕が残る。

SK 14 出土遺物 (第40図、第9表、図版29・30)

286は土師器の坏の底部片である。焼け歪みが著しく、底面は糸切りの未調整のまま残す。287と288は土師器の小皿である。いずれも糸切り底で、288は一部をナデ消す。共に焼け歪んでおり、底部が膨らむ。289と290は土鍋の口縁部である。いずれも圧痕がみられ、290は外面に黒斑が残る。291と292は瓦器埴である。いずれも内外面に、ヘラミガキを施す。291は焼成不良で焼け歪み、内外面に黒斑がみられる。293は、貿易陶磁器の側面部片である。内面には櫛描きによる飛雲文が施されており、オリーブ黄色の釉薬からも、龍泉窯系青磁碗と考えられる。

SK 235 出土遺物 (第40図、第9表、図版30)

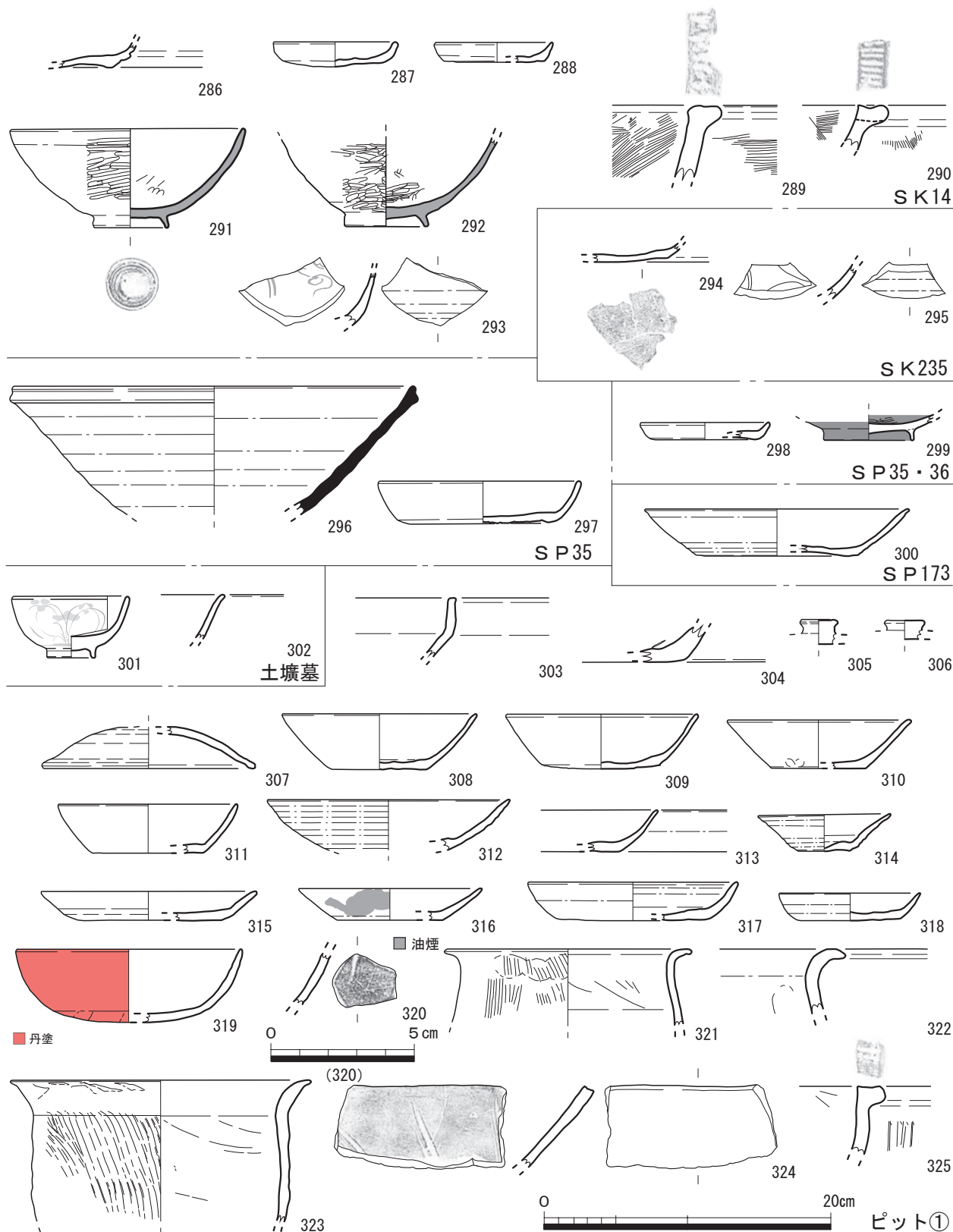
294は、土師器の坏の底部片である。糸切り底で、一部をナデ消す。295は貿易陶磁器の破片である。内面に蓮華文を施し、オリーブ黄色の釉薬から、龍泉窯系青磁碗と判断できる。

SP 35 出土遺物 (第40図、第9表、図版30)

296は須恵器の捏鉢で、玉縁状の口縁を有するが、片口とみられる歪みは見当たらない。297は土師器の坏で、糸切り底で板状圧痕が残る。また、内面には門歯痕がみられる。

SP 35・36 出土遺物 (第40図、第9表、図版30)

298と299は、SP 35とSP 36をまとめて検出した際に出土した遺物である。298は土師器の小皿で、底部はナデ消す。299は黒色土器B類の埴の底部片で、内面にヘラミガキを施す。



第40図 出土遺物実測図⑬ (1/2、1/4)

SP 173 出土遺物 (第40図、第9表、図版30)

出土したのは、300の土師器の皿のみである。底部は糸切り底でやや歪み、内面に門歯痕が残る

土墳墓出土遺物（第 40 図、第 9 表、図版 30）

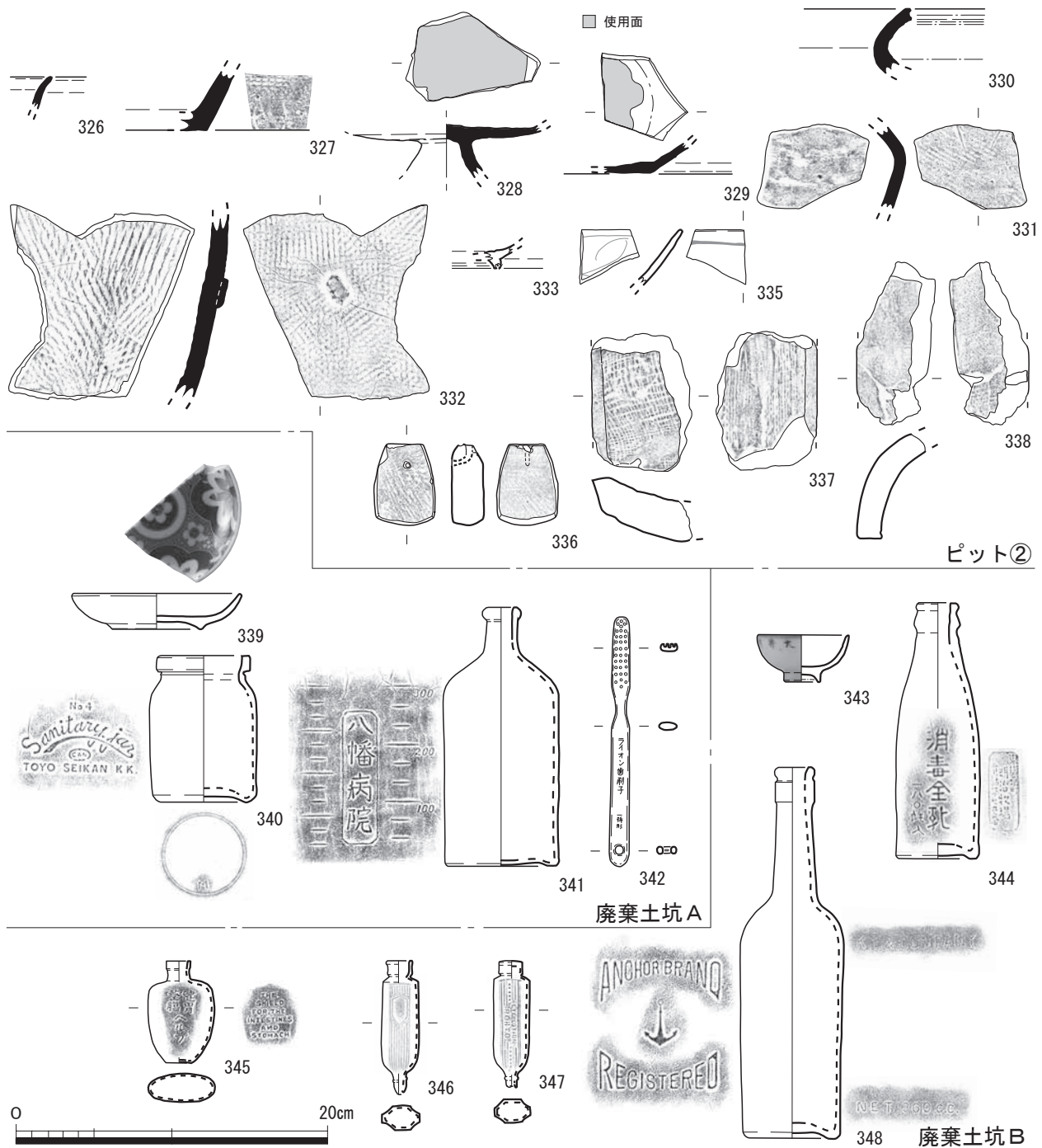
完掘したのは S T 6 のみで、出土遺物はいずれも細片ばかりだったため、図示できたのは 2 点のみである。301 は、S T 5 出土の染付碗である。完形品で外面は釉薬が垂れ、高台の一部は露胎である。302 は S T 9 出土の陶器碗の口縁部で、暗い緑釉を施す。

ピット出土遺物（第 40・41 図、第 9・10 表、図版 30～33）

303 と 304 は弥生土器である。303 は直立する口縁部の破片で、弥生時代後期前半にみられる高坏の口縁部片と考えられる。304 は甕の底部片で、内面にケズリの痕跡があるほか、外面の一部は黒変する。305～307 は土師器の坏蓋である。305 と 306 は摘みの破片である。307 は口縁部から頂部にかけての破片で、口縁部はわずかに段を有する。308～313 は土師器の坏である。312 は坏蓋 307 と同じ S P 97 から出土した。底部が欠損する 312 と摩耗する 313 以外は、いずれもへら切り底である。308 は板状圧痕が残り、310 はへら切り調整をナゲ消す。310 は外面に指頭の痕跡があり、黒斑がみられる。313 は内面に黒色の付着物が残る。314 は、土墳墓群そばの S P 30 から出土した土師器の小坏である。糸切り底で法量や器形が他の坏と異なる。胎土も比較的精良で、水引の痕が見られる。315～317 は土師器の皿である。315 と 316 はへら切り底で、317 は糸切り底である。316 は外面に油煙の痕がみられる。318 は、糸切り底を有する土師器の小皿である。319 は土師器の碗である。底部を手持ちへらケズリで調整し、外面に丹塗りを施す。320 は土師器皿 316 と同じ S P 191 から出土した、土師器の坏もしくは碗の細片である。外面に「*」状の刻書がみられる。321～323 は土師器の甕である。いずれも口縁部から胴部の破片で、322 は内外面にススが付着する。324 は土師器の播鉢の口縁部片である。内面に播目が残り、内外面は二次被熱で橙色を呈す。325 は、土師器皿 317 と同じ S P 452 から出土した、土鍋の口縁部片である。口縁部の平坦部にわずかに圧痕が残り、内外面ともに被熱する。326 は須恵器の坏の口縁部片で、327 は須恵器壺の口縁部片である。328 と 329 は転用硯である。328 は須恵器高坏、329 は須恵器皿を転用しており、いずれも内面に硯面が残る。330～332 は須恵器の甕である。330 は口縁部片で、自然釉を被る。331 と 332 は胴部片で 331 は摩耗が著しく、332 は外面に窯壁が付着する。333 と 334 は、緑釉陶器である。333 は碗の高台部分である。334 は S P 100 からの出土で、細片だが両面とも施釉される。335 は貿易陶磁器の口縁部片で、灰オリーブ黄色の釉薬に片彫の蓮華文を施す、龍泉窯系青磁碗である。336 は平瓦を転用した土製権である。布目叩きとへら切りが残り、L 字状の穿孔を施す。337 は、S F 445 に後出する S P 409 から出土した平瓦である。側面部片で、凸面は縄目文叩きをスリ消す。338 は、土師器甕 323 と同じ S P 383 出土の丸瓦である。

廃棄土坑 A 出土遺物（第 41 図、第 10 表、図版 33）

調査区北東部から東部に点在する近代の廃棄土坑とみられる遺構からは、多数の陶磁器やガラス瓶が出土した。そのため、掘削時にアルファベット順で記号（A～Q の 11 ヶ所、O は欠番）を付し、残存状況の良好な陶磁器や、形状や陽刻などで用途や商品名が明らかで、かつ完形で出土したガラス製品を取り上げた（注 1）。なお、同一の形状で複数個出土したガラス瓶は、状態の良い瓶を選別し



第41図 出土遺物実測図⑭ (1/2, 1/4)

ており、報告にあたってさらに厳選した。また、アルファベットを付した攪乱の内、攪乱Eは出土遺物無し、攪乱G・I・K～Qは陶磁器やガラスの細片、混入した中世以前の遺物のみの出土に留まるため、攪乱I出土の硬貨を除き、今回の報告では省略した。以下、主に久留米市内および福岡県内の出土例と比較しながら、簡単に補足する。

339は磁器の小皿である。口鏝を施し、内面にクロム釉で文様を印刷する。

340と341はガラス瓶である。340は胴部に陽刻で「Sanitary jar (衛生瓶)」「TOYO SEIKAN K.K. (東洋製罐株式会社)」とある。楕円に「CAN」と書かれた、大正6

年(1917)創業の東洋製罐の社章もある。具体的な内容物の表示は無いが、透明で広口であることから、食品の瓶詰の瓶と判断した。341は処方薬の瓶で、小判形の断面を有する。気泡を含む無色透明で、胴部に目盛りと「八幡醫院」の陽刻がある。処方薬の瓶は廃棄土坑Cでも出土したが、341はこれらに比べて目盛りの両端が尖っており、縦方向の線が無いなど、比較的簡略化されている。

342は骨角製の歯ブラシの柄である。植毛は失われているが、「ライオン歯刷子 一號形」と刻書がある。ライオン歯磨本舗(現・ライオン)が昭和2年(1927)に発売したライオン歯刷子で、一號形は六號形までである中で最も大形の成人男性用の歯ブラシである(注2)。なお、同社の歯ブラシは耐熱性から、大正6年以降骨製に統一したという記述が社史にあったため、骨角製品と判断した。

廃棄土坑B出土遺物(第42図、第10表、図版33)

343は色絵盃で、口縁部に桃色の釉とともに「鐵道開通記念 大井村」と書かれている。

344は牛乳瓶である。王冠栓の瓶に、「消毒全乳 一八〇珎(ミリリットル)入」「東櫛原町 明治牧場 電話一、〇七五番」と陽刻があり、昭和6年(1931)10月に創業した合資会社明治牛乳所(注3)の牛乳瓶と考えられる。法量や口縁部が類似し、「東櫛原町 消毒済」の陽刻がある牛乳瓶が京隈侍屋敷遺跡第20次調査で出土した(注4)。

345は、褐色透明に細い楕円形の断面を有する薬瓶である。胴部に陽刻があり、片面には「健胃整腸 ヘルプ」、反対側には「THE SHIELD FOR THE INTESTINES AND STOMACH(腸と胃のためのシールド)」とある。津村敬天堂(現・ツムラ)が明治40年(1907)に販売を始めた胃腸薬ヘルプの瓶である。なお、ヘルプの瓶は数種類あるが、出土遺物と同型品の瓶は、「AND」のNが鏡文字のIになっていることで特に知られている。346と347は目薬瓶である。いずれも青色透明の瓶で、点眼器が一体となった両口式点眼瓶である。両方とも、ラベルを添付するための盾形の陽刻が胴部にあり、信天堂山田安民薬房(現・ロート製薬)が昭和6年に販売を始めたロート目薬の目薬瓶である。346の基部は、ゴム球を付けるために空洞となっており、347は、盾形の陽刻に加え胴部に「EYE ROTION ROHTO(ロート目薬)」と、「S 13」の陽刻がある。ただし、346と異なり基部がガラスで覆われた一口タキ式点眼瓶で、市村慎太郎氏の分類のB b 2(中)類にあたる(注5)。物資不足から、ゴム球と点眼部の蓋が廃止された昭和10年代半ば以降の瓶で、出土した瓶も気泡を多く含み、胴部がくびれるなど粗い作りである。なお今回は割愛したが、346・347よりも若干小形で紺色透明の精良なガラスに、「EYE WATER ROHTO」の陽刻がある瓶が廃棄土坑Cから出土した。

348はソース瓶である。胴部に錨と「ANCHOR BRAND」「REGISTERED」(登録商標)、肩部に製造元の山城屋の略称である「K. Y. & COMPANY」と書かれた、イカリソースの瓶である。イカリソースの瓶は、久留米城下町遺跡第16次調査でも出土した(注6)が、瓶の法量や口縁部の形状、陽刻の英文や錨の形状が異なる。イカリソースは明治29年(1896)から販売が始まった(注7)が、348の錨のマークは、錨上部の鉤状の部分の先端に丸がついた昭和初期のマークである。なお図示していないが、廃棄土坑Hから同じ陽刻で180cc入りの小形品が出土している。

廃棄土坑C出土遺物（第42・43図、第10・11表、図版33～36）

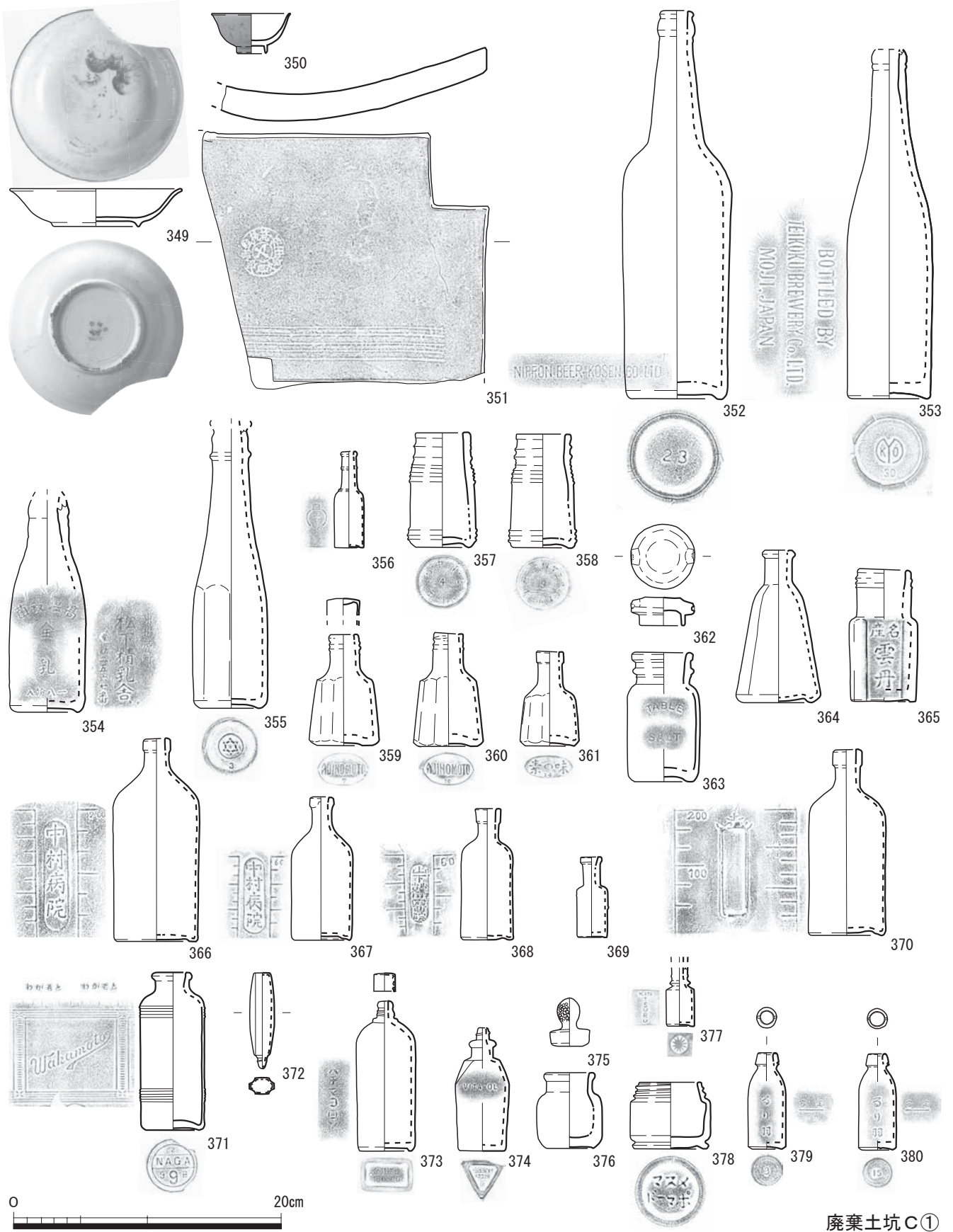
349は色絵の中皿で、高台内部に「(硬)質陶器 TOKUSE (I)」と蝶の文様が印刷された硬質陶器である。内面の釉薬が銀化しており、被熱を受けた可能性がある。350は染付の盃で、端反で外面に薄い呉須を施す。外面には桜花の陽刻・陰刻と共に、本居宣長の短歌「敷島の 大和心を 人とはば 朝日に匂ふ 山桜花」の一節が書かれている。兵役を満期除隊した記念に、知人や隣家などに配られていた退役記念盃で、1930年代以降のものである(注8)。

351は平瓦である。凸面に「ヤ 筑後城島・渋田安次郎製」と印刻がある。渋田瓦工場は城島町で大正2年(1913)に創業しており、現在も同地で操業している(注9)。なお図示していないが、同じ「筑後城…渋田安…」の陰刻で中央の「ヤ」が「徳」になっている平瓦片を表採した。

352は褐色透明のビール瓶である。底部近くに「NIPPON BEER KOSEN CO. LTD」と書かれており、大正10年(1921)に設立され、昭和8年(1933)に大日本麦酒(現・アサヒビール、サッポロビール)に吸収合併された日本麦酒釀泉のビール瓶である(注10)。同社のガラス瓶は、サイダー瓶とみられる無色透明の瓶が櫛原侍屋敷第3次調査で出土した(注11)。なお、今回の出土遺物は底部に「23」とあるが、「2:3」と陽刻がある瓶が上本町遺跡(田川市)で出土している(注12)。353は黄緑色透明の飲料瓶で、胴部に「BOTTLED BY TEIKOKU BEER, MOJI, JAPAN(帝国麦酒製造、門司、日本)」と陽刻がある。大正2年に門司市(現・北九州市門司区)で設立され、昭和5年(1930)に桜麦酒に改名(後に大日本麦酒に吸収合併)(注13)した帝国麦酒の瓶である。色調が黄緑色透明であることから、ビール以外の飲料、特に同社が販売していた炭酸飲料ミヨシノレモンの瓶と考えられる。

354は牛乳瓶で、不鮮明だが「高温殺菌 全乳 一.八昫(デシリットル)入」「東櫛原町 松下精乳舎 電話二五六七番」と陽刻がある。元久留米藩士の松下為敬が、大正時代に篠山町で創業した松下精乳舎(後に久留米ミルクプラント)の牛乳瓶である(注14)。

355～361は調味料の瓶である。355は製造者や商品の名称が見当たらないが、底部に丸に六芒星の陽刻がある。丸に六芒星の商標は、大正6年に愛知トマトソース製造合資会社(現・カゴメ)が登録出願した商標(注15)で、瓶の形状も後述する396に類似する。これらの特徴から、大正14年(1925)に同社が発売したトマトソースの瓶と想定できる。356は小瓶で、縦書きで「白玉ソース」の陽刻がある。白玉ソースは、明治31年(1898)に野村洋食料品製造所(後に野村専次商店)が販売を始めた(注16)ソースで、松崎城跡(福岡県小郡市)で高さ約20cmの瓶が出土している(注17)。357と358は、いずれも底部に「東京中野・食品工業株式会社」とある。松崎城跡でも同形品が出土しており、大正8年(1919)に設立された食品工業(現・キューピー)が大正15年(1925)に製造を始めた、キューピーマヨネーズの瓶である。この瓶は今回の調査で10点以上出土した。358は紙製の芯に鉄製の栓が残存していた。359～361は10点以上出土した、味の素の瓶である。底部の陽刻がローマ字の「AJI NOMOTO」でネジ式の栓の瓶(359・360)と、日本語の「味の素」でコルク栓の比較的小形の瓶(361)で大別される。前者は松崎城跡や中原田遺跡で、後者は久富市ノ玉遺跡(注18)で



第42図 出土遺物実測図⑮ (1/4)

も出土している。359は栓が残存していたが、360はネジの形状が359と異なり、松崎城跡で出土した瓶に類似する。底部も360の方が359よりも若干厚い。361は口縁部に銀紙が付着している。こうした小形のガラス瓶は、大正時代から昭和初期に味の素の缶や瓶の種類を、値段とともに整理した際に導入され、昭和15年（1940）に物資不足で一時廃止されたのち、昭和26年（1951）まで製造されたという（注19）。

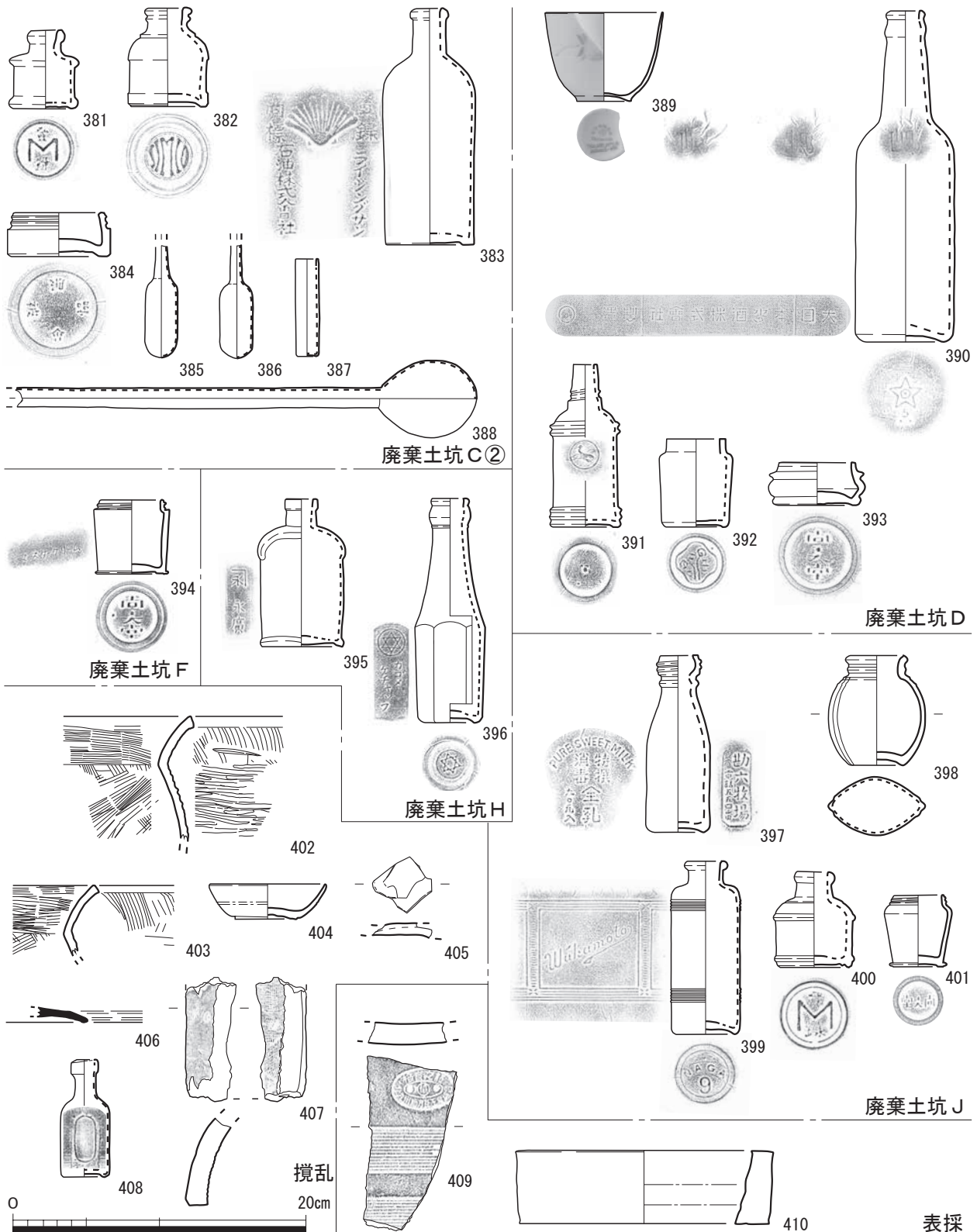
363は、蓋362が伴い、「TABLE SALT（食卓塩）」の陽刻を有する瓶である。類似品が有田遺跡（福岡市早良区）で防空壕から出土しており（注20）、ガラスの色調も類似する。しかし、遺物実測図を比較すると、法量は有田遺跡出土品の方が一回り大きいほか、器壁は363の方が厚い。

364と365は食品用の瓶である。364は、八面体の青緑色透明のガラス瓶である。昭和2年創業のカメセ水産営業所（現・カメセ水産）のふりかけ式青海苔の瓶に類似しており、同様の食品瓶と判断した。365は「名産 雲丹」と書かれたウニの瓶である。同形品が直方市中原田遺跡で出土した（注21）ほか、久留米市内でも類似する形状で器高が高い瓶が日詰遺跡（注22）で出土した。

366～370は処方薬の瓶である。いずれも口部が小さく、369以外は目盛を有する。断面は、366と367が小判形、その他は円形である。いずれも気泡を多く含み、表面の凹凸が目立つ。367はガラスが垂れており、368は上げ底の底部が膨らむなど、特に粗い作りである。366と367は「中村病院」、368は「山下 内科小児科醫院」と陽刻があるほか、370はラベルを貼りつけるための浮彫がある。

371と372は市販薬の瓶で、陽刻で頸部に「わかもと」、胴部に筆記体で「Wakamoto」底部には「2 NAGA 998」と陽刻がある。昭和4年（1929）に「若素」の名称で販売が始まり、昭和6年に栄養と育児の会（現・わかもと製薬）が販売を始めた整腸剤わかもとの瓶で、昭和10年代の瓶である。372は無色透明で、口縁部が346や347と同様の点眼器を兼ねた形状を呈す。陽刻は皆無だが、347と同様の一口タタキ式点眼瓶と考えられる。

373～378は化粧瓶である。373は緑色透明の角型の瓶で、側面に縦書きで「ヘチマコロン」と陽刻されている。大正4年（1915）に天野源七商店（現・ヘチマコロン）が販売を始めた、ヘチマコロンの瓶である。今回出土した瓶は、底部に「登録商標 180300」の陽刻がある昭和9年（1934）以降の瓶で、ネジ式の栓に樹脂製の蓋が残る。なお、昭和9年以前のコルク栓の瓶が久留米城下町遺跡第17次調査で出土している（注23）。374は断面が三角形を呈し、胴部に「VITA-OL」と陽刻がある。大正8年に松浦啓結が創業した松浦商店（現・松浦）が販売した、液体ポマードビタオールの瓶である。底部に「意匠登録 42328」とあるが、同じ番号で「三角瓶」の意匠登録が昭和4年3月20日に松浦啓結によって出願され、6月21日付で登録されている。以降、同じ番号で昭和6年3月18日と4月30日に三角瓶、昭和7年（1932）9月30日に「三角「ポマード」容器ノ形状」が類似意匠として追加登録されている（注24）。375と376は一对の白色の化粧瓶で、蓋には花柄の陽刻を施す。377は無色透明で正方形の断面の瓶で、底部に星状の模様、胴部に「KIN TSURU」と陽刻されている。大崎組商会在明治20年代に販売を始め、昭和2年に金鶴香水（現・マンダム）に継承された金鶴香水の瓶である（注25）。378は白色の瓶で、底部に右書きで「メヌマポマード」と



第43図 出土遺物実測図⑩ (1/4)

陽刻がある。大正6年に井田京栄堂が販売を始めた、メヌマポマードの瓶である。メヌマポマードの瓶は、白色ガラスで底部に陽刻を有する瓶が鉄砲小路遺跡第2次調査(注26)でも出土したが、今回出土した瓶と比べ法量が小さく、外面胴部に文様を施している

379 と 380 は、無色透明の白髪染の瓶である。口縁部は、留め具をはめるための刻み目が 2ヶ所あるコルク栓で、胴部には「定量」と横線、「るり羽」の陽刻がある。明治 44 年に石井成功堂（現・ヘンケルジャパン）が発売した（注 27）、白髪染るり羽の瓶である。同形の瓶は、日詰遺跡や白川遺跡（未報告）など市内でも出土例があるほか、中原田遺跡でも同型品が出土した。るり羽の瓶は、「る」の字体で数種類に分類できることが指摘されているが、今回の出土遺物は日詰遺跡の出土遺物と同じ字体である。379 と 380 の違いは底部の番号で、前者は「3」、後者は「15」と陽刻されている。

381 と 382 はインク瓶である。381 は、不鮮明だが底部に「登録 M」と陽刻があり、大正 6 年に丸善インキ（現・丸善雄松堂）が販売を始めた丸善アテナインキの瓶とみられる。同形品が松崎城跡で出土した。382 は底部に「S I M C O」とあり、明治 17 年（1884）に篠崎又兵衛商店として創業した篠崎インキ製造が販売していた、ライトインキやチャンピオンインキの瓶とみられる。

383 は無色透明で、断面が歪み不整円形を呈する瓶である。器壁は凹凸が著しいが、胴部に陽刻で「ライジングサン石油株式会社」と書かれており、明治 33 年（1900）に設立されたライジングサン石油（後にシェル石油、現・出光昭和シェル）の瓶であることが分かる。同社が登録商標としていた貝印（シェルマーク）も、陽刻で表現されている。同社の久留米販売部は、明治 44 年（1911）時点で國武町（現・荘島町）にあった（注 28）。ライジングサン石油は昭和 5 年から機械油の販売を積極的に始めたということから、出土したガラス瓶は揮発油や機械油といった鉱油の瓶と考えられる。

384 は薄緑色透明の広口で底の浅い瓶で、底部に「被服協會」とある。被服協會は、洋装の普及を通して軍服の調達に必要な資源や技術の振興を図る目的で、昭和 4 年に陸軍省経理局が設置した組織である。昭和 17 年（1942）まで発行された協会誌『被服』には、軍服を納品していた織物業者に加えて、革靴など皮革製品の製造業者の広告が掲載されていたという（注 29）ことから、出土した瓶は靴墨などの用途が想定でき、靴墨用のクリーム瓶と判断した。

385 ～ 388 は、用途がはっきりしない製品を図示した。385 と 386 は青色透明で、円形の断面を有する。厚さは 1mm で折損する口縁部の厚さは 1mm に満たない。アンプル瓶に類似するが、折損部がアンプル瓶と異なることから、不明製品とした。387 は無色透明の円筒型の製品で、こちらも具体的な用途は不明である。388 も無色透明で、細長い管の先端に球状のガラス玉が付く。平面形はゴム風船型に類似する（注 30）が、楕円形の断面のゴム風船型と異なり、円形の断面を有する。フラスコ状の形から実験器具と想定できるが、比較的薄手で根拠に乏しい。

廃棄土坑 D 出土遺物（第 43 図、第 11 表、図版 36）

389 は色絵の湯呑である。底部に「東洋陶器會社」（現・TOTO）の社名と、大正 6 年から大正 10 年まで使われた商標が印刷されている。390 は薄緑色透明の飲料瓶である。底部付近の胴部に「大日本麥酒株式會社製造」、肩部に大日本麥酒のイニシャル D・B・K を合成した商標が陽刻されており、明治 39 年（1906）に創業した（注 31）、大日本麥酒の瓶であることが明白である。ビール瓶に比べて小さいことから、353 と同様にビール以外の飲料瓶、特に明治 42 年（1909）から販売を始めたシトロン（大正 4 年にリボンシトロンに改名）、または明治 44 年（1911）に販売を始めたリボンナボ

リンの瓶とみられる(注32)。なお、法量や色調が類似する瓶は、十間屋敷遺跡第10次調査でも出土している(注33)。391～393は化粧瓶である。391は、無色透明の瓶である。コルク栓で、瓶の中にコルクが入ったまま出土した。胴部には、金鶴香水の商標である「丸に鶴」(注34)が陽刻で描かれており、同社の製品とみられる。392も無色透明の瓶で、外部底面に資生堂が大正4年(1915)に使用を始めた(注35)花椿文が陽刻されている。久留米では、昭和11年に資生堂久留米配給所合資会社が細工町で創業している(注36)。393は扁平な外形に白色の瓶で、肩部が鐳状に張り出す。外面底部に縦書きで「尚美堂」とあり、映画監督だった小口忠と婦人活動家小口みち子の夫妻が大正11年頃に創業し、昭和17年頃まで存続したマスター尚美堂の化粧瓶であることが分かる。同型の化粧瓶は松崎城跡でも出土したが、松崎城跡出土品の内面底部が平坦なのに対し、今回出土した瓶は極端に膨らみ、上げ底状を呈する。

廃棄土坑F出土遺物(第43図、第11表、図版36)

394の化粧瓶のみ図示した。白色で、底部が鐳状に広がる。胴部に「マスタークリーム」、底部に393と同様縦書きで「尚美堂」と陽刻がある。昭和初期にマスター尚美堂が販売していた(注37)、マスターコールドクリームまたはマスターバニシングクリームの瓶と考えられる。

廃棄土坑H出土遺物(第43図、第11表、図版36)

395は、無色透明で長方形の断面を有する瓶である。側面に角に廣の商標と「永廣」の文字が陽刻されている。形状が化粧水や整髪剤の瓶に類似することから、化粧用の瓶と判断した。396は、無色透明で王冠栓の瓶である。355に類似する八角形の胴部に「カゴメケチャップ」と陽刻があり、胴部と底部に355と同じ「丸に籠目」の陽刻を施す。明治41年(1908)に愛知トマト製造(後に愛知トマトソース製造合資会社、現・カゴメ)が製造を始めた(注38)、カゴメケチャップの瓶である。同形品は、鉄砲小路遺跡や松崎城跡でも出土している。

廃棄土坑J出土遺物(第43図、第11表、図版36・37)

397は牛乳瓶で、344や354に対して多数の陽刻が書かれている。全て示すと、「PURE SWEET MILK 特撰消毒 全乳 90瓦(グラム)入」「勘六牧場 電話五五四番」とある。344と354が王冠栓なのに対して、397はネジ式の栓で法量も小型である。398は、瓶詰に用いられたとみられる瓶である。青緑色透明で、断面が円形の口縁部と底部に対し、胴部はレモン形の断面という複雑な形状だが、上げ底が著しく気泡を多く含む。商品名や商標などの陽刻は無いが、340と同様に広口で佃煮瓶などに類似する形状から、瓶詰に用いられたと判断した。399は、371と同型のわかもとの瓶である。371との違いは、頸部の「わかもと」の陽刻が無い点と、底部の陽刻が「6NAG A9」のみという点である。同様の陽刻を施した瓶は、中原田遺跡でも出土している。400はインク瓶で、無色透明で器壁に凹凸が生じ、口縁部が歪むなど粗い作りである。法量は異なるが、381と同じ「登録 M」の陽刻が底部にあることから、丸善アテナインキの瓶と考えられる。この瓶も、同形品が日詰遺跡や松崎城跡で出土したほか、法量が近似する瓶が鉄砲小路遺跡や上本町遺跡で出土している。401は白色の化粧瓶で、肩部が張り、394と同様に底部の端が鐳状に広がる。底部の陽

刻も 393 や 394 と同じ「尚美堂」だが、縦書きではなく横書きである。この瓶と形状や法量が類似し、底部に「MASTER」の陽刻を有する瓶が鉄砲小路遺跡で出土した。

攪乱出土遺物（第 43 図、第 11 表、図版 37）

ここでは、その他の攪乱からの出土遺物を、器種ごとに報告する。402 と 403 は弥生土器の甕の口縁部片である。402 は口縁部外面に縦方向のハケ目、胴部外面にタタキを施し、胴部内面に横方向のハケ目を施す。また、外面には黒斑がある。403 も 402 と同様の調整を施し、胎土や色調も類似するが、若干薄手で外面に回転ナデを施す。404 は土師器の小坏である。底部は糸切りで、焼け歪み上げ底状を呈する。405 は、糸切り底の土師器の底部である。底部の接合痕が明瞭に観察でき、接合面にも底部と同じ糸切り痕が見える。同様の接合痕を有する土師器は、日渡遺跡第 6 次調査でも出土した（注 39）。406 は、須恵器の坏蓋の口縁部である。端部はかえりや折り曲げなどの調整が無く、平坦に調整されている。407 は、丸瓦の角部片である。凸面は縄目文叩きをスリ消すほか、側面はヘラ切り後に粘土が付着する。408 は、無色透明ガラスの薬瓶である。気泡を含み器壁は凹凸で、口縁部は歪むなど、粗い作りである。胴部には、目盛りとラベルを添付するための小判型の陽刻がある。

表面採集遺物（第 43 図、第 11 表、図版 37）

調査対象地では、古代の土師器や須恵器、古瓦、近世の陶磁器や窯道具、近代の瓦、黒曜石の剥片などを表面採集した。このうち、印刻を有する瓦と窯道具のみ図示した。

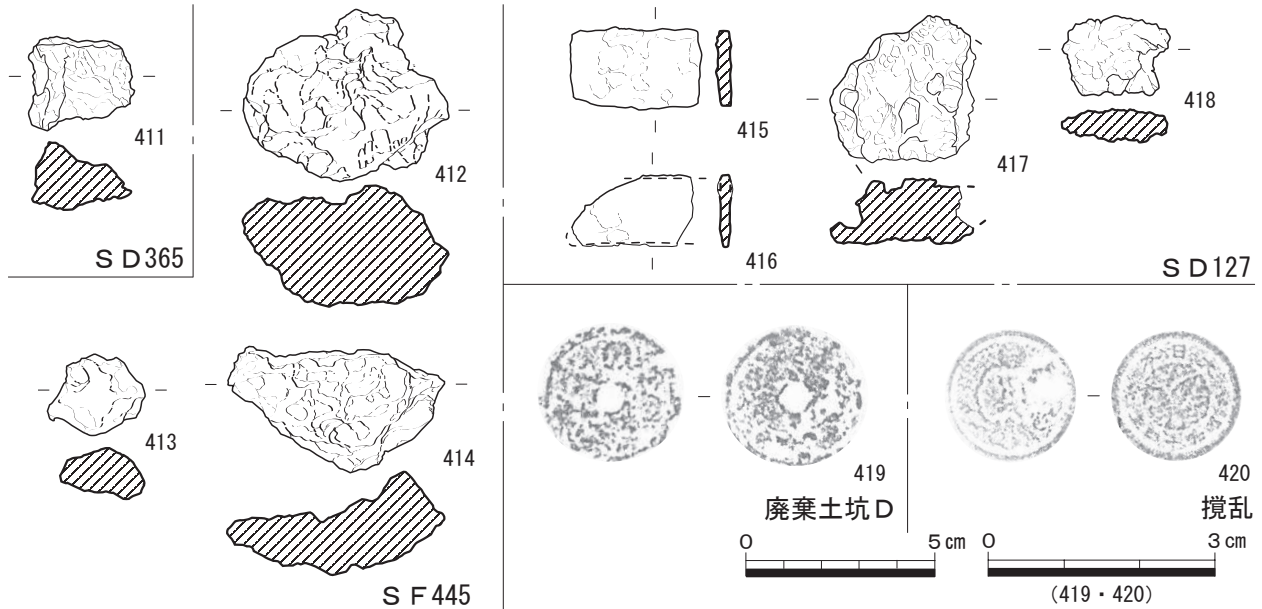
409 は近代の平瓦の破片で、凸面に「協 検査之証 北九州地方瓦工業組合」の印刻がみられる。昭和 14 年（1939）8 月の「物価統制実施要項」以降、物価統制などを目的に各地で設立された組合の一つと想定できる。類似する楕円形の陰刻で、「糟屋郡瓦協同組合」や「福岡地方工業組合」とある平瓦が福岡城跡（福岡市中央区）で出土した（注 40）。410 は窯道具で、底部と口縁部の平坦部に溶着痕が残る環状置台である。本調査地点周辺の近世の窯跡は、陶器を焼いた野中町の東野亭焼窯跡（注 41）や、陶磁器を焼いた朝妻焼古窯跡（注 42）が挙げられるが、いずれの窯跡で出土した置台と形状や色調が大きく異なる。明治 32 年（1899）頃から昭和 50 年（1975）まで調査地点近くで作業していた、十三部焼窯との関連が示唆される。

出土金属製品（第 44 図、第 11 表、図版 38）

411 は S D 365 出土の鉄滓、412 ～ 414 は S F 445 出土の鉄滓である。412 は黒褐色土、413 は波板状凹凸面、414 はピット P 6 から出土した。いずれも、鉄錆に覆われている。415 ～ 418 は、S D 127 から出土した鉄製品である。415 は平面形、断面ともに長方形の鉄片で、鉄錆に覆われているため刃部の有無などは不明である。416 も鉄片だが、断面は楔形を呈し、平面形からも鎌の刃先などの可能性がある。417 と 418 は鉄滓である。417 は気泡の痕がみられ、折損面は灰色を呈する。418 は鉄錆に覆われているが、断面が比較的平坦であることから、鉄片の可能性はある。

419 は、廃棄土坑 D から出土した銭貨である。表裏共に厚い緑青に覆われるが、かろうじて菊花文と X 字状の圏線、穴の両側に「五」「銭」の文字が観察できた。これらの文様と法量、穿孔を有する点から、昭和 13 年（1938）から昭和 15 年に製造された、5 銭アルミ青銅貨とみられる。420 は攪乱

から出土した、昭和14年（1939）製のガラス1銭アルミ貨である。昭和14年に製造された1銭アルミ貨は、「四」の字が「JL」状のものと、少数の「ル」状のものがあることが知られている（注43）。今回出土したのは、多数を占める前者である。



第44図 出土遺物実測図⑩（等倍、1/2）

【注】

- (1) 以下、近代の陶磁器やガラス瓶については、注に示した文献に加え、下記の文献と各社のホームページを参考にした。また特記ない限り、掲載した会社はいずれも株式会社である。
 山本耕造『びんの話』 社団法人日本能率協会 平成2年
 小林謙一・渡辺貴子「物質文化研究としての近現代考古学の課題 一大橋遺跡出土の近現代ガラス製品の検討から」
 東京考古談話会『東京考古』20 平成14年
 桜井隼也『ガラス瓶の考古学』 六一書房 平成18年
 平成ボトル倶楽部・監修『日本のレトロびん 明治初期から平成までのレアコレクション』 グラフィック社 平成29年
- (2) ライオン株式会社社史編纂委員会『ライオン100年史』 ライオン 平成4年
 ライオン株式会社社史編纂委員会『ライオン120年史』 ライオン 平成26年
- (3) 権藤猛『久留米商工史』 久留米商工会議所 昭和49年
 久留米市産業課『久留米市産業要覧 昭和十二年度版』 昭和12年
- (4) 久留米市教育委員会『京隈侍屋敷遺跡 一第20・22次調査一』久留米市文化財調査報告書第323集 平成25年
- (5) 市村慎太郎「池島・福万寺遺跡出土近現代遺跡ガラス容器」（財）大阪府文化財センター『大阪文化財研究』第24号 平成15年
- (6) 久留米市教育委員会『久留米城下町遺跡 第16次調査（魚屋町）』久留米市文化財調査報告書第204集 平成14年
- (7) ブルドッグソース株式会社社史編集委員会『ブルドッグソース55年史』 ブルドッグソース 昭和56年
- (8) 西野寿勝「賜杯考（前編） 一軍杯の考古学一」（財）大阪府文化財センター『大阪文化財研究』第32号 平成19年
- (9) 久留米市商工観光労働部商工政策課『久留米輝くものづくり企業事例集』久留米市 平成31年
- (10) サッポロビール株式会社広報部社史編纂室・編『サッポロビール120年史』 サッポロビール 平成8年
- (11) 小澤太郎「コラム ガラス瓶から久留米の近代を探る」久留米市文化財保護課『久留米市文化財保護課年報』Vol. 4 平成20年
- (12) 田川市教育委員会『上本町遺跡 一1・3・4次一』田川市文化財調査報告書第17集 平成31年
- (13) 注10文献と同じ。
- (14) 久留米ミルクプラント『50年のあゆみ』 昭和59年
- (15) カゴメ社会対応室100年企画グループ・編『カゴメ100年史』 カゴメ 平成11年
- (16) 注7文献と同じ。
- (17) 福岡県教育委員会『松崎城跡』福岡県文化財調査報告書第135集 平成10年
- (18) 福岡県教育委員会『久富市ノ玉遺跡』福岡県文化財調査報告書第108集 平成5年
- (19) 味の素『味をたがやす 一味の素の八十年史一』 平成2年

味の素『味の素グループの百年』平成21年

- (20) 福岡市教育委員会『有田・小田部 第10集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集 平成元年
- (21) 直方市教育委員会『直方市内遺跡群Ⅰ』直方市文化財調査報告書第21集 平成12年
- (22) 福岡県教育委員会『日誌遺跡Ⅱ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第22集 平成17年
- (23) 久留米市教育委員会『久留米城下町遺跡 一第17次調査一』久留米市文化財調査報告書第262集 平成20年
- (24) 意匠登録の情報については、独立行政法人工業所有権・情報館ホームページ内「特許情報プラットフォーム 意匠検索」(<https://www.j-platpat.inpit.go.jp/d0100>)に拠った。
- (25) マンダム『マンダム五十年史』昭和53年
- (26) 久留米市教育委員会『鉄砲小路遺跡 一第2次調査一』久留米市文化財調査報告書第273集 平成20年
- (27) 注5文献と同じ。
- (28) 大森柳川三郎『大演習記念 南筑案内記』蟠竜堂 明治44年

なお、國武町は國武特許緋工場（現・荘島町、西鉄バス久留米営業所付近）に因み、明治末期から大正年間にのみ用いられた通称のようである。上記の文献の外には、下記の地図にのみ記述がみられた。この地図については、当課の水原道範の教示によった。

圖書撰奨會『福岡県筑後國 久留米市地図』地図報知第二十二號 大正7年

- (29) 井内智子「研究ノート 昭和初期における被服協会の活動 一カーキ色被服普及の試みと挫折一」社会経済史学会『社会経済史学』第76巻第1号 平成22年
- (30) 前山由美子「巢鴨遺跡出土のガラス製品「ゴム風船型」について」物質文化研究会『物質文化』78 平成17年
- (31) 濱田徳太郎・編『大日本麦酒株式会社三十年史』大日本麦酒 昭和11年
- (32) 森伸一「日本のビール会社と清涼飲料水事業」サカツコーポレーション・編『明治・大正・昭和 お酒の広告グラフィティ 一サカツ・コレクションの世界』国書刊行会 平成18年
- (33) 久留米市教育委員会『十間屋敷遺跡 一第10次発掘調査一』久留米市文化財調査報告書第415集 令和2年
- (34) 注25文献と同じ。
- (35) 資生堂『資生堂百年史』昭和47年
- (36) 権藤猛『久留米商工史』久留米商工会議所 昭和49年
- (37) 天野祐吉『嘘八百これでもか!!!! 一昭和戦前編一』文春文庫ビジュアル版 文藝春秋 平成6年
- (38) 注15文献と同じ。
- (39) 久留米市教育委員会『日渡遺跡 一第6次調査一』久留米市文化財調査報告書第276集 平成20年
- (40) 福岡市教育委員会『福岡城跡 一第23次調査報告一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集 平成7年
米倉秀紀「福岡市域における戦争関連以降と出土遺物 ～福岡城出土遺物、特に認識票について～」福岡市博物館『福岡市博物館研究紀要』第30号 令和3年
- (41) 久留米市教育委員会『東野亭焼窯跡』久留米市文化財調査報告書第404集 平成31年
- (42) 久留米市史編さん委員会『資料編 考古』久留米市史第十二巻 久留米市 平成9年
久留米市教育委員会『平成27年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第368集 平成28年
- (43) 中村佐伝治『日本のコイン』カラーブックス222 保育社 昭和46年

第2表 出土遺物観察表①

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 材	重 量・備 考	登 録 番 号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面 (凹面)	内面 (凸面)	外面 (凹面)	内面 (凸面)	底面・高台 (側面)			
1 第28図	S I 20	弥生土器	甕	14.4	5.6~6.0	16.3~16.7	にぶい黄橙色~浅黄褐色	にぶい黄褐色~浅黄褐色	工具ナデナデ消し	ナデナデ消し	工具ナデナデ消し	精良。砂粒を含む	内外面に黒斑	202002000024
2 第28図	S I 20	弥生土器	甕	—	5.9	(5.7)	浅黄褐色~褐色	浅黄褐色	ナデ消し	縦ナデ指オサエ	ナデ消し	砂粒、細砂粒、雲母を含む	内外面に黒斑あり。	202002000029
3 第28図	S I 20	弥生土器	甕	—	5.3	(4.7)	浅黄褐色		工具ナデナデ消し	工具ナデ指オサエ	ナデ消し	精良。砂粒、雲母を含む		202002000040
4 第28図	S I 20	弥生土器	甕	—	5.4	(5.7)	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ目ナデ消し	工具ナデ指オサエ	ナデ焼成後穿孔	精良。砂粒を含む	外面摩耗、剥離著しい	202002000039
5 第28図	S I 20	弥生土器	甕	[27.5]	—	(18.0)	淡黄褐色~明黄褐色	浅黄色	横ナデナデ消し	横ナデナデ消し	—	砂粒、細砂粒を含む	胴部径:[28.2] cm	202002000036
6 第28図	S I 20	弥生土器	甕	[24.2]	—	(9.3)	浅黄褐色		横ナデナデ消し	横ナデナデ消し	—	微砂粒、細砂粒、雲母を含む		202002000028
7 第28図	S I 20	弥生土器	甕	[24.0]	—	(10.2)	浅黄褐色		ハケ目横ナデ	ハケ目	—	精良。微砂粒、細砂粒、雲母を含む	口縁部に黒斑あり。	202002000027
8 第28図	S I 20	弥生土器	甕	[27.2]	—	(7.6)	黄褐色	浅黄色~黄褐色	ハケ目横ナデ	横ナデナデ消し	—	微砂粒、細砂粒、雲母を含む		202002000037
9 第28図	S I 20	弥生土器	大甕	[41.8]	—	(47.2)	浅黄褐色~褐灰色	にぶい黄褐色~明黄褐色	ハケ目貼付突帯	横ナデハケ目	—	砂粒を含む	胴部径:[57.0] cm	202002000034
10 第29図	S I 20	弥生土器	大甕	40.6~41.0	—	(23.8)	浅黄褐色~褐灰色	にぶい黄褐色	ハケ目貼付突帯	ケズリナデ消し	—	砂粒、雲母を含む	外面胴部に黒斑あり。内面口縁部の一部赤変	202002000033
11 第29図	S I 20	弥生土器	大甕	—	8.3~9.6	(24.2)	にぶい黄褐色~褐灰色	にぶい黄褐色~褐灰色	ハケ目、ケズリ、叩き目	ハケ目一部ナデ	叩き目	砂粒、雲母を含む	内外面に黒斑あり。外面胴部の一部赤変	202002000035
12 第29図	S I 20	弥生土器	壺	—	[3.4]	(14.0)	浅黄褐色~明赤褐色	にぶい黄褐色	ナデ消し	ナデ指オサエ	ナデ	細砂粒、雲母を含む	胴部径:[15.8] cm 内外面にスス	202002000025
13 第29図	S I 20	弥生土器	鉢	8.6	2.0	5.0	にぶい黄褐色~浅黄褐色	にぶい黄褐色	指オサエ	指オサエ	指オサエ	精良。砂粒、雲母を多く含む	手づくね	202002000042
14 第29図	S I 20	弥生土器	鉢	[12.0]	—	(5.2)	にぶい黄褐色	灰黄褐色	縦ナデナデ消し	縦ナデナデ消し	—	微砂粒、細砂粒を含む	内外面にスス	202002000031
15 第29図	S I 20	弥生土器	鉢	[20.2]	—	(8.2)	淡黄褐色~黄褐色		ナデ摩耗	ナデ摩耗	—	砂粒、雲母を含む		202002000038

第3表 出土遺物観察表②

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 石 材	重 量・備 考	登 録 番 号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面 (凹面、釉薬)	内面 (凸面、胎土)	外面 (凹面)	内面 (凸面)	底面・高台 (側面)			
16 第29図	S I 20	弥生土器	壺	[20.8]	—	(10.0)	明赤褐色	赤色～橙色	ハケ目 貼付突帯	ハケ目 指オサエ	—	ほぼ精良。砂粒、雲母を含む	202002 000026	
17 第29図	S I 20	弥生土器	器台	—	[14.7]	(10.1)	橙色～浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ 摩耗	摩耗	—	砂粒、細砂粒を含む	202002 000041	
18 第29図	S I 20	弥生土器	高坏	—	—	(15.2)	浅黄褐色	橙色	ハケ目 ナデ	絞り ナデ	絞り 工具ナデ	精良。微砂粒、細砂粒、雲母を含む	202002 000030	
19 第29図	S I 20 床面	弥生土器	鉢	17.2	5.8	8.6	浅黄色～黒色	にぶい褐色～浅黄褐色	ハケ目、ケズリ、オサエ	ハケ目 オサエ	ケズリ	砂粒を含む	内外面に黒斑、スス内面にコゲ付着	202002 000045
20 第29図	S I 20 床面	弥生土器	小鉢	10.0	4.3	5.9	にぶい褐色	にぶい褐色～にぶい黄褐色	ナデ	ハケ目	ナデ	微砂粒、雲母を含む	内面にスス焼成時にヒビ入る	202002 000046
21 第29図	S I 20 ピット	弥生土器	甕	[20.7]	9.1	21.2	橙色	橙色～褐灰色	ハケ目 横ナデ	ハケ目 ナデ	ハケ目	精良。細砂粒、雲母を含む	胴部径：[21.5] cm 内外面に黒斑	202002 000048
22 第29図	S I 20 ピット	弥生土器	短頸壺	12.8～13.3	6.2～6.6	19.0～20.3	にぶい黄褐色～黒褐色	にぶい褐色～黒褐色	ハケ目 横ナデ	ハケ目 横ナデ	ハケ目	精良。細砂粒、雲母を含む	胴部径：20.2cm 内外面に黒斑・スス	202002 000049
23 第30図	S A 252	土師器	坏	—	—	3.3	橙色～にぶい褐色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。雲母を含む	202002 000383	
24 第30図	S A 252	土師器	埴	—	[9.8]	(2.5)	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 接合ナデ	精良。雲母、赤色粒子を含む	202002 000263	
25 第30図	S A 252	土師器	埴	—	—	(2.7)	灰褐色～にぶい褐色	にぶい褐色～黒褐色	ヘラケズリ 回転ナデ	ヘラミガキ	ヘラ切り 接合ナデ	精良。雲母、細砂粒、赤色粒子を含む	内面黒変	202002 000264
26 第30図	S A 252	土師器	甕	—	—	(2.7)	にぶい褐色	褐色	横ナデ ハケ目	横ナデ ケズリ	—	精良。細砂粒、雲母を含む	外面にスス	202002 000270
27 第30図	S A 252	黒色土器 A類	埴	—	—	(5.25)	浅黄褐色～黒色	黒色	工具・横ナデ ヘラケズリ	ヘラミガキ	—	精良。微砂粒を含む	202002 000271	
28 第30図	S A 252	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	にぶい褐色	褐色	横ナデ	横ナデ	—	細砂粒、雲母を含む	内面に靱圧痕	202002 000387
29 第30図	S D 1	土師器	小皿	[9.4]	7.2	1.4	にぶい褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。赤色粒子を含む	202002 000001	
30 第30図	S D 1	土師器	壺	—	—	(1.1)	明赤褐色	褐色	—	円形文叩き 回転ナデ	ヘラ切り ナデ接合	精良	202002 000196	
31 第30図	S D 1	須恵器	坏	[15.7]	[9.8]	5.4	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	ナデ接合	精良。細砂粒を含む	202002 000197	
32 第30図	S D 1	須恵器	甕	—	—	(3.8)	灰黄色～黒褐色	灰白色～黄灰色	回転ナデ 波状櫛描文	回転ナデ	—	精良。細砂粒を含む	202002 000195	
33 第30図	S D 115	須恵器	坏	—	[6.8]	(1.4)	褐灰色	灰黄褐色	ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。細砂粒を含む	202002 000096	
34 第30図	S D 120	弥生土器	高坏	—	—	(4.4)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	絞り ナデ	精良。微砂粒、砂粒を含む	202002 000390	
35 第30図	S D 120	土師器	坏	—	[7.8]	(1.3)	褐色～にぶい褐色	にぶい褐色～褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良	202002 000100	
36 第30図	S D 120	土師器	皿	[15.4]	[12.6]	1.3	にぶい褐色	にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。雲母、赤色粒子を含む	202002 000115	
37 第30図	S D 120	黒色土器 A類	埴	—	—	(1.5)	褐色～にぶい褐色	黄灰色～黒褐色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ ナデ接合	ヘラ切り	精良。微砂粒を含む	202002 000109	
38 第30図	S D 120	須恵器	坏	—	—	(3.5)	黄灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。微砂粒を含む	202002 000098	
39 第30図	S D 120	須恵器	坏	—	—	(3.3)	褐灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	202002 000105	
40 第30図	S D 120	須恵器	坏	—	—	(2.7)	褐灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良	202002 000106	
41 第30図	S D 120	須恵器	甕	—	—	(9.25)	黒褐色～灰褐色	灰黄褐色～褐灰色	平行文叩き	平行文叩き	—	精良。砂粒を含む	202002 000101	
42 第30図	S D 120	須恵器	甕	—	—	(4.1)	褐色～黒色	灰白色～黒褐色	回転ナデ	回転ナデ 摩耗	—	精良。微砂粒を含む	自然釉被る	202002 000107
43 第30図	S D 120	須恵器	壺	—	[8.6]	(3.9)	灰白色～灰色	灰色～褐灰色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り 板状圧痕	精良。微砂粒を含む	202002 000108	
44 第30図	S D 120	緑釉陶器	埴	—	[7.2]	(1.8)	にぶい黄色～オリーブ黄色	淡黄色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	ヘラ切り	精良。微砂粒、黒色粒子を含む	高台に重ね焼痕跡あり	202002 000116
45 図版15	S D 120	緑釉陶器	細片	—	—	(2.2)	灰黄色	灰オリーブ色	回転ナデ 露胎	横ナデ 施釉	横ナデ 施釉	精良。微砂粒を含む	202002 000099	
46 図版15	S D 120	緑釉陶器	細片	—	—	(2.5)	淡黄色	浅黄色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 露胎	—	精良	内面黒変	202002 000112
47 第30図	S D 120	灰釉陶器	埴	—	—	(3.3)	浅黄色	灰黄色	回転ナデ 露胎	回転ナデ 施釉	—	精良。微砂粒を含む	202002 000120	
48 図版15	S D 120	貿易陶磁器	碗	—	—	(2.2)	オリーブ灰色	浅黄色	施釉	篋描文カ 施釉	—	精良。黒色粒子を含む	202002 000122	
49 第30図	S D 120	古瓦	丸瓦	(8.2)	(8.6)	1.9	灰黄褐色	灰黄褐色	斜格子文叩き、ナデ	布目	ヘラ切り 未調整	精良。微砂粒、雲母を含む	202002 000121	
50 第30図	S D 120	古瓦	丸瓦	(5.4)	(3.8)	1.7	灰黄色	浅黄色	縄目文叩き スリ消し	布目	ヘラ切り	精良。微砂粒を含む	全体的に摩耗	202002 000114
51 第30図	S D 120	古瓦	丸瓦	(4.1)	(4.6)	1.6	褐色	にぶい褐色	斜格子文叩き、ナデ	布目	—	精良。砂粒を含む	全体的に摩耗	202002 000110
52 第30図	S D 120	土製品	土錘	6.7	3.3	3.5	褐色	褐色	ナデ	穿孔	ヘラ切り	精良。雲母を含む	67.85 g 口径：1.1cm	202002 000103
53 第30図	S D 120	土製品	土錘	(7.2)	3.7	3.45	にぶい褐色	褐色	ナデ	穿孔	ナデ	精良	(62.70) g 口径：1.1cm	202002 000104
54 第30図	S D 120	土製品	土錘	5.9	3.1	3.0	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	穿孔	ヘラ切り	精良。雲母を含む	(31.65) g 口径：1.1cm	202002 000102
55 第30図	S D 140	土師器	坏	—	[7.1]	(1.45)	浅黄褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。赤色粒子、雲母を含む	202002 000183	
56 第30図	S D 140	土師器	埴	—	5.5	(1.2)	にぶい黄褐色～浅黄褐色	黒色～にぶい黄褐色	接合ナデ	ナデ	回転ナデ ナデ接合	精良。赤色粒子、雲母を含む	202002 000180	
57 第30図	S D 140	土師器	小壺	—	—	(2.2)	褐色～にぶい褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。赤色粒子を含む	202002 000179	
58 第30図	S D 140	土師器	皿	[16.6]	[12.8]	2.3	褐色	褐色	回転ナデ ヘラ調整	回転ナデ	ヘラ切り 線刻あり	精良。赤色粒子、雲母を含む	202002 000178	
59 第30図	S D 140	須恵器	坏蓋	—	—	(2.0)	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ調整	精良。黒色粒子を含む	202002 000181	
60 第30図	S D 140	須恵器	甕	—	—	(2.5)	灰白色～浅黄色	灰白色	回転ナデ 灰被る	回転ナデ	—	精良。砂粒、黒色、赤色粒子を含む	口縁部に油煙	202002 000184

第4表 出土遺物観察表③

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 材	重量・備考	登録 番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面 (凹面、釉葉)	内面 (凸面、胎土)	外面 (凹面)	内面 (凸面)	底面・高台 (側面)			
61 第30図	SD140	緑釉陶器	瓶	—	—	(3.4)	淡黄色～ 浅黄色	灰白色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 沈線 ^ハ 施釉	—	精良。砂粒、黒色 粒子を含む	外面煤ける	202002 000186
62 図版16	SD140	緑釉陶器	碗	—	—	(1.2)	灰白色	灰黄色～ 灰白色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	—	精良	口縁部片	202002 000182
63 第30図	SD155	土師器	坏	—	—	(2.3)	明黄褐色	橙色	回転ナデ 若干摩耗	回転ナデ 若干摩耗	—	精良。微砂粒、雲母、 黒色粒子を含む		202002 000189
64 第30図	SD155	土師器	皿	—	—	1.1	浅黄褐色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。雲母を 含む		202002 000188
65 第30図	SD155	須恵器	甕	—	—	(5.0)	灰黄褐色 ～褐灰色	褐灰色	縄目文 叩き	円形文 叩き	—	精良。微砂粒、雲母、 黒色粒子を含む		202002 000191
66 第30図	SD155	須恵器	甕	—	—	(1.65)	浅黄褐色	にぶい 赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	微砂粒、褐色粒子 を含む、精良		202002 000190
67 第30図	SD156	土師器	埴	—	[6.0]	(3.1)	黄灰色	明黄褐色 ～浅黄色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ ナデ・摩耗	ナデ接合 ナデ	精良。砂粒、雲 母を含む	内外面摩耗著しい	202002 000192
68 第30図	SD160	古瓦	平瓦	(9.2)	(12.6)	2.2～ 2.9	灰色	灰色	布目 ナデ消し	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。細砂粒を 含む	凹面に指紋 凸面・割れ面に煤	202002 000194
69 第30図	SD160	古瓦	平瓦	(9.7)	(10.7)	2.5 ～2.6	灰褐色	灰黄褐色 ～褐色	布目 一部オサエ	縄目文 叩き	—	精良		202002 000193
70 第31図	SD165 1層	土師器	小皿	—	—	(0.8)	浅黄褐色	明黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良		202002 000199
71 第31図	SD165 下層	土師器	甕	—	—	(5.8)	灰褐色 ～黒褐色	にぶい褐色 ～褐灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ケズリ	—	精良。砂粒を 含む	外面にスス	202002 000201
72 第31図	SD165 下層	古瓦	平瓦	(13.95)	(7.9)	1.8	灰色	灰黄色	布目	斜格子文 叩き、ナデ	ヘラ切り	精良。砂粒を 含む	焼成後穿孔か	202002 000202
73 第31図	SD165	古瓦	平瓦	(15.5)	(11.5)	2.6	にぶい橙色 ～灰黄褐色	灰黄褐色	布目	摩耗	ヘラ切り	精良。細砂粒を 含む		202002 000203
74 第31図	SD165 1層	石製品	石鍋	(8.3)	(4.4)	(2.1)	褐灰色	灰黄褐色 ～暗青灰色	ケズリ	ケズリ 工具痕	—	滑石	(110.50)g 外面にスス付着。折損部を研磨 した箇所あり。転用品か	202002 000200
75 第31図	SD170 南部	土師器	坏蓋	—	—	(1.3)	にぶい橙色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良		202002 000268
76 第31図	SD170	土師器	坏	—	—	(1.1)	橙色	にぶい橙色	ナデ 粗圧痕	回転ナデ	ヘラ切り	精良。褐色粒子 を含む	外面にスス	202002 000278
77 第31図	SD170 北端	黒色土器 A類	埴	—	—	(1.5)	にぶい橙色	褐灰色 ～黒褐色	回転ナデ	ケズリカ 摩耗	回転ナデ ナデ接合	精良。雲母を 含む	外面に門歯痕	202002 000204
78 第31図	SD170	須恵器	甕	—	—	(3.3)	褐灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。砂粒を 含む		202002 000275
79 第31図	SD170	須恵器	甕	—	—	(8.8)	にぶい褐色～ 赤褐色	にぶい 赤褐色	平行文 叩き	平行文叩き ナデ消し	—	精良。砂粒を 含む	外面灰被る	202002 000207
80 第31図	SD170 南部	須恵器	壺	—	—	(9.5)	灰色	灰色	格子目叩き ナデ	回転ナデ 指オサエ	ナデ	精良。黒色粒子 を含む		202002 000269
81 第31図	SD170	古瓦	平瓦	(9.6)	(11.6)	1.9	灰白色	にぶい赤褐色 ～灰白色	布目	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。細砂粒、 赤色粒子を含む		202002 000205
82 第31図	SD170	古瓦	平瓦	(13.3)	(10.2)	2.7	浅黄褐色		布目 摩耗	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り 摩耗	精良。雲母、赤 色粒子を含む	摩耗著しい	202002 000277
83 第31図	SD170	古瓦	平瓦	(10.1)	(9.1)	2.2	灰色	暗灰黄色	布目	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	細砂粒を含む		202002 000206
84 第31図	SD170	古瓦	平瓦	(9.3)	(7.4)	2.7	黄灰色		粗い布目	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。細砂粒、 黒色粒子を含む	凹面にスス	202002 000276
85 第31図	SD190	土師器	坏	10.4	6.8	2.8	にぶい赤褐色 ～明赤褐色	にぶい褐色 ～にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 板状圧痕	精良。細砂粒を 含む		202002 000214
86 第31図	SD190	土師器	坏	10.6	6.4	2.5	橙色	橙色～褐灰色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	ヘラ切り 板状圧痕	精良		202002 000211
87 第31図	SD190	土師器	坏	[10.4]	7.1	2.6	橙色～にぶい褐色		回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 板状圧痕	精良。赤色粒子 を含む		202002 000215
88 第31図	SD190	土師器	台付皿	[13.4]	6.1	2.8	浅黄褐色～ にぶい褐色	にぶい黄褐色 ～灰黄褐色	回転ナデ ナデ接合	回転ナデ ナデ	ヘラ切り ナデ	精良。雲母、黒 色粒子を含む		202002 000212
89 第31図	SD190	土師器	埴	[13.0]	9.2	6.0	橙色	褐色	回転ナデ 接合ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良。赤色粒子 を含む	外面の一部剥離	202002 000219
90 第31図	SD190	須恵器	皿	[10.8]	(1.1)	2.0	黄灰色		回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。細砂粒を 含む	口縁部歪む	202002 000217
91 図版18	SD190	緑釉陶器	細片	—	—	(2.1)	浅黄色～ オリーブ黄色	黄灰色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	—	精良。黒色粒子 を含む		202002 000213
92 第31図	SD190	古瓦	丸瓦	(9.6)	(7.3)	1.9	灰色		縄目文叩き スリ消し	布目	ヘラ切り	精良。微砂粒を 含む		202002 000218
93 第32図	SD215	土師器	坏	(11.8)	(7.9)	2.8 ～3.0	褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	微砂粒、雲母、 赤色粒子を含む	外面に門歯痕	202002 000251
94 第32図	SD215	土師器	坏	—	—	3.2	褐色～ にぶい褐色	褐色～ にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 板状圧痕	精良。雲母、赤 色粒子を含む		202002 000231
95 第32図	SD215	土師器	皿	[13.1]	[11.0]	1.4	褐色～ にぶい褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 摩耗	精良。赤色粒子 を含む	内面に門歯痕	202002 000239
96 第32図	SD215	土師器	皿	—	—	(2.0)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。赤色粒子 を含む		202002 000232
97 第32図	SD215	土師器	壺	—	—	(3.1)	灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。微砂粒、 雲母を含む	口縁部片	202002 000240
98 第32図	SD215	土師器	把手	(5.1)	(4.3)	1.9	暗灰黄色 ～黒色	—	ナデ 剥離	—	—	精良。雲母、赤 色粒子を含む	スス付着	202002 000244
99 第32図	SD215	黒色土器 A類	埴	—	—	(1.6)	にぶい褐色 ～にぶい褐色	黒色	ナデ接合	ナデ	ヘラ切り	精良。細砂粒を 含む	底部片	202002 000226
100 第32図	SD215	黒色土器 B類	埴	—	—	(1.7)	灰色	灰色	摩耗 回転ナデ	ヘラ ミガキ	回転ナデ 摩耗	精良。砂粒、雲母 を含む	底部片	202002 000246
101 第32図	SD215	瓦器	埴	—	[6.6]	(4.9)	灰白色～灰色	灰白色～ 黄灰色	回転ナデ ナデ接合	回転ナデ	ヘラ切り	精良。細砂粒を 含む		202002 000233
102 第32図	SD215	瓦器	埴	—	—	(3.3)	灰色～淡黄色	黄色～灰色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	—	精良。砂粒、雲母、 黒色粒子を含む	口縁部片	202002 000241
103 第32図	SD215	瓦器	埴	—	—	(2.4)	黒色～灰色	黒色～灰色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	—	精良。細砂粒、 雲母を含む	口縁部片	202002 000245
104 第32図	SD215	緑釉陶器	碗	—	—	(2.3)	灰黄色	灰白色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	—	精良	口縁部片。釉葉の剥離 著しい	202002 000237
105 第32図	SD215	緑釉陶器	碗	—	—	(2.75)	灰オリーブ色	浅黄色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	—	精良	外面煤ける	202002 000238

第5表 出土遺物観察表④

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 材	重量・備考	登録 番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面 (凹面、釉葉)	内面 (凸面、胎土)	外面 (凹面)	内面 (凸面)	底面・高台 (側面)			
106 第32図	SD215	貿易陶磁器	碗	—	(9.0)	(4.1)	浅黄色	橙色	回転ナデ一部露胎	回転ナデ施釉	目跡2ヶ所ヘラ切り	精良。微砂粒、黒色粒子を含む	底部片。越州窯系青磁碗I-1(2)類	20200200242
107 第32図	SD215	貿易陶磁器	碗	—	—	(1.9)	灰オリーブ色	灰色	回転ナデ施釉	回転ナデ施釉	—	精良。黒色粒子を含む	口縁部片。越州窯系青磁碗I類	20200200250
108 第32図	SD215	貿易陶磁器	碗	—	—	(2.2)	灰白色	浅黄褐色	回転ナデ施釉	回転ナデ施釉	—	精良	口縁部片。玉縁口縁白磁碗IV類	20200200230
109 第32図	SD215	陶器	壺	—	—	(1.7)	明黄褐色	橙色	ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。黒色粒子を含む	露胎	20200200253
110 第32図	SD215	古瓦	平瓦	(13.4)	(14.5)	2.25	黄灰色～灰色		布目一部ナデ消し	縄目文叩きスリ消し	ヘラ切り	砂粒、黒色粒子を含む	—	20200200247
111 第32図	SD215	古瓦	平瓦	(7.9)	(12.2)	2.3	黄灰色～灰黄色		布目	縄目文叩き	ヘラ切り	精良。細砂粒を含む	—	20200200234
112 第32図	SD215	古瓦	平瓦	(4.55)	(5.7)	1.8	灰色		布目	斜格子文叩き	—	精良。微砂粒を含む	—	20200200229
113 第32図	SD215	古瓦	平瓦	(9.4)	(9.8)	3.0	灰色	灰色～灰オリーブ色	布目	縄目文叩き	—	精良。細砂粒を含む	—	20200200248
114 第32図	SD215	古瓦	平瓦	(9.4)	(7.9)	1.9	灰色		布目	縄目文叩き	—	精良。砂粒、黒色粒子を含む	—	20200200252
115 第32図	SD215	古瓦	平瓦	(11.2)	(7.1)	2.2	灰白色～浅黄褐色	淡黄色～浅黄褐色	布目縷じ跡	縄目文叩きスリ消し	—	精良。微砂粒を含む	—	20200200235
116 第32図	SD215	古瓦	丸瓦	(9.7)	(7.3)	1.9	灰白色	灰白色	ナデ消し	布目一部スリ消し	ヘラ切り	精良。砂粒を含む	—	20200200243
117 第32図	SD215	古瓦	丸瓦	(7.1)	(4.9)	1.5	浅黄褐色	にぶい橙色	斜格子文叩きナデ消し	布目	ヘラ切り未調整	精良	—	20200200227
118 第32図	SD215	石製品	磨石	(13.6)	(5.2)	(5.9)	灰褐色～褐灰色		使用面×2	—	—	玄武岩	(370) g	20200200228
119 第32図	SD215	石製品	磨石	11.8	9.6	7.55	灰色～灰白色		使用面2ヶ所	—	—	玄武岩	994 g	20200200249
120 第32図	SD215	石製品	砥石	(3.9)	(3.2)	2.4	明赤褐色～褐色		使用面	—	—	砂岩	(41.25) g	20200200236
121 第33図	SD365東端	土師器	壺	—	(9.6)	(3.9)	橙色	橙色	ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ摩耗	ヘラ切り摩耗	精良。砂粒を若干含む	摩耗著しい。外面に門歯痕	20200200280
122 第33図	SD365西端	土師器	壺	—	(12.1)	(5.7)	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。微砂粒、雲母、褐色粒子を含む	内面にスス	20200200290
123 第33図	SD365東部	土師器	甕	(25.2)	—	(7.8)	にぶい橙色	橙色	横ナデハケ目	ハケ目指オサエ	—	精良。細砂粒、雲母を含む	—	20200200285
124 第33図	SD365中央	土師器	把手	(5.3)	(5.3)	4.3	橙色～浅黄褐色	—	ナデ摩耗	—	—	精良。砂粒を含む	—	20200200287
125 第33図	SD365東端	土師器	把手	(4.9)	(5.9)	2.9	橙色	にぶい黄褐色	ナデ	—	—	精良。細砂粒を含む	—	20200200281
126 第33図	SD365東端	須恵器	坏蓋	—	—	(1.45)	にぶい黄褐色～黄灰色	暗灰黄色	回転ナデヘラケズリ	回転ナデ	—	精良	外面灰被る	20200200282
127 第33図	SD365東端	須恵器	甕	—	—	(10.6)	灰黄色		格子目叩きカキ目	青海波叩きナデ	—	精良。細砂粒、黒色粒子を含む	—	20200200283
128 第33図	SD365中央	古瓦	丸瓦	(8.7)	(6.9)	3.0	黒褐色～暗赤褐色		縄目文叩きスリ消し	布目縷じ跡	ヘラ切り未調整	精良。細砂粒を含む	—	20200200288
129 第33図	SD365東端	石製品	軽石	4.4	4.5	4.45	淡黄色	—	平滑面あり	平滑面あり	—	軽石	21.75g	20200200284
130 第33図	SD405	土師器	坏	—	—	(1.0)	にぶい褐色～にぶい橙色	にぶい褐色～にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。赤色粒子を含む	—	20200200317
131 第33図	SD405	黒色土器A類	壺	—	—	(3.0)	にぶい黄褐色	黒色	回転ナデ	ヘラミガキ	—	精良	—	20200200319
132 第33図	SD405	須恵器	坏	—	—	(1.9)	灰白色～黄灰色	黄灰色	ヘラケズリナデ接合	回転ナデ	ナデ接合	精良	—	20200200318
133 第33図	SD446南部	土師器	坏	—	—	(1.0)	橙色	浅黄褐色	回転ナデ摩耗	回転ナデ	ヘラ切りナデ消し	精良。雲母、赤色粒子を含む	—	20200200348
134 第33図	SD446南部	須恵器	甕	—	—	(8.4)	明褐色	褐灰色	格子目叩き回転ナデ	並行文タタキ	—	精良。砂粒を含む	—	20200200346
135 第33図	SD446北部	古瓦	丸瓦	(6.8)	(10.8)	2.2	灰黄褐色～褐色	浅黄色	横ナデ	布目横骨痕	ヘラ切り	精良。微砂粒、赤色粒子を含む	—	20200200344
136 第33図	SD446南部	古瓦	平瓦	(6.35)	(6.1)	1.45	灰色	灰色	布目ヘラ調整	縄目文叩き	ヘラ切り	精良。細砂粒を含む	—	20200200347
137 第33図	SD446北部	古瓦	平瓦	(5.0)	(11.7)	1.8	灰色	灰色	布目ヘラ調整	縄目文叩きスリ消し	ヘラ切り	精良。砂粒、微砂粒を含む	—	20200200345
138 第33図	SD453	土師器	坏	—	—	(1.0)	褐灰色～灰黄褐色	にぶい黄褐色	摩耗	回転ナデ	ヘラ切り	精良。微砂粒、褐色粒子を含む	—	20200200380
139 第33図	SD475	土師器	坏	—	—	(2.5)	にぶい褐色～褐色	橙色	回転ナデ摩耗	回転ナデ摩耗	—	精良。赤色粒子を含む	摩耗著しい	20200200386
140 第33図	SD475	黒色土器A類	壺	—	—	(1.0)	橙色	暗灰色	ナデ	回転ナデ接合ナデ	摩耗	精良	—	20200200384
141 第33図	SD475	古瓦	丸瓦	(6.3)	(4.0)	1.9	にぶい褐色		ナデ消し	ナデ	ヘラ切り	精良。細砂粒を含む	—	20200200385
142 第33図	SF445黒褐色土	土師器	坏蓋	2.6(幅み径)	—	(1.55)	橙色	灰褐色	回転ナデ接合ナデ	—	回転ナデ	精良。砂粒を若干含む	—	20200200355
143 第33図	SF445黒褐色土	土師器	皿	—	—	2.0	にぶい褐色～にぶい褐色	にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデナデ	ヘラ切り	精良	外面に黒斑	20200200356
144 第33図	SF445黒褐色土	土師器	小皿	(9.8)	(7.8)	1.7	にぶい褐色	橙色	回転ナデ	回転ナデナデ	ヘラ切りナデ	精良。赤色粒子を若干含む	内面に門歯痕	20200200349
145 第33図	SF445黒褐色土	土師器	小皿	—	—	1.2	橙色		回転ナデ	回転ナデナデ	糸切り	精良	—	20200200350
146 第33図	SF445黒褐色土	土師器	甕	—	—	(4.0)	褐灰色	にぶい褐色	回転ナデ刷毛目	回転ナデケズリ	—	砂粒を含む	—	20200200357
147 第33図	SF445黒褐色土	土師器	把手	—	—	(3.5)	にぶい褐色～浅黄褐色	—	ナデ未調整	—	—	精良。砂粒を含む	—	20200200351
148 第33図	SF445黒褐色土	黒色土器A類	甕	—	—	(11.4)	にぶい褐色	黒褐色～黒色	ハケ目横ナデ	工具ナデミガキ	—	精良。砂粒を含む	—	20200200328
149 第33図	SF445黒褐色土	黒色土器A類	壺	—	(9.2)	(2.1)	橙色	褐灰色	回転ナデ接合ナデ	ミガキ・オサエ・ナデ	ヘラ切りナデ	精良。赤色粒子を含む	底部片	20200200354
150 第33図	SF445黒褐色土	須恵器	甕	—	—	(5.7)	灰褐色	灰褐色～にぶい赤褐色	格子目叩き回転ナデ	叩き回転ナデ	—	精良。微砂粒を含む	口縁部片。硬化面直上、P6出土破片と接合	20200200352

第6表 出土遺物観察表⑤

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 材	重 量・備 考	登 録 番 号
				口 径 (長さ)	底 径 (幅)	器 高 (厚さ)	外 面 (凹面、軸葉)	内 面 (凸面、胎土)	外 面 (凹面)	内 面 (凸面)	底 面・高 台 (側面)			
151 第33図	S F 445 黒褐色土	須恵器	壺	—	—	(4.2)	灰色	黄灰色	叩き 回転ケズリ	横ナデ 接合ナデ	ヘラ切り	精良。砂粒を 含む	底部片	202002 000353
152 第34図	S F 445 黒褐色土	須恵器	壺	—	—	(6.2)	にぶい褐色	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良		202002 000331
153 第34図	S F 445 黒褐色土	古瓦	平瓦	(9.7)	(9.2)	1.9	黄灰色～黒色		布目	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。褐色粒子 を含む		202002 000330
154 第34図	S F 445 灰板状凹凸面	土師器	甌	—	—	(4.0)	橙色～ 暗灰色	橙色	ナデ	ナデ 指オサエ	—	細砂粒、雲母を 含む	外面に黒斑	202002 000369
155 第34図	S F 445 灰板状凹凸面	須恵器	坏	—	[5.2]	(1.65)	灰色		回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り ナデ	精良	底部片	202002 000371
156 第34図	S F 445 灰板状凹凸面	須恵器	壺	—	[8.2]	(1.5)	赤黒色	灰黄色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良	底部片。自然軸被る	202002 000336
157 第34図	S F 445 灰板状凹凸面	貿易 陶磁器	碗	—	—	(1.7)	にぶい黄色	灰黄色	回転ナデ 施軸	回転ナデ 施軸	—	精良。黒色粒子 を含む	青磁碗口縁部片	202002 000372
158 第34図	S F 445 硬化面直上	土師器	坏	—	—	(2.5)	橙色		回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	—	精良。雲母を含む	口縁部片	202002 000332
159 第34図	S F 445 硬化面直上	黒色土類 B類	皿	—	—	(2.7)	褐灰色		ミガキ	ミガキ	—	精良	口縁部片	202002 000358
160 第34図	S F 445 硬化面直上	緑釉陶器	碗	—	—	(2.1)	くすんだ 黄緑色	浅黄褐色	回転ナデ 施軸	回転ナデ 施軸	—	精良	口縁部片	202002 000360
161 第34図	S F 445 硬化面直上	古瓦	平瓦	(7.25)	(12.0)	2.9	灰色	灰黄色	布目 ナデ	縄目文叩き	ヘラ切り ナデ	精良。礫を含む		202002 000362
162 第34図	S F 445 硬化面直上	古瓦	丸瓦	(23.9)	(7.2)	2.1	灰白色 ～灰色	灰色	斜格子叩き 摩耗	布目 摩耗	ヘラ切り 破断未調整	精良。微砂粒 を含む	全体的に摩耗	202002 000329
163 第34図	S F 445 硬化面直上	古瓦	丸瓦	(13.15)	(8.85)	2.0	浅黄褐色～ にぶい褐色	にぶい 黄褐色	斜格子叩き スリ消し	布目 ナデ消し	ヘラ切り 剥離	精良。雲母を 含む		202002 000361
164 第34図	S F 445 硬化面直上	古瓦	丸瓦	(7.8)	(7.25)	1.5	灰白色		斜格子叩き	布目	ヘラ切り 破断	精良。砂粒を 含む		202002 000359
165 第34図	S F 445 P 1	土師器	高坏	—	—	(4.0)	橙色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良。雲母、脚 色粒子を含む	脚部片	202002 000363
166 第34図	S F 445 P 1	須恵器	壺	—	—	(2.7)	にぶい 黄褐色	黄灰色～ 暗灰黄色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。細砂粒を 含む	底部片	202002 000364
167 第34図	S F 445 P 1	緑釉陶器	碗	—	—	(2.4)	浅黄色	灰黄褐色	回転ナデ 施軸	回転ナデ 施軸	回転ナデ 施軸	精良	底部片。P 6 出土破片 と接合	202002 000365
168 第34図	S F 445 P 2	須恵器	坏	—	—	(1.15)	灰白色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良	底部片。P 1 出土破片 と接合	202002 000367
169 図版22	S F 445 P 2	緑釉陶器	細片	—	—	(0.7)	灰オリーブ色～ オリーブ灰色	灰白色	回転ナデ 施軸	ヘラケズリ 露胎	—	精良。微砂粒を 含む	底部片 内面にスッカ	202002 000368
170 第34図	S F 445 P 5	古瓦	丸瓦	(9.8)	(10.65)	1.6	灰褐色～ 黄灰色	黄灰色	縄目文叩き スリ消し	布目 縷じ痕	ヘラ切り	精良。砂粒を含 む	172と類似	202002 000374
171 第34図	S F 445 P 5	須恵器	甕	—	—	(3.8)	黄灰色	灰黄色	回転ナデ 叩き	回転ナデ 叩き	—	精良		202002 000373
172 第34図	S F 445 P 6	古瓦	丸瓦	(10.3)	(10.4)	1.8	褐灰色～ 灰色	灰色	縄目文叩き スリ消し	布目 縷じ痕	ヘラ切り	精良	170と類似	202002 000375
173 第34図	S F 445 P 6	古瓦	平瓦	(15.1)	(13.2)	2.9	灰白色		布目 摩耗	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良	凹凸面摩耗	202002 000376
174 第35図	S F 445 P 8	土師器	坏蓋	[3.7] (縷じ痕)	—	(1.9)	にぶい 褐色～ 褐色	にぶい褐色	回転ナデ	—	ナデ	精良		202002 000333
175 第35図	S F 445 P 8	須恵器	坏	—	—	(6.3)	黄灰色	灰黄色～ 黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。砂粒を含む	口縁部片。P 10 出土破片 と接合	202002 000334
176 第35図	S F 445 P 8	古瓦	平瓦	(8.2)	(10.0)	2.25	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	布目	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。褐色粒子 を含む		202002 000335
177 第35図	S F 445 P 9	土師器	把手	(5.4)	(3.2)	2.6	褐色～ にぶい褐色	浅黄褐色	オサエ	ナデ	—	精良。雲母を 含む		202002 000337
178 第35図	S F 445 P 9	緑釉陶器	碗	—	—	(1.45)	オリーブ黒色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202002 000338
179 第35図	S F 445 P 10	須恵器	鉢	—	—	(2.1)	灰白色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ	摩耗	精良。赤色粒子 を含む	底部片	202002 000339
180 第35図	S F 445 P 12	須恵器	甕	—	—	(13.1)	灰色	灰色～ 暗灰色	格子目叩き ナデ消し	円形文叩き ナデ	—	精良。微砂粒を 含む	胴部片。P 11 出土破片 と接合	202002 000340
181 第35図	S F 445 P 12	古瓦	平瓦	(8.6)	(6.0)	2.2	黄灰色	灰色	布目 ナデ消し	縄目文叩き	ヘラ切り	精良。細砂粒を 含む		202002 000341
182 第35図	S F 445 P 13	古瓦	平瓦	(10.65)	(8.45)	2.75	にぶい褐色 ～灰褐色	褐色～ 灰褐色	布目	縄目文叩き スリ消し	—	精良		202002 000342
183 第35図	S F 445 P 13	土製品	丸玉	1.75	1.6	1.65	にぶい褐色～褐灰色		ナデ	ナデ	ナデ	精良。黒色粒子を 含む	外面黒変	202002 000343
184 第35図	S F 445 掘方	土師器	坏	—	—	(1.0)	褐色～ 浅黄褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良	底部片	202002 000388
185 第35図	S F 445 掘方	須恵器	甕	—	—	(8.4)	黄灰色		格子目叩き ナデ消し	平行文叩き	—	精良	胴部片	202002 000325
186 第35図	S I 133	土師器	坏蓋	—	—	(1.0)	褐色	褐色	回転ナデ ハケ目カ	回転ナデ	—	精良。微砂粒、赤色粒 子、雲母を含む	口縁部片	202002 000172
187 第35図	S I 133	土師器	皿	—	—	(1.2)	浅黄褐色～褐色		回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。雲母を 含む	底部片	202002 000173
188 第35図	S I 133	土師器	甕	—	[6.8]	(5.7)	褐色～ にぶい褐色	褐色	ハケ目	工具ナデ 指オサエ	ヘラ切り 縄痕	精良。砂粒、 雲母を含む	底部片	202002 000174
189 第35図	S K 80	土師器	坏	—	[8.8]	(1.9)	褐色～ にぶい褐色	にぶい褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良。赤色粒子 を多く含む	底部片	202002 000078
190 第35図	S K 80	土師器	埴	—	[8.4]	(3.4)	褐色	にぶい褐色	回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ ナデ	—	精良	底部片。筑後型カ	202002 000079
191 第35図	S K 85	土師器	坏蓋	—	—	(1.8)	にぶい 褐色	にぶい 褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202002 000082
192 第35図	S K 85	土師器	坏蓋	—	—	(1.2)	褐色	褐色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	—	精良。赤色粒子 を含む	口縁部片	202002 000083
193 第35図	S K 85	土師器	埴	[15.8]	—	(5.3)	明赤褐色～ にぶい褐色	明赤褐色～ にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。雲母、赤 色粒子を含む		202002 000088
194 第35図	S K 85	土師器	坏	[14.4]	[8.8]	3.0	褐色～ にぶい褐色	褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良		202002 000086
195 第35図	S K 85	土師器	坏	[15.2]	[7.2]	3.0	褐色～ にぶい褐色	褐色～褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良		202002 000085

第7表 出土遺物観察表⑥

遺物 No.	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)			色調		調整・文様			胎土材	重量・備考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面 (凹面、釉薬)	内面 (凸面、胎土)	外面 (凹面)	内面 (凸面)	底面・高台 (側面)			
196 第35図	S K85	土師器	坏	[15.8]	[8.0]	3.8	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	摩耗	精良。赤色粒子を含む		202002 000084
197 第35図	S K85	土師器	皿	[16.4]	[12.0]	2.1	橙色	にぶい橙色 ～橙色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良。細砂粒、赤色粒子を含む		202002 000087
198 第35図	S K85	土師器	甕	—	—	(5.4)	にぶい橙色 ～橙色	橙色	ハケ目 横ナデ	ケズリ 横ナデ	—	精良。砂粒、雲母を含む	口縁部片	202002 000089
199 第35図	S K85	須恵器	坏蓋	—	—	(1.4)	灰色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良。微砂粒を含む	口縁部片	202002 000090
200 第35図	S K400 表面	土師器	坏	—	—	2.5	橙色	橙色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良。雲母を含む	口縁部片	202002 000303
201 第35図	S K400 表面	黒色土器 A類	埴	—	—	(3.8)	にぶい黄褐色 ～黒色	黒色	ヘラミガキ 回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ヘラミガキ	—	精良。雲母を含む	口縁部片	202002 000305
202 第35図	S K400 表面	須恵器	甕	—	—	(12.1)	赤褐色	暗赤灰色	格子目叩き	同心円叩き	—	精良。砂粒を若干含む	胴部片	202002 000304
203 第36図	S K400	土師器	坏	—	—	2.8	にぶい橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良	口縁部に油煙	202002 000306
204 第36図	S K400	土師器	坏	—	7.0～ 7.3	(2.55)	橙色～ 灰黄褐色	にぶい黄褐色 ～橙色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ	ヘラ切り	精良。褐色粒子を含む	底部片。内面に門歯痕	202002 000307
205 第36図	S K400	土師器	皿	—	—	1.65	橙色	橙色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ 摩耗	摩耗	精良。雲母を含む		202002 000308
206 第36図	S K400	土師器	埴	13.5	—	(4.6)	橙色	橙色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り	精良	高台剥離 内面に門歯痕	202002 000309
207 第36図	S K400	土師器	鉢	—	—	(5.9)	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202002 000316
208 第36図	S K400	土師器	甕	[39.4]	—	(16.5)	にぶい 黄褐色	にぶい橙色	ハケ目 回転ナデ	ケズリ 回転ナデ	—	細砂粒を含む	外面にスス	202002 000310
209 第36図	S K400	黒色土器 A類	埴	—	—	(4.0)	橙色	黒色	回転ナデ ヘラミガキ 回転ナデ	ヘラミガキ 回転ナデ	—	精良。雲母、褐色粒子を含む	口縁部片	202002 000312
210 第36図	S K400	須恵器	坏	—	—	5.1	灰黄色	灰黄褐色	ナデ	回転ナデ ナデ	ナデ	精良。雲母を含む	二次被熱	202002 000311
211 第36図	S K400	土製品	不明 製品	(6.15)	(5.9)	1.2	明黄褐色 ～褐色	にぶい黄褐色 ～にぶい橙色	工具ケズリ 一部オサ	ケズリ 薬痕跡	—	精良。褐色粒子、雲母を含む	外面の一部被熱	202002 000313
212 第36図	S K400	石製品	台石	(14.6)	(17.0)	(7.9)	灰黄色～灰黄色		研磨	研磨	稜線あり	玄武岩	外面に薄いスス	202002 000315
213 第37図	S P210	土師器	埴	14.8	10.2	5.6～ 5.7	にぶい橙色 ～褐色	橙色	回転ナデ ナデ接合	回転ナデ	ヘラ切り 板状圧痕	精良。細砂粒を含む	内面に門歯痕	202002 000225
214 第37図	S P375	土師器	埴	—	—	(2.6)	橙色		回転ナデ	回転ナデ ナデ接合	—	精良。赤色粒子を含む	底部片	202002 000292
215 第37図	S P375	須恵器	壺	—	—	(4.7)	にぶい赤褐色 ～灰黄褐色	灰黄褐色	並行文叩き ナデ	オサエ	—	精良	胴部片	202002 000295
216 第37図	S P375	須恵器	壺	—	—	(10.3)	灰色～ 暗灰色	灰色	格子目文叩き ナデ接合	指オサエ	—	精良。細砂粒を含む	肩部片	202002 000294
217 第37図	S P375	須恵器	甕	—	—	(11.6)	灰白色	灰白色	格子目文叩き	同心円文・ 平行文叩き	—	精良。細砂粒を含む	胴部片。二次被熱	202002 000293
218 第37図	S P375	古瓦	平瓦	(14.3)	(14.1)	2.4～ 2.9	灰白色	灰白色	布目	縄目文叩き	ヘラ切り	精良。細砂粒を含む		202002 000296
219 第37図	S X125	緑釉陶器	水注	—	—	(2.2)	浅黄色	灰白色	貼付取手 施軸	回転ナデ 施軸	—	精良	肩部片	202002 000123
220 第37図	S X150	須恵器	壺	—	—	(5.4)	灰白色	灰白色	ヘラケズリ	工具ナデ	—	精良。砂粒、黒色粒子を含む	胴部片	202002 000187
221 第37図	S D2	土師器	坏	—	[10.0]	(1.2)	橙色		回転ナデ	ナデ	糸切り	精良。雲母を大量に含む		202002 000003
222 第37図	S D2	土師器	埴	—	—	(5.1)	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。雲母、赤色粒子を含む	口縁部摩耗	202002 000004
223 第37図	S D2	須恵器	平瓶	—	—	(2.1)	灰色	灰色	回転ナデ 沈線	回転ナデ ナデ接合	—	精良。砂粒を含む	肩部片	202002 000005
224 第37図	S D2	古瓦	丸瓦	(15.7)	(11.3)	7.7	灰色	灰色	縄目文叩き スリ消し	布目 縦ジ跡	ヘラ切り	精良。砂粒を含む		202002 000006
225 第37図	S D2	古瓦	丸瓦	(9.0)	(6.2)	2.15	褐灰色	灰白色 ～褐灰色	縄目文叩き スリ消し	布目	ヘラ切り	黒色粒子を含む		202002 000007
226 第37図	S D2	古瓦	平瓦	(7.4)	(7.0)	2.1	灰黄褐色		布目	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。細砂粒を含む		202002 000008
227 第37図	S D2	古瓦	平瓦	(7.5)	(8.3)	1.8	灰白色	灰白色	布目・ナデ コビキ痕	ナデ 摩耗	—	精良。細砂粒を含む		202002 000009
228 第37図	S D2	古瓦	平瓦	(7.3)	(14.2)	2.4	にぶい黄褐色 ～灰白色	にぶい黄褐色 ～灰白色	布目	縄目文叩き スリ消し	—	精良。黒色粒子を含む		202002 000002
229 第37図	S D2	石製品	磨製 石斧	(6.2)	(4.95)	1.9	灰黄色		研磨	研磨	研磨	片岩	(90.35) g	202002 000010
230 第38図	S D40	土師器	皿	[16.0]	[11.4]	2.7	橙色		回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	糸切り 底目圧痕	精良。雲母を含む	内面に粘土付着	202002 000070
231 第38図	S D40	土師器	壺	—	—	(1.3)	橙色～ 明黄褐色	明黄褐色	回転ヘラ ケズリ	ナデ	同心円文 叩き	細砂粒、雲母を含む		202002 000065
232 第38図	S D40	土師器	土鍋	—	—	(4.1)	灰黄褐色 ～黒褐色	灰黄褐色	回転ナデ 圧痕	ハケ目	—	細砂粒を含む	外面被熱	202002 000068
233 第38図	S D40	土師器	土鍋	—	—	(4.05)	黒褐色	灰黄褐色	ハケ目 圧痕	ハケ目	—	精良。細砂粒、雲母を含む	外面被熱	202002 000069
234 第38図	S D40	瓦器	埴	—	—	(1.3)	灰白色		ナデ 摩耗	摩耗	摩耗	精良	摩耗著しい	202002 000066
235 第38図	S D40	須恵器	甕	—	—	(10.3)	にぶい黄褐色	橙色	格子目文叩き	青海波文 叩き	—	精良。細砂粒、黒色粒子を含む		202002 000064
236 第38図	S D40	古瓦	平瓦	(6.9)	(6.1)	2.7	灰色		布目 ヘラ切り	縄目文叩き	ヘラ切り	精良。細砂粒を含む		202002 000063
237 第38図	S D40	古瓦	平瓦	(5.7)	(5.6)	2.0	黄灰色		布目	縄目文叩き スリ消し	—	精良。砂粒を含む		202002 000061
238 第38図	S D40	古瓦	丸瓦	(10.35)	(3.8)	1.7	浅黄褐色	浅黄色	斜格子文 叩き	布目	ヘラ切り 破断未調整	精良。砂粒を含む		202002 000067
239 第38図	S D50	須恵器	甕	—	—	(6.5)	にぶい褐色	にぶい黄褐色	格子目叩き	平行文叩き	—	精良。微砂粒を含む	胴部片。内面の一部にスス	202002 000073
240 図版27	S D50	陶磁器	碗	—	—	(1.2)	浅黄色	にぶい黄褐色	回転ナデ 施軸	文様 施軸	—	精良	外面被熱	202002 000074

第8表 出土遺物観察表⑦

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 材	重 量・備 考	登 録 番 号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面 (凹面、釉薬)	内面 (凸面、胎土)	外面 (凹面)	内面 (凸面)	底面・高台 (側面)			
241 第38区	SD127	土師器	坏	—	[7.5]	(1.35)	にぶい褐色	浅黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切りカ 摩耗	精良	底部片	202002 000131
242 第38区	SD127	土師器	坏	—	—	(1.8)	橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 板状圧痕	精良	底部片	202002 000152
243 第38区	SD127	土師器	皿	[14.4]	[11.0]	2.6	浅黄褐色	浅黄褐色	回転ナデ 切り離し痕	回転ナデ	糸切り	精良		202002 000147
244 第38区	SD127	土師器	皿	—	8.8	(1.1)	にぶい 黄褐色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り 板状圧痕	精良。雲母を含む	底部片。外面にスス	202002 000148
245 第38区	SD127	土師器	皿	—	[8.8]	(1.0)	浅黄褐色	橙色	摩耗	回転ナデ 摩耗	糸切り 摩耗	精良	底部片。摩耗著しい	202002 000155
246 第38区	SD127	土師器	小皿	—	[7.7]	(1.1)	黄褐色	橙色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ	糸切り 摩耗	精良	底部片。全体的に焼け 歪む。外面摩耗著しい	202002 000135
247 第38区	SD127	土師器	小皿	—	—	(1.1)	黄褐色	橙色	摩耗	回転ナデ ナデ	摩耗	精良	底部片。摩耗著しい	202002 000138
248 第38区	SD127	土師器	埴	—	—	(3.5)	にぶい橙色～ にぶい黄褐色	黄褐色	回転ナデ 工具ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202002 000130
249 第38区	SD127	土師器	土鍋	—	—	(3.1)	にぶい褐色 ～灰褐色	にぶい黄褐色 ～明黄褐色	横ナデ・ハ ケ目・圧痕	工具ナデ	—	精良。砂粒、 雲母を含む	口縁部片。外面にスス	202002 000159
250 第38区	SD127	土師器	土鍋	—	—	(1.6)	にぶい 黄褐色	浅黄褐色	横ナデ 圧痕	横ナデ	—	砂粒、雲母を含む	口縁部片	202002 000137
251 第38区	SD127	土師器	土鍋	—	—	(2.5)	灰黄褐色	にぶい 黄褐色	横ナデ 圧痕	ハケ目	—	砂粒、雲母を含む	口縁部片。外面にスス	202002 000141
252 第38区	SD127	土師器	把手	(5.05)	(4.6)	2.1	橙色		ナデ	摩耗	—	砂粒、褐色粒子 を含む		202002 000125
253 第38区	SD127	土師器	把手	—	—	(1.8)	にぶい褐色 ～淡黄色	橙色	指オサエ	—	—	やや精良。細砂 粒を含む		202002 000129
254 第38区	SD127	須恵器	坏蓋	—	—	(1.5)	にぶい 赤褐色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良	口縁部片	202002 000136
255 第38区	SD127	須恵器	壺	—	[10.2]	(1.4)	灰黄色	灰白色	ヘラケズ リ	横ナデ ナデ	工具ナデ	精良。微砂粒を 含む	底部片	202002 000134
256 第38区	SD127	須恵器	甕	—	—	(11.1)	暗赤褐色	にぶい黄色	格子目叩き	平行文叩き	—	精良。黒色粒子 を含む	口縁部片。内面灰被る	202002 000124
257 第38区	SD127	須恵器	甕	—	—	(4.0)	灰褐色	灰色	格子目叩き 波状櫛描	回転ナデ	—	精良。細砂粒を 含む		202002 000126
258 第38区	SD127	須恵器	甕	—	—	(3.6)	灰黄褐色	黄灰色	格子目叩き 貼付突帯	ハケ目 平行文叩き	—	精良。黒色粒子 を含む		202002 000149
259 第38区	SD127	須恵器	甕	—	—	(4.1)	灰色	灰オリーブ色	回転ナデ 格子目叩き	回転ナデ 青海波叩き	—	精良。細砂粒、黒色 粒子を含む	胴部片	202002 000168
260 第38区	SD127	須恵器	捏鉢	—	—	(6.8)	灰色	褐灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。黒色粒子 を含む	胴部片	202002 000165
261 第38区	SD127	瓦器	埴	[15.8]	—	(6.0)	にぶい橙色～灰色		ヘラケズ リ	ヘラミガキ ヘラミガ キ	回転ナデ 摩耗	精良。砂粒を含む	内外面に黒斑	202002 000164
262 第38区	SD127	瓦器	埴	[16.4]	—	(3.9)	灰色	灰色	回転ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	精良	口縁部片。内外面光沢 帯びる	202002 000156
263 第38区	SD127	瓦器	捏鉢	—	—	(8.0)	灰色	灰黄色	回転ナデ ハケ目	ハケ目	—	精良。細砂粒、 雲母を含む	口縁部片。摩耗著しい	202002 000169
264 第38区	SD127	瓦器	捏鉢	—	—	(4.4)	浅黄色～ 灰黄色	浅黄色	回転ナデ 摩耗	ハケ目 オサエ	—	精良。細砂粒、 雲母を含む	口縁部片。摩耗著しい	202002 000132
265 第39区	SD127	緑釉陶器	壺	—	9.0	(6.6)	明黄褐色～ にぶい橙色	灰白色	ヘラケズ リ	回転ナデ 施釉	削り出し 高台、露胎	精良。砂粒を含む		202002 000162
266 図版28	SD127	灰釉陶器	細片	—	—	(2.0)	灰白色	灰白色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	—	精良。黒色粒子 を含む		202002 000163
267 第39区	SD127	貿易 陶磁器	碗	—	—	(5.9)	明オリーブ 灰色	灰白色	回転ナデ 施釉	割花文 施釉	—	精良。黒色粒子 を含む	龍泉窯系青磁碗 I-4 a 類	202002 000166
268 第39区	SD127	貿易 陶磁器	碗	—	—	(5.4)	オリーブ灰色	灰白色	回転ナデ 施釉	櫛描文 施釉	—	精良	被熱による器壁の荒れ。 龍泉窯系青磁碗I-2または3類	202002 000154
269 第39区	SD127	貿易 陶磁器	碗	—	—	(3.6)	灰白色	灰白色	回転ナデ 施釉	櫛描文 施釉	—	精良。黒色粒子 を含む	口縁輪花状 白磁碗VII-b 類	202002 000133
270 第39区	SD127	貿易 陶磁器	合子蓋	—	—	0.25	明オリーブ灰 色	灰白色	文様あり 施釉	回転ナデ 施釉	—	精良	天井部片	202002 000167
271 第39区	SD127	貿易 陶磁器	壺	—	—	(5.5)	茶色	黄褐色～ 灰白色	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	—	精良	褐釉壺カ	202002 000143
272 第39区	SD127	古瓦	平瓦	(12.3)	(10.8)	2.6	浅黄色		布目 摩耗	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。雲母を含む		202002 000144
273 第39区	SD127	古瓦	平瓦	(13.2)	(12.2)	2.3	灰赤色～ 褐灰色	赤灰色	布目 経じ痕	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。砂粒を含む		202002 000160
274 第39区	SD127	古瓦	平瓦	(12.4)	(13.8)	3.0	淡黄色～浅黄褐色		布目。一部 ナデ消し	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。砂粒、赤 色粒子を含む		202002 000161
275 第39区	SD127	古瓦	平瓦	(11.4)	(9.6)	1.8	灰色		布目 縄痕跡	縄目文叩き スリ消し	工具ナデ	精良。砂粒を 含む		202002 000153
276 第39区	SD127	古瓦	平瓦	(5.6)	(5.3)	2.2	黄灰色		布目	縄目文叩き	ヘラ切り ナデ	精良。砂粒を 含む		202002 000150
277 第39区	SD127	古瓦	平瓦	(7.15)	(9.2)	2.4	灰白色		布目	縄目文叩き スリ消し	—	精良。褐色・黒 色粒子を含む		202002 000157
278 第39区	SD127	古瓦	平瓦	(7.3)	(6.5)	1.9	褐灰色		布目 スリ消し	斜格子目 タタキ	ヘラ切り	精良。雲母を含む		202002 000145
279 第39区	SD127	古瓦	平瓦	(9.2)	(6.3)	2.5	灰黄色		布目 スリ消し	縄目文叩き スリ消し	ヘラ切り	精良。微砂粒を 含む		202002 000139
280 第39区	SD127	古瓦	丸瓦	(9.6)	(8.8)	1.7	黄灰色		ナデ消し	布目 工具ナデ	工具ナデ	精良。細砂粒を 含む		202002 000151
281 第39区	SD127	古瓦	丸瓦	(9.7)	(6.2)	1.9	淡黄色	灰白色	縄目文叩き スリ消し	布目	ヘラ切り	精良。砂粒を 含む		202002 000127
282 第39区	SD127	古瓦	丸瓦	(6.3)	(3.1)	1.5	灰色		縄目文叩き スリ消し	布目	ヘラ切り	精良。砂粒、黒 色粒子を含む		202002 000170
283 第39区	SD127	土製品	ミニチュア 土器	—	—	(2.6)	淡黄褐色	にぶい橙色	横ナデ	横ナデ	—	精良。砂粒、雲 母を含む	外面にスス	202002 000128
284 第39区	SD127	石製品	石鍋	(4.5)	(10.9)	2.0	灰色		ケズリ	ケズリ 工具痕	—	滑石	(164.5) g 穿孔あり	202002 000140
285 第39区	SD127	石製品	砥石	(7.8)	6.6	(5.4)	にぶい褐色～ にぶい赤褐色		使用面×3	—	—	砂岩	(346) g	202002 000146

III. 調査の記録

第11表 出土遺物観察表⑩

遺物 No.	出土 遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整・文 様			胎 土 材	重量・備考	登録 番号	
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	外面 (凹面、釉薬)	内面 (凸面、胎土)	外面 (凹面)	内面 (凸面)	底面・高台 (側面)				
376 第42図	廃棄土坑 C	ガラス製品	化粧瓶	3.0	3.4	5.65	白色					精良	375と一対 胴部径：4.9cm	202002 000440	
377 第42図	廃棄土坑 C	ガラス製品	化粧瓶	—	1.6	(4.4)	無色透明		「KINTURU」		丸に星	精良	胴部径：2.1cm 断面正方形	202002 000438	
378 第42図	廃棄土坑 C	ガラス製品	化粧瓶	4.0	4.8	6.0	白色		ねじ切り		右書「メスマ ボマード」	精良	胴部径：6.0cm	202002 000437	
379 第42図	廃棄土坑 C	ガラス製品	白髪染瓶	0.9	2.25	7.2	無色透明		「るり羽」 「定量」		「3」	気泡を含む	胴部径：2.8cm	202002 000446	
380 第42図	廃棄土坑 C	ガラス製品	白髪染瓶	1.0	2.2	7.2	無色透明		「るり羽」 「定量」		「15」	気泡を含む	胴部径：2.8cm	202002 000447	
381 第43図	廃棄土坑 C	ガラス製品	インク瓶	1.6	4.1 ～4.2	5.4	黄緑色透明				「登録M」	気泡を含む 器壁凸凹	胴部径：4.7cm	202002 000427	
382 第43図	廃棄土坑 C	ガラス製品	インク瓶	2.3	4.7	6.7	無色透明				「SIMCO」	気泡を含む	胴部径：5.5cm 底部歪む	202002 000428	
383 第43図	廃棄土坑 C	ガラス製品	クリーム瓶	5.8	5.4	3.0	白色				右書「被 服協会」	精良	胴部径：7.0cm	202002 000448	
384 第43図	廃棄土坑 C	ガラス製品	鉱油瓶	1.6	5.85	16.1	黄緑色透明		「ライジンダ ン石油株式会 社」等			気泡を含む 器壁凸凹	胴部径：6.3cm 歪み著しく断面不整形	202002 000429	
385 第43図	廃棄土坑 C	ガラス製品	不明製品	[0.6]	2.2	(7.6)	濃青色透明					精良	386と同型	202002 000443	
386 第43図	廃棄土坑 C	ガラス製品	不明製品	[0.5]	2.25	(7.8)	濃青色透明					精良	385と同型	202002 000444	
387 第43図	廃棄土坑 C	ガラス製品	実験器具カ	1.2	1.2	6.65	無色透明					精良	胴部径：1.6cm	202002 000450	
388 第43図	廃棄土坑 C	ガラス製品	実験器具カ	—	0.6	(31.4)	無色透明					精良	胴部径：5.3cm	202002 000449	
389 第43図	廃棄土坑 D	磁器	湯呑	[7.8]	[3.7]	6.05	色絵		口繪 草花文		「東洋陶器會社 TOTOOKERAISHA」	精良		202002 000455	
390 第43図	廃棄土坑 D	ガラス製品	飲料瓶	2.0	5.2	22.6	薄緑色透明				五芒星 「5」	気泡を含む	胴部径：6.75cm	202002 000456	
391 第43図	廃棄土坑 D	ガラス製品	化粧瓶	1.2	3.8	11.1	無色透明		丸に鶴			気泡を含む	胴部径：4.8cm コルク栓残る	202002 000460	
392 第43図	廃棄土坑 D	ガラス製品	化粧瓶	3.2	3.6	6.0	無色透明				花椿	気泡を含む	胴部径：5.0cm	202002 000459	
393 第43図	廃棄土坑 D	ガラス製品	化粧瓶	4.65	4.8	2.95	白色		ねじ切り		縦書で 「尚美堂」	精良	胴部径：6.6cm	202002 000458	
394 第43図	廃棄土坑 F	ガラス製品	化粧瓶	4.1	4.5	5.1	白色		「マスター クリーム」		縦書で 「尚美堂」	表面縞状を 呈する	胴部径：5.2cm 底部上げ底	202002 000463	
395 第43図	廃棄土坑 H	ガラス製品	化粧瓶	1.6	2.3～ 5.4	10.1	無色透明			「永廣」		気泡を若干含む 器壁凸凹	胴部径：2.3～6.0cm 底部歪む	202002 000467	
396 第43図	廃棄土坑 H	ガラス製品	ケチャップ瓶	1.8	3.2～ 3.4	15.3	無色透明		面取り 六芒星。「カゴメ ケチャップ」		圏線 六芒星	気泡を若干含む	胴部径：4.8cm 底部上げ底	202002 000466	
397 第43図	廃棄土坑 J	ガラス製品	牛乳瓶	1.5	3.45	12.05 ～12.1	無色透明		ねじ切り 陽刻多数			気泡を若干含む	胴部径：4.8cm 底部上げ底	202002 000469	
398 第43図	廃棄土坑 J	ガラス製品	瓶詰瓶	3.7	3.5	7.5	青緑色透明		ねじ切り		上げ底	気泡を含む	胴部径：4.0～6.6cm 断面レモン形	202002 000473	
399 第43図	廃棄土坑 J	ガラス製品	薬瓶	2.4	4.1	11.8	茶色透明		「Wakamoto」		「6 NAGA 9」	精良	胴部径：4.85cm	202002 000471	
400 第43図	廃棄土坑 J	ガラス製品	インク瓶	1.8	4.6	6.5 ～6.55	無色透明				「登録M」	気泡を含む 器壁凸凹	胴部径：5.6cm 底部上げ底	202002 000470	
401 第43図	廃棄土坑 J	ガラス製品	化粧瓶	3.4	3.4	4.9	白色		ねじ切り		右書で 「尚美堂」	精良	胴部径：4.6cm	202002 000472	
402 第43図	攪乱	弥生土器	甕	—	—	(8.5)	にぶい黄褐色 ～黒褐色	にぶい 黄褐色	ハケ目 叩き	ハケ目	—	砂粒、雲母を含む	外面に黒斑あり	202002 000461	
403 第43図	攪乱	弥生土器	甕	—	—	(4.8)	にぶい黄褐色 ～黄褐色	にぶい 橙色	回転ナデ ハケ目	ハケ目	—	砂粒、雲母を含む		202002 000462	
404 第43図	攪乱	土師器	小坏	[7.8]	4.5	2.6	にぶい 橙色		回転ナデ		糸切り	精良	底部歪む	202002 000478	
405 第43図	攪乱	土師器	細片	—	—	(1.0)	灰褐色	橙色	—	ナデ	糸切り	精良	底部片接合痕残る	202002 000274	
406 第43図	攪乱	須恵器	坏蓋	—	—	(1.05)	灰黄色～黄灰色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良。微砂粒を 含む		202002 000327	
407 第43図	攪乱	古瓦	丸瓦	(8.4)	(3.4)	1.5	灰色		縄目文叩き スリ消し	布目	ヘラ切り 粘土付着	精良。微砂粒を 含む		202002 000301	
408 第43図	攪乱	ガラス製品	薬瓶	1.0	2.8	8.0	無色透明			目盛 ラベル添付枠		気泡を含む 器壁凸凹	口縁部歪む	202002 000320	
409 第43図	表採	瓦	平瓦	(11.3)	(6.3)	1.5	黒色		ナデ	滑り止め2段 印刻	—	精良。微砂粒を 含む	表面一部銀化	202002 000482	
410 第43図	表採	陶器	窯道具	[14.6]	[12.4]	5.0～ 5.2	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	回転ナデ 溶着痕	回転ナデ 指オサエ	ナデ 溶着痕	精良。細砂粒を 含む		環状器台	202002 000484
411 第44図	SD365	鉄製品	鉄滓	2.8	2.6	1.8	にぶい 赤褐色	—	鉄錆	—	—	—	11.65 g	202002 000489	
412 第44図	SF445 黒褐色土	鉄製品	鉄滓	5.4	4.6	3.2	にぶい 赤褐色	—	鉄錆	—	—	—	85.85 g	202002 000490	
413 第44図	SF445 黄褐色凸面	鉄製品	鉄滓	2.5	2.15	1.35	にぶい 赤褐色	—	鉄錆	—	—	—	11.20 g	202002 000491	
414 第44図	SF445 P6	鉄製品	鉄滓	5.7	3.3	2.7	にぶい 赤褐色	—	鉄錆	—	—	—	46.15 g	202002 000492	
415 第44図	SD127	鉄製品	方形 破片	(3.4)	2.1	0.3	にぶい 赤褐色	—	鉄錆	—	—	—	8.05 g	202002 000485	
416 第44図	SD127	鉄製品	鉄片	(3.2)	1.9	0.25	にぶい 赤褐色	—	鉄錆	—	—	—	(3.45) g 鎌の刃先カ	202002 000486	
417 第44図	SD127	鉄製品	鉄滓	(3.9)	(3.8)	1.7	にぶい 赤褐色	—	鉄錆	—	—	—	35.75 g	202002 000488	
418 第44図	SD127	鉄製品	鉄滓	2.9	2.1	0.9	にぶい 赤褐色	—	鉄錆	—	—	—	7.10 g	202002 000487	
419 第44図	廃棄土坑 D	金属製品	硬貨	1.9	1.9	0.1	緑青		菊花 緑青著しい	「五…」 緑青著しい	—	穿孔あり 重量：2.0 g	5銭アルミ銅貨 1938～1940	202002 000493	
420 第44図	攪乱	金属製品	硬貨	1.7	1.7	0.15	銀色		菊花 「一銭」	「大日本」 「昭和十四年」	刻み目	重量：0.9 g	1銭アルミ貨 1938～1942	202002 000494	

IV. 総 括

1. はじめに

310 次以上に及ぶ筑後国府跡の発掘調査で、西上ノ原地区の調査は第 296・310 次調査と本書に収録した第 298 次調査のみである。また、調査面積が 1,000 m²以上の発掘調査も、開発に伴う調査に限れば、平成 20 年（2008）の第 227 次調査（注1）以来のことである。弥生時代から近代に及ぶ多種多様な遺構と遺物を発見し、古代に収まらない複合的な遺跡の様相を示す。

ところで、第 298 次調査の北隣では、令和 3 年に第 310 次調査を実施している。隣接しあう第 298・310 次調査を同時に報告し、一まとめに総括を行うべきだが、諸般の事情で第 310 次調査の整理作業は完了していない。そこで本章では、第 298 次調査で検出された主要遺構の変遷を概観するだけに留めた。周辺の遺構との関連や、出土遺物の特徴、国府域内における位置づけといった詳細な検討は、第 310 次調査の総括で行うこととしたい。従って、第 310 次調査の総括では、第 298 次調査の成果が本章の記述と異なる可能性がある。

2. 遺構の変遷について

第 298 次調査で検出された遺構と遺物は、弥生時代後期と古代（7～11 世紀）、中世（12～14 世紀）、近世後期（19 世紀後期）、昭和初期（20 世紀前期）に大別できる。これらの主要遺構を、前後関係や方位、遺物の年代などから変遷を整理したものが第 12 表と第 45～47 図である。混入遺物も多く、わずかな出土遺物から、遺物による年代決定が困難な遺構も少なくない。そのため、前後関係や方位、遺構の深さなどから、同一時期または別時期の遺構と判断した点もある。

第 1 期

第 298 次調査で検出された遺構で最古相の遺構で、竪穴住居 S I 20 と土坑 S K 154 が挙げられる。S I 20 は残存状況が悪いが、ピットの位置と段の規模から、一辺約 4.5 m の規模に復元できると考えられる。調査区の間が 4.5 m 離れている第 310 次調査で、S I 20 の続きを検出していない点も、このことを裏付ける。その年代は、出土した甕の底部が若干膨らんでいる個体と平底の個体が混在する点や、大甕の年代が甕棺の K V 式に収まる点などから、下大隈式土器段階、つまり弥生時代後期の中頃から後半に収まると考えられる（注2）。筑後国府跡では、本調査地点の北方に位置する古

第12表 第298次調査主要遺構の変遷

国府以前		国 府 並 行				国 府 以 降				
第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	第 7 期	第 8 期	第 9 期	第 10 期	第 11 期
S I 20	S P 139 (遺物)	S D 115	S F 445 S X 440	S D 190 S D 140	S D 160 S D 170	S D 1 S K 241	S D 2 S D 40	S D 127 S X 372	S T 5～11 ・ 15	廃棄土坑 A～D・H ・ J
S K 154	断層跡 地割跡	S I 133 S K 80 S K 85	S D 365 S D 405	S K 400	S D 453 S D 446	S D 160 S D 215	S K 235 S D 60 S D 50	S X 373	S P 30	
			S A 252	S D 475				S P 16		
			S P 210	S D 120			S K 14			
		S X 150	S X 125	S D 156	S D 155		S P 35			
			S D 165							

IV. 総括

宮地区や大林地区で長さ 400 m 以上、幅 6.5 m の大溝が検出されており、大溝に沿うように弥生時代後期後葉から古墳時代早期の竪穴住居が 100 基以上検出されている（注3）。第 298 次調査地点周辺に目を向けると、道路を挟んで西に位置する第 64 次調査地点で弥生時代後期から終末期の掘立柱建物や竪穴建物、土坑が検出された（注4）。第 298 次調査でも攪乱からの出土だが、タタキを有する甕が出土している。古宮地区や大林地区で大溝を伴う大規模な集落が営まれたのと同時期に、葉山地区でも終末期の遺構が営まれたことが指摘されてきたが、今回の調査でその年代が後期後葉まで遡り、分布も西上ノ原地区まで及んでいたことが明らかになった。

土坑 S K 154 は、フラスコ状の断面を有する貯蔵穴である。筑後国府跡では、第 58 次調査でもフラスコ状の断面を有する S K 2762 が検出されており（注5）、わずかな弥生土器の細片と石製品から



第45図 第1～4期主要遺構配置図 (1/400)

弥生時代後期後半に比定されている。S K 154 は出土遺物が皆無だが、S K 2762 の年代から、S I 20 と同じ弥生時代後期に収まる可能性がある。

第2期

S P 139 から出土した、丹塗りを施す土師器坏と地震痕跡が該当する。S P 139 はS D 140 に後出するので、土師器坏は混入品である。その年代は、7世紀前半まで遡ると考えられる(注6)。調査区の北方には断層崖があり、第87・93・105・222・241次調査では、6世紀後半～7世紀初頭の竪穴建物群が検出されている(注7)ほか、西隣の葉山地区では、第92次調査で7世紀末の土坑(注8)、第106次調査で7世紀後半の土坑が見つかった(注9)。出土した土師器坏は1点のみだが、7世紀の遺構が調査地点の周囲にも広がっていた可能性を示唆する。

地震痕跡は、調査区の北端で断層跡を、南部中央で地割跡を検出した。断層崖に位置する第296次調査では、千本杉断層の本体とみられる不整合が検出されている(注10)。今回検出した地震痕跡のうち、断層跡は後出する遺構から12世紀以前、地割跡は単独で検出したため年代不明だが、『日本書紀』天武天皇7年(678)12月条に記述がある「筑紫地震」に伴う可能性が高い。

第3期

S I 133 とS K 80・85 が挙げられるほか、出土遺物からS D 115 とS X 150 もこの時期に加えた。S I 133 は突出部に焼土が分布し、炉を有する構造だったことは明白だが、出土遺物に乏しく、その用途ははっきりしない。黒色土器A類の細片も出土しているが、土師器の坏蓋など古相の遺物が大半を占める。筑後国府跡では、8世紀後半までに竪穴建物が終焉するという指摘があり(注11)、S I 133 の年代も坏蓋の形状から、8世紀後半に収まると見られる。S K 80・85 は、出土遺物が相互に接合したことから、並存した可能性が高い。出土遺物が土師器と須恵器のみで構成されており、口縁部が退化した坏蓋や、筑後型の土師器坏があることから、これらの年代も8世紀後半に収まるとみられる(注12)。このほか、S D 1・2・120・127・140・165、S F 445 から多数の須恵器が混入しており、S D 1 出土の坏やS K 400 出土の坏などのように、8世紀前半まで遡る須恵器もある。8世紀中頃に阿弥陀地区へ国府域が移転する前後に、まとまった数の遺構があったことが想定できる。

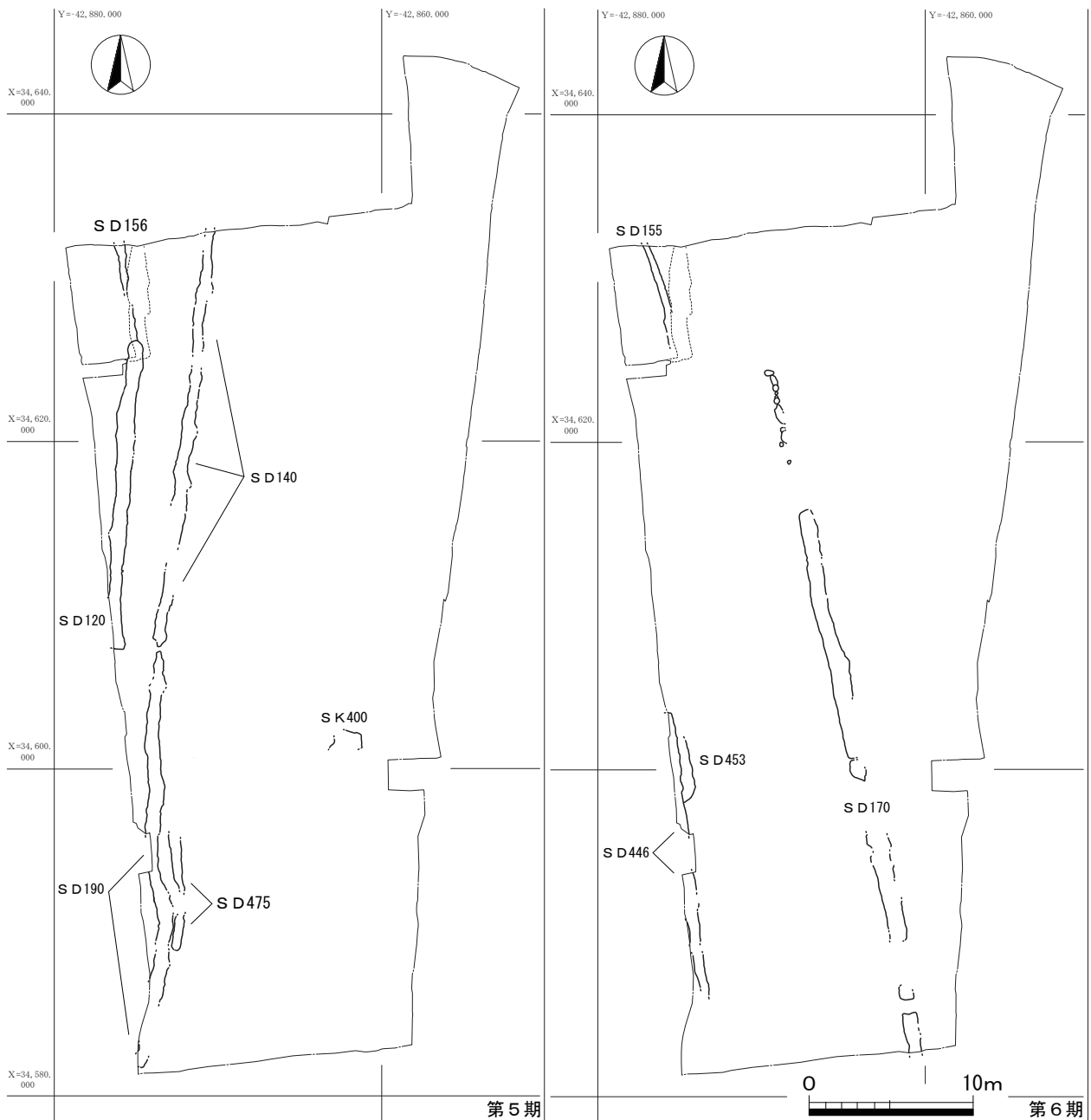
なお、S D 115 とS X 150 も出土遺物が土師器と須恵器に限られることから、この時期に収まる可能性がある。S D 115 は大半が調査区外に及ぶため、その性格は不詳である。S X 150 は埋土が硬化しているが、道路跡とみられる溝から外れており、道路に伴う硬化面とは考えにくい。

第4期

S F 445 と並走するS D 365・405、延長上のS X 440、S F 445 と方位が同じS A 252、およびS D 165 とS P 210・375、S X 125 が該当する。S F 445 は、調査前には想定もしていなかった道路である。S D 365 やS F 445 の掘方から、黒色土器A類や緑釉陶器の細片が出土しており、その年代は9世紀代に収まる。ただし、須恵器の出土が目立つ点、土師器甕が頸部内面の稜線が不明瞭な8世紀代の特徴を有する(注13)点から、道路の築造が8世紀まで遡る可能性もある。北側の三反野地区に位置する第87・246次調査地点では、鉄滓や轆羽口などの鍛冶関連遺物が8世紀から9世紀前半に

IV. 総 括

かけて集中して出土している(注14)。SD 365 とSF 445 でも、微量だが鉄滓が出土しており、8世紀後半まで遡る可能性を示唆する。年代の上限は、硬化面直上から器高が低い黒色土器B類壺が出土した点、黒褐色土から糸切底の土師器小皿が出土した点から、10世紀に及ぶ可能性も残る。SA 252 は、黒色土器A類壺の口縁部が外反しない点や、SP 375 から須恵器壺の肩部が出土した点から、9世紀の遺構と判断した。こうしたピット群が列状に集中する「ピット列(注15)」は、筑後国府跡の各地で8～10世紀にかけて検出されており、第84・98・219・244・249・289次調査(SA 3610・4015・219 SA 40)と第158・198次調査では、SA 252と同様にピット列が折れ曲り、区画を構成する。これらの遺構は、道路遺構の近辺で検出されること(注16)から、道路遺構と同時期に併存する圍繞施設である可能性があり、第289次調査では生垣痕跡と想定されている(注17)。SD 165はSD 140が



第46図 第5・6期主要遺構配置図(1/400)

後出し、滑石製石鍋の破片が出土したことから（注18）、9世紀より古くならないと判断した。S P 210の年代も、土師器壺の形状から、9世紀前半に収まると考えられる。調査区北西部で検出したS X 125は、緑釉陶器水注の把手部の破片が出土したことから、この時期に加えた。もっとも出土遺物が僅少であるため、より後世の道路に伴う可能性も残る。

第4期の遺構が属する9世紀は、8世紀後半に阿弥陀地区へ移転した政庁（Ⅱ期政庁）が築地と脇殿を解体して改築され、柿ノ内・ギャクシ・風祭・井葉地区に国司館が設置される（注19）など、国府域で大規模な開発が行われる時期である。第4期の遺構は、こうした国府域の開発に伴って築かれた可能性がある。なお、S F 445のようにピット列を伴う道路は、官道以外の道路に伴うことが指摘されている（注20）。また、S F 445の方位はN-80°-Wで、真北や東西方向でもなければ、山川・東合川条里区の方位N-16°-E（注21）にも沿わない。S F 445は、字名から御井駅の所在地に比定されている葉山地区に向かっており、葉山地区の遺構を交えた検討が今後の課題である。

第5期

S D 140と延長上のS D 190、ほぼ同じ方位のS D 120・475、S D 156とS K 400が挙げられる。S D 140出土の土師器皿やS D 190出土の土師器壺の形状から、年代は9世紀後半が下限で、10世紀代に収まる。S D 140・190は合計約50m以上に及ぶ。調査地点は国府域と国分寺を結ぶ連絡道路の存在が指摘されており（注22）、S D 120やS D 140・190は、その側溝と想定できる。S D 120とS D 140は芯心距離4～5mを測り、方位も異なることから、S D 120・140・190は同時に並存せず、時期差がある道路東側の側溝と考えられる。これらの溝と対になる道路西側の側溝は、調査地点の西側に位置する可能性が高い。

S D 156は極端に深くなるため、S D 165と対になる可能性もあるが、出土した土師器壺がより新相でS D 140出土遺物に類似するため、この時期と判断した。S D 475はS D 190と並走して蛇行し、出土した土師器壺が端反で、高台が低い黒色土器A類壺を伴うため、この時期に収めた。S K 400は、検出した場所からS F 445に後出することや、土師器壺の形状、黒色土器A類壺の出土から、同時期の土坑と判断した。出土遺物から廃棄土坑と見られるが、道路沿いに集落があったことを窺わせる。

第6期

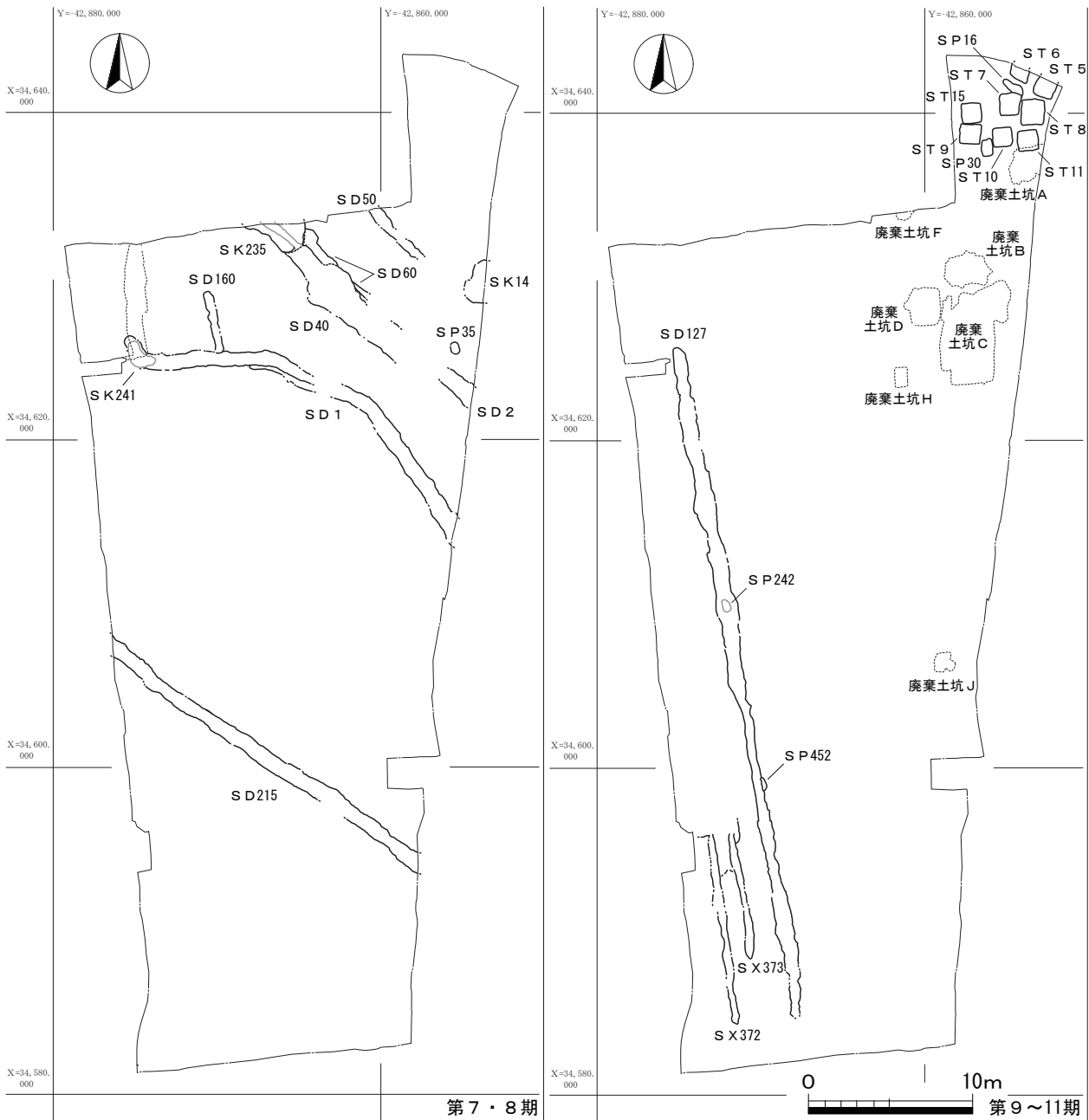
S D 170と延長上のピット群、S D 190に後出するS D 453、S D 453に後出するS D 446、S D 156に後出するS D 155が該当する。溝の方位が東寄りから西寄りに変わり、調査区西隣の字界を兼ねる道路と同じ方位を向く段階である。S D 446以外は比較的浅く、出土遺物は土師器と須恵器、黒色土器A類、古瓦で占められることから、年代が最もはっきりしない時期である。第5・7期の遺構の年代から強いて言えば、10世紀でも比較的新相と想定できる。その用途は、第5期と同様、道路の側溝と考えられる。S D 160・170とS D 446は若干方位が異なり、深さも異なる。間隔も約10.5～11mで、並存した側溝とは考えにくい。S D 160・170は削平されて途切れる箇所があることから、対になる側溝は完全に削平されて残存しない可能性がある。

10世紀中頃には、阿弥陀地区にあったⅡ期政庁が火災で廃絶し、朝妻町の三丁野地区に政庁が移

転する。このⅢ期政庁への移転に伴い、国府域と国分寺を結ぶ道路が東寄りから西寄りに変更された可能性が窺える。同時期の道路跡は第310次調査でも検出しており、その報告で改めて検討する。

第7期

SD 1・215 とSK 241、SD 1に後出するSD 160 が該当する。これまで述べた道路の側溝とみられる溝を、突如横切る溝が開削される時期である。SD 1の年代は、へら切り底の土師器小皿から、10世紀後半～11世紀に収まる。SK 241は細片ばかりで年代は不明だが、SD 1の底面で検出したことから、同時期の遺構である可能性が高く、溝の端の溜桝といった用途が想定できる。SD 215は、出土した土師器の坏や皿がへら切り底で、施釉陶器や越州窯系青磁碗など9・10世紀代の遺物も出土したが、瓦器塚や底面から出土した白磁碗Ⅳ類から、12世紀前半から中頃が年代の上限



第47図 第7～11期主要遺構配置図 (1/400)

となる。筑後国府跡では、政庁の移転に伴い官道が変更された例が報告されている（注23）ほか、10世紀中頃の政庁移転後、阿弥陀地区では11世紀に入るまで遺構の空白期がある（注24）。SD 1・215の存在は、阿弥陀地区と国分寺を結ぶ道路が一時廃絶した可能性を示唆する。

第8期

調査区の北東部に遺構が集中し、SD 2・40とSK 14・235、SP 35、出土遺物に乏しいものの方位がSD 2・40と同じSD 50・60が挙げられる。このうち、SD 60とSD 40、SK 235は前後関係にある。口縁部に刻み目を施す土鍋や、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の出土から、遺構の年代は12世紀後半に収まる。ただし、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類は、筑後地方において13世紀前半まで使用されたという指摘があり（注25）、SD 40とSK 235の前後関係は、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類が使用された期間の長さから起因する可能性がある。また、SP 35からは口縁部が上下に延びる、12世紀後半から13世紀初頭の須恵器捏鉢が出土しており（注26）、同時期の遺構と判断した。

第9期

SD 127とSX 372・373、SP 16が挙げられる。SD 127は、土師器土鍋や龍泉窯系青磁碗といった12世紀後半の遺物が大量に出土した一方で、須恵質や瓦質の捏鉢が出土しており、14世紀が年代の上限となる（注27）。龍泉窯系青磁碗が出土したSP 242や土師器土鍋が出土したSP 452に後出することも、これを裏付ける。方位がSD 127と同じSX 372・373は、重複する遺構に後出し、SD 127に伴う硬化面と考えられる。SD 127とSX 372・373の方位は第6期の溝と同一で、道路が再び調査地点に及んだことを示唆する。土師器播鉢が出土したSP 16も、同時期の遺構と言える。

第10期

調査区北東部の近世の土壇墓ST 5～11・15、SP 30が該当する。ST 6以外は完掘せず、ST 6からも副葬品は出土していない。わずかに出土した陶磁器の年代は、19世紀以降に比定できる。第298次調査地点の北方約70mには、天保年間～明治時代にかけての墓石が並ぶ墓地があるが、今回検出した近世墓群は地表に痕跡が全く無かった。ただし、調査地点の北東隣地には図版12（5）に示したように、墓石や石灯籠を転用した石列がある。墓石の形状は19世紀の特徴を有し、複数の墓石には「明治十丑年」（1877）や「明治十六年」（1883）の紀年銘が彫られていた。これらの墓石が今回検出した土壇墓群で使われていたとすれば、その年代は19世紀に収まると考えられる。

第11期

調査区東部の近代廃棄土坑群である。出土遺物に乏しい廃棄土坑F・Hは大正時代まで遡る可能性が残るが、遺物の大半が昭和に入ってから製造・発売された製品である。このことから、これらの廃棄土坑の埋没年代は昭和初期、特に昭和10年代に収まると考えられる。すでに指摘されている（注28）が、昭和初期の久留米を物語る資料は、昭和20年代の戦災や水害で大部分が失われている。発掘調査で出土する遺物でも、歴史史料や民俗資料と同じ貴重な資料群であることに変わり無い。

【注】

- （1）久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第227・234・237次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第315集 平成24年
- （2）弥生土器の年代は、下記の文献を参考にした。

IV. 総括

- 片岡宏二「弥生時代後期の土器編年について ―特に三国丘陵の資料を中心に―」 小郡市教育委員会『三沢栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ』小郡市文化財調査報告書第23集 昭和60年
- 樋口達也「南筑後における甕棺の編年」 瀬高町教育委員会『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書第3集 昭和60年
- 福岡県教育委員会『日永遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集 平成6年
- 立石雅文「下大隈式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善通・編『日本土器事典』 雄山閣出版 平成8年
- 田子森千子「筑後川中流域における弥生後期土器について」 七隈史学会『七隈史学会第17回大会研究発表資料集』平成27年
- (3) 久留米市史編さん委員会・編『資料編 考古』久留米市史第十二巻 久留米市 平成9年
- (4) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 昭和60年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第46集 昭和61年
- (5) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 昭和59年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第44集 昭和59年
- (6) 遺物の年代については、下記の文献を参考にした
- 久留米市教育委員会『白口経塚遺跡 一第4・5・6次調査一』久留米市文化財調査報告書第147集 平成10年
- 久留米市教育委員会『旗原遺跡 一第2次調査一』久留米市文化財調査報告書第171集 平成13年
- 大庭孝夫「堂畑遺跡周辺における7世紀後半～8世紀末の土師器の変遷」 福岡県教育委員会『堂畑遺跡Ⅲ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集 平成17年
- (7) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第222・229・243次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第295集 平成22年
- (8) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 平成2年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第67集 平成3年
- (9) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 平成3年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第70集 平成4年
- (10) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第245・246・296次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第435集 令和4年
- (11) 神保公久「筑後国府と周辺の堅穴建物」九州古文化研究会『古文化談叢』第65集(4) 平成23年
- (12) 以下、土師器や黒色土器、須恵器、瓦器、陶磁器の年代は、注に示した文献に加えて、下記の文献を参考にした。
- 松村一良「筑後国府跡の調査」(財)古代学協会『古代文化』第35巻第7号 昭和58年
- 山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器 -10～12世紀の資料(1) 本文編-」日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 昭和63年
- 山本信夫「北部九州の土器」大川清・鈴木公雄・工楽善通・編『日本土器事典』 雄山閣出版 平成8年
- 横田賢次郎「大宰府の土器」大川清・鈴木公雄・工楽善通・編『日本土器事典』 雄山閣出版 平成8年
- 山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性10 -九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 平成9年
- 山本信夫「研究ノート 大宰府出土施釉陶器の編年について」国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集 平成11年
- 白木守・近澤康治「筑後における初期貿易陶磁の様相」日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』第20号 平成12年
- 太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集 平成12年
- (13) 山本信夫「古代前期の煮炊具 一筑前・筑後・豊前・豊後・肥前一 古代の土器研究会『古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東4 煮炊具一』 平成8年
- 中島恒次郎「大宰府における土師器甕の変遷」大分・大友土器研究会『大分・大友土器研究会論集』 平成13年
- (14) 注10文献と同じ。
- (15) 神保公久「筑後国府の道路遺構」九州大学考古学研究室『九州と東アジアの考古学 -九州大学考古学研究室50周年記念論文集一』 平成20年
- (16) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 第198次発掘調査報告』久留米市文化財調査報告書第206集 平成17年
- (17) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第219次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第259集 平成19年
- 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第289次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第392集 平成30年
- (18) 木戸雅寿「石鍋」中世土器研究会・編『概説 中世の土器・須恵器』 真陽社 平成7年
- 東貴之「桶状石鍋について -木戸編年I類の現状-」九州考古学会『平成24年度九州考古学会研究発表資料集』平成24年
- (19) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 一Ⅱ期政庁地区一』久留米市文化財調査報告書第399集 令和3年
- (20) 注15文献と同じ。
- (21) 樋口一成「筑後川河南の条里制」久留米市史編さん委員会『久留米市史』第1巻 久留米市 昭和56年
- (22) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 平成5年度発掘調査概報』久留米市文化財調査報告書第89集 平成6年
- (23) 松村一良「筑後地方を縦断する古代駅路」博物館等建設推進九州会議『文明のクロスロード Museum Kyusyu』第9号 昭和58年
- (24) 注19文献と同じ。
- (25) 小野裕子「海を渡った陶磁器と土師器の交差点 一両筑平野周辺の貿易陶磁器と土師器の相伴関係一」九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター『大宰府史跡指定100年と研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第2集 令和3年
- (26) 森田稔「中世須恵器」中世土器研究会・編『概説 中世の土器・須恵器』 真陽社 平成7年
- (27) 楠瀬慶太「日用雑器類から見た中世博多の土器様相 一調理具を中心として一」日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』22 平成21年
- (28) 久留米市教育委員会『鉄砲小路遺跡 一第2次調査一』久留米市文化財調査報告書第273集 平成20年

写 真 图 版



(1) 第298次調査前全景 (北から)



(2) 第298次調査区北西部全景 (南上空から)



(3) 第298次調査区北東部全景 (南上空から)

図版 2



(1) 第298次調査区南部全景 (西上空から)



(2) 第298次調査区西部全景 (西上空から)



(1) 調査地点から北方を望む (南上空から)



(2) 調査地点から南方を望む (北上空から)

図版 4



(1) S I 20遺物出土状況 (西から)



(2) S I 20貼床検出状況 (南東から)



(3) S I 20完掘状況 (南東から)



(4) S K 154完掘状況 (東から)



(5) S A 252東部完掘状況 (北西上空から)



(6) S D 1東部完掘状況 (北西から)



(7) S D 1西部完掘状況 (東から)



(8) S D 115完掘状況 (南東から)



(1) SD120完掘状況 (北から)



(2) SD140完掘状況 (北西上空から)



(3) SD140北端・SD165土層 (南西から)



(4) SD165完掘状況 (北西から)



(5) SD155・156完掘状況 (南東上空から)



(6) SD160礫出土状況 (西から)



(7) SD170完掘状況 (北西から)



(8) SD190・453・446・475完掘状況 (北東上空から)

図版6



(1) S D190・446・475、S X372土層 (北から)



(2) S D190北端遺物出土状況 (東から)



(3) S D215北西部完掘状況 (南東から)



(4) S D215中央部完掘状況 (南東から)



(5) S D215南東部完掘状況 (北西から)



(6) S D215土層 (北西から)



(7) S D405東部土層 (東から)



(8) S F445硬化面・波板状凹凸面検出状況 (北西から)



(1) S F 445波板状凹凸面P10土層 (南東から)



(2) S F 445波板状凹凸面礫出土状況 (南東から)



(3) S D 365・S F 445完掘状況 (北西から)



(4) S I 133検出状況 (東から)



(5) S I 133焼土土層 (西から)



(6) S I 133完掘状況 (西から)



(7) S K 80・85完掘状況 (北西上空から)



(8) S K 241検出状況 (南西から)

図版 8



(1) S K241完掘状況 (西から)



(2) S K400完掘状況 (北東から)



(3) S P210遺物出土状況 (北から)



(4) S P375遺物出土状況 (北西から)



(5) S X125検出状況 (北から)



(6) S X125土層 (東から)



(7) S X150検出状況 (南西から)



(8) S X150土層 (南東から)



(1) SD 2 完掘状況 (北西から)



(2) SD 2 土層 (北西から)



(3) SD 2 遺物・礫出土状況 (南東から)



(4) SD 2・40・60 完掘状況 (北東上空から)



(5) SD 40・60 南東部完掘状況 (南東から)



(6) SD 40・60 北西部完掘状況 (南東から)



(7) SD 40 南東部土層 (南東から)



(8) SD 50 完掘状況 (南東から)

図版 10



(1) S D127北部～中央部完掘状況 (北西から)



(2) S D127南部完掘状況 (北西から)



(3) S D127中央部礫出土状況 (東から)



(4) S D127中央部土層 (北西から)



(5) S K235完掘状況 (北東から)



(6) S K235・S D40西部土層 (南東から)



(7) S P35遺物出土状況 (北東から)



(8) S P173遺物出土状況 (南西から)



(1) S X372・373検出状況 1 (西上空から)



(2) S X372・373検出状況 2 (北西から)



(3) S X372・373北端検出状況 (南から)



(4) S X372南端土層 (北から)



(5) 近世墓群近景 (東上空から)



(6) S T 5 掘削状況 (南西から)



(7) S T 6 完掘状況 (北から)



(8) S T 8 掘削状況 (東から)

図版 12



(1) ST9掘削状況 (西から)



(2) ST10掘削状況 (南から)



(3) ST11掘削状況 (東から)



(4) ST15掘削状況 (西から)



(5) 調査区隣接地の墓石転用石列 (南西から)



(6) S X175埋甕出土状況 (北東から)



(7) 断層跡検出状況 (西から)



(8) 地割痕断面 (南東から)

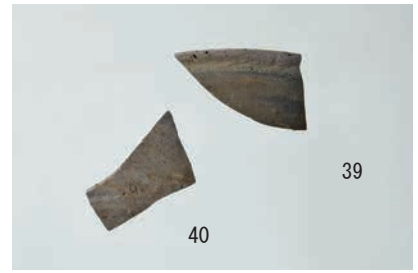


出土遺物 1

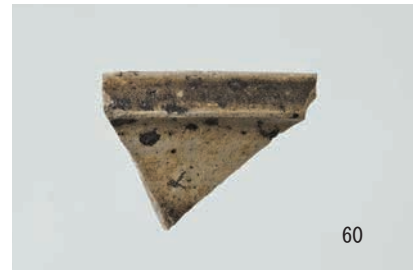
图版 14



出土遺物 2



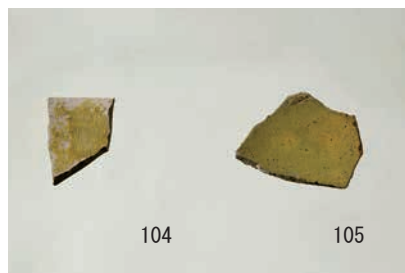
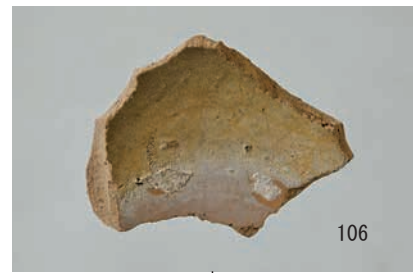
图版 16



出土遺物 4



图版 18



出土遺物 6

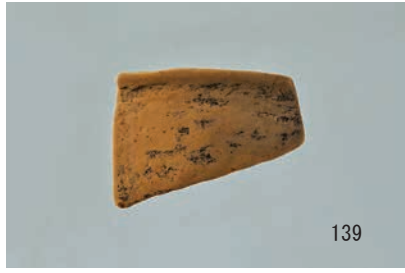


出土遺物 7

图版 20

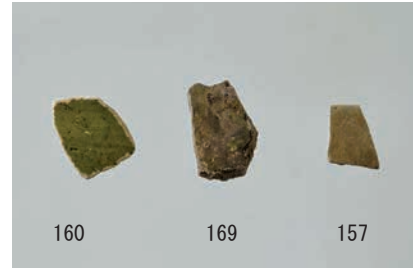


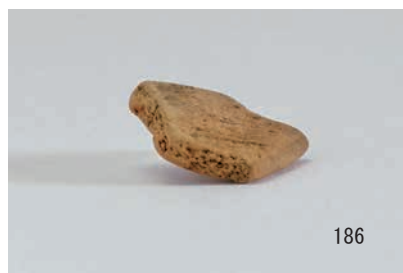
出土遺物 8



出土遺物 9

图版 22

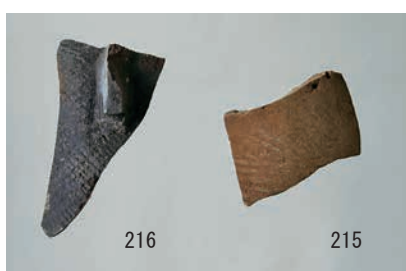




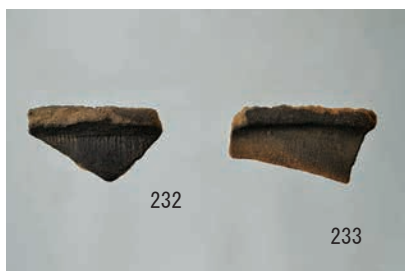
出土遺物11

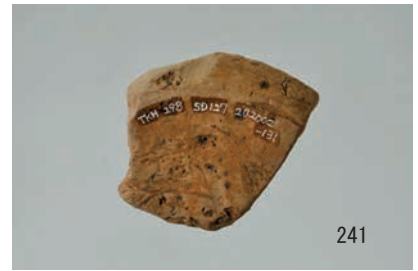
图版 24





图版 26





出土遺物15

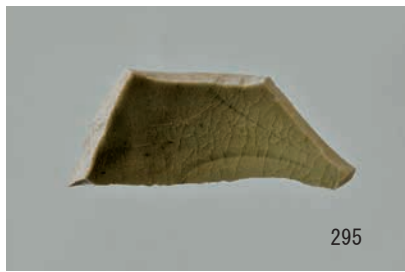
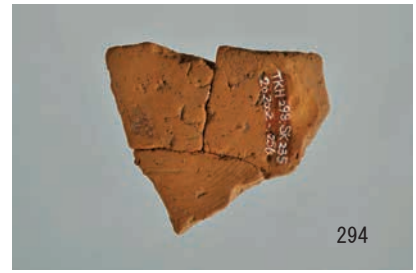
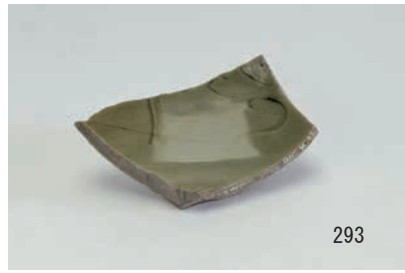
图版 28





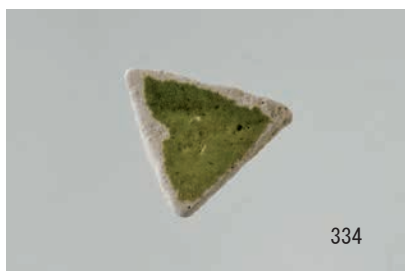
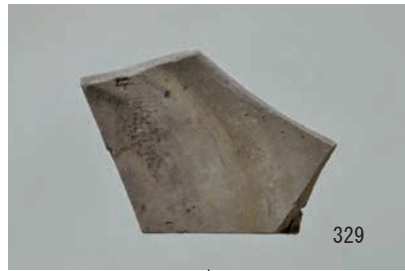
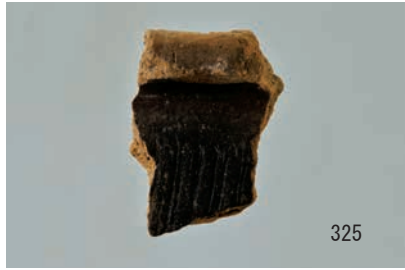
出土遺物17

图版 30





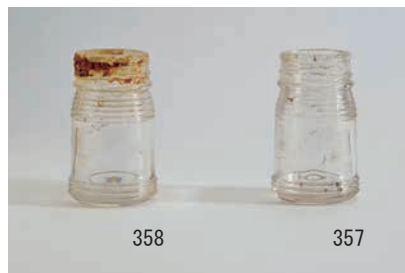
图版 32

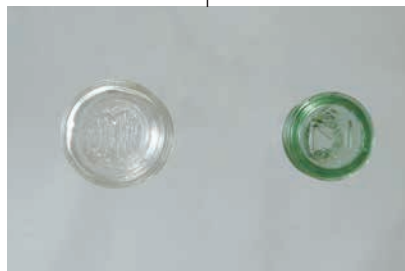
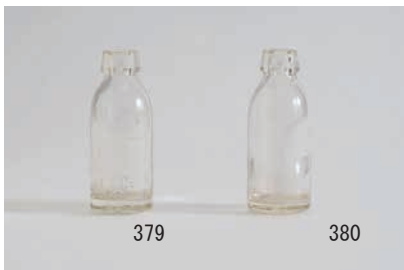
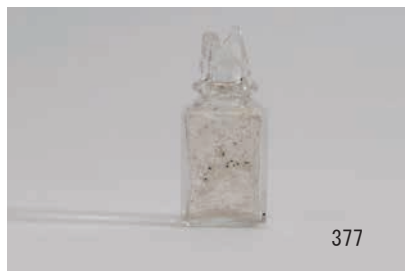




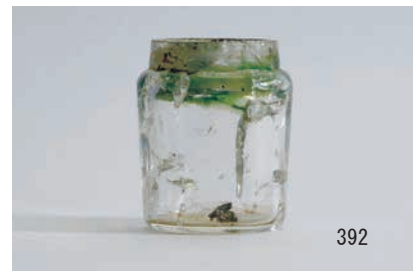
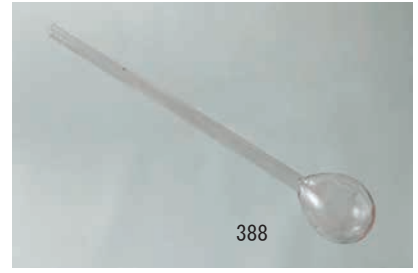
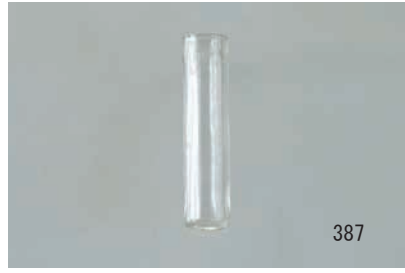
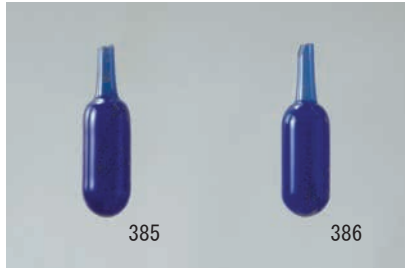
出土遺物21

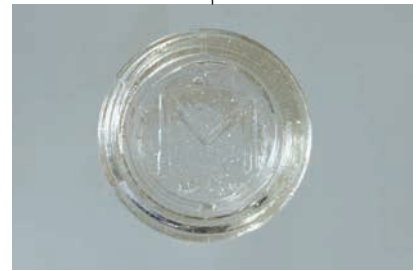
图版 34



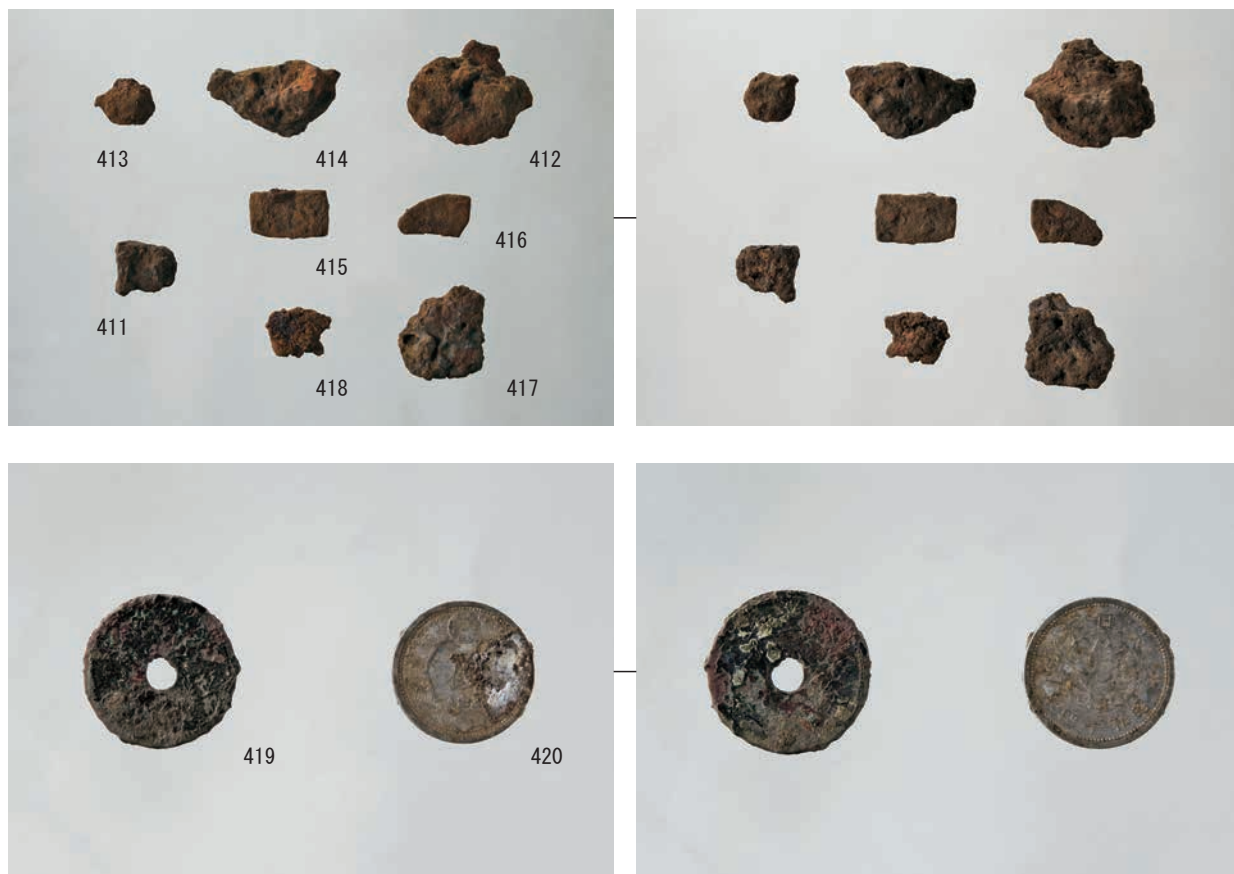


図版 36





图版 38



出土遺物26

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちくごくふあと ーだい298じはくつちようさほうこくー
書 名	筑後国府跡 ー第298次発掘調査報告ー
副 書 名	中環状道路整備事業『都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線』に伴う埋蔵文化財発掘調査(5)
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第437集
編 著 者 名	西 拓巳
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 E-mail: bunkazai@city.kurume.lg.jp
発行年月日	2022(令和4)年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 だい じちようさ 第298次調査	ふくおかけんくろめしあいかわまち 福岡県久留米市合川町 65-3、65-4、65-5、 65-6、66-3、66-4、 66-5	40203	30112	33° 18' 40"	130° 32' 22"	20200507 , 20201210	1,073m ²	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
筑後国府跡 第298次調査	集落	弥生 古代 中世 近世 その他	竪穴建物 1基 土坑 1基 柵列 1条 溝 16条 道路遺構 1基 竪穴建物 1基 土坑 4基 波板状凹凸面 1基 硬化面 3基 溝 5条 土坑 2基 硬化面 2基 土壇墓 8基 埋甕 1基 地震痕跡	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、古瓦土製品、石製品、金属製品、ガラス製品	古代～中世の道路跡とみられる溝と、波板状凹凸面を伴う古代の道路遺構を検出した。

要 約

筑後国府跡は、高良山の麓の中位段丘から低位段丘に位置する、弥生時代から中世を中心とする遺跡である。調査地点は筑後国府跡の南西部、西上ノ原地区にあたり、標高は約19mを測る。調査地点西隣を南北方向に走る道路は、字界を兼ねることなどから、古くからの道路、特に筑後国府と筑後国分寺を結ぶ道路である可能性が指摘されている。今回の発掘調査では、この道路に並走する古代と中世の溝を検出し、この道路が少なくとも古代まで遡る可能性を示した。さらに、この道路跡よりも古い段階の北西-南東方向の道路遺構も検出し、南北方向のみならず東西方向にも古道があったことが明らかとなった。

土木工事の通知日	平成19年6月12日	遺物の発見通知日	令和2年12月14日 (2文財第1897号)
----------	------------	----------	---------------------------

筑後国府跡

—第 298 次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第 437 集

令和 4（2022）年 10 月 31 日 発行

発 行 久留米市教育委員会

編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印 刷 永松印刷

久留米市中央町 20-22